A

FIRST-READER

FOR

HOME STUDENTS

OF THE

Japanese Language

自修生用

日本語讀本

甲

エチ・ヴ井・エス・ピーク編

警醒社書店

United Theological Seminary Library
REF Ref. Z473.S35 1985 Smith, Sally Christian writers' market
3 0645 0009 8518 0

A

FIRST READER

FOR

HOME STUDENTS

OF THE

Japanese Language

Compiled by

H. V. S. PEEKE, D.D.

LIBRARY OF
Bonebrake Theological Seminary
PL
539
.P44
1914
22,290

KEISEI SHA

1914

自修生用

日本語讀本 甲

目次

第一編 福音の話……（自第一章至第四章）……頁數一
第二編 通俗福音物語……（第九章）……七五
第三編 子供の權利……（自第一章至第四章、自第十一章至第十三章）……一三三
第四編 二十世紀の日曜學校……（自第一章至第七章）……一五九
第五編 幼年教育百話……（第六、七、十一、廿六、四九、五五、七二、七三）……二一七

LIBRARY

第壹編

福音の譚

チヤールス、フォスタル著

第壹編　福音の譚

第壹章

神穹蒼と地を創造給ひし事

神最初の人を男女に造り之をエデンの園におき給ひし事

サタン此二人を惑はして神に背かせたる事

○神はわれ〳〵が目に見ることの出來ないところの天に在すけれども此の世に住んでゐる我儕をよく見我儕の爲ることも話すことも皆よく悉く見たり聽たりなされます。また心で考思る事までもみなよく知つてゐられます。なせならば知らざるところなき神でございます。天地とそのなかのあらゆる物を創造ました者は神でござります、この

てもよろしいが唯この一つの木の實は食べてはならぬ、もしこれを食べればきつと死ぬとまうされました。固より此の園の中には澤山の樹木や菓物がありました故彼等はその一本の菓を食べずともそれほど不自由なことはないはずでござります、そこで彼等が神の命をわするゝかあるひは過ちてその實を採らないやうに神はその木の名を善惡をしるの樹であるぞというてやがて彼の二人をつれて園の眞中にあるその木の生へてをるところに往つてこれを見せたまひました。

○天に在す神のまへには衆多の天の使者等が仕へてをりますこの使者等は元やはり神につくられたものでござりますがその有樣は我儕とちがつて常に幸福なもので決して惡事をせずたゞ神の命によくしたがつてをるものでござりますしかし最古時天の使者のうちにあるものが惡をいたし神の賦與へたまへるだけの幸福で滿足せず又神に

神は晝をてらす日と夜をてらす月や星をつくられました。また神は世界をつくられましてそのなかに鳥獸魚草木また花類などをつくられ其の後に人類をつくられました。その始につくられました人の名は男をアダム女をエバとまうしましたがこの人等の創造れました時代には世界中に人と申すは唯この二人ばかりで他に人はござりませんでした、神はアダムとエバとを住まはせんために園を設けたまひました、園とまうすものは花木を植ゑた奇麗なところでござります、かくべつに神のつくられた此の園は世間に多くある園とは異うて頗る華美しいものでござりましたらうこの園の名をエデンの園と稱しましたまたこの園の中には花ばかりではなく食物になる菓物のなる樹木もあつてその中にはいろ〳〵の菓物がござりました。さてそこで神がアダムエバに仰せられますには此の園のなかの各種の菓物をたべ

せん。

さて此のサタンは神がアダムエバを造られました事とまたその二人は美園に住んで善なる者にてよく神に使へまことに幸福の有様にあることを知つて己は悪しく且不幸なる有様の者なれば人も己のやうな不幸福の者にならせやうと思ひ且又神が前にアダムとエバとに園の中心にある樹の實は食ふなよと命じたことを聞いてゐますからこれを幸として人を試み人に勸めてこの禁制の菓物を食はせやうとおもつてどうがなして人をも己のやうに神に背かせやうと謀をいたしましたそこでサタンは此の園中にをりました一つの蛇の中にはいりましたその蛇のなかにはいることは固より肉體を有つてゐる者には出來ぬことでござりますがサタンは靈なるものでござりますから肉體のある我儕のゆくことができない所にもよくゆくことが出來ますか

したがふことを好まずしてかへつて神にさからひましたから神は怒つて彼を天から逐放したまひしことが聖書に錄してありますそれ故彼等は最早天に住むことをゆるされません此の放逐された天使等は皆靈物でござります故決して死ることがござりませんそれ故今日もなほ生きて宇內にをりますしかし今彼等は神と供にある天使のやうに善者ではござりません、それは甚だ惡者でござりますその中の首長の名をサタンと稱しましてこれは惡天使者等の王で他の惡使者等は凡てその命に從ひます天は善者ばかり居ところでござりますから此のサタンと他の諸の惡使者等は決して再び天に住むことはできませんたゞ此の世の末の審判の日がまゐりますとその時惡者は悉皆罰をうけて地獄とまうすおそろしいところに追ひやられてしまひますそうしてサタンとそのともがらは悉皆この地獄に永遠をらねばなりま

いこともござりません｜然しエバは竟にサタンの言をきゝ容れましたゆゑ眞實にかなしい事が出來ましたエバはその木の美しさとその實の食べるにうまさうなのを見又蛇がそれは汝を賢くしますと申したことを心にとめて遂にその實を一つ二つ採つて之を食べそしてそれを夫アダムにもあたへましたからアダムも亦之を食ましたそうして夫婦もろともに神に背いて罪を犯しました罪を犯すことは神の誡を破ることでございます。この理で神は彼等をエデンの園から放逐しましたそれゆゑにもうこの園の中に住むことができなくなりましたそこで神は善天使を降して彼等が再び此の園にはいらぬやうに守らせました神が彼等を放逐したのは正しく彼等を罰する爲でございます彼等が園にをりました間は何物もほしいものを望みしだいに得ましてそれを食べるものにし且菓物も皆自然に生つて居りますゆゑ勞力

くてサタンは蛇の中にはいつてエバの許にまゐりそうして話しますには神は汝に園中の樹の菓は食べてもよろしいと仰せられましたかとまうしたればエバが答て左様でございます我儕は萬の樹の菓を食べることを許されましたがたゞ彼の一つの樹に付いてはさはることも食ふこともならずそれを食へばきつと死ぬと仰せられましたと申しました其の時にサタンがまた申すには否たとひ汝が彼の一樹の菓を食べても死にはいたしません神がそれを食ふなといはれた理由は他のことではござりません汝等が是を食べれば賢くなつて多の事をしる様になるからのことでござりますと言葉巧に言ひましたのでエバはすつかりだまされて此の話をきゝ容れほんたうと思ひました（凡そ他人が悪事をなせよと他から勸めましても我儕は決してこれをききいれてはなりません、きゝ容れなければ行ひもせず行はなければ危

心をもつものとなりました子といふものはその兩親に似る道理でござります抑々今日世間に生れる男女の誰でも惡心を持つてくるのは他の理由ではございません即ち古代始祖アダムエバが神に背いてエデンの園にある禁制の菓物を食ひてからおこつたことでございます（今日の人々が惡心をもちまた惡をおこなふを見るはみなこの理由にもとづくのであります）。

○彼の大洋を踰えて遙かむかふにイスラエルと稱す國がございます今から凡そ一千八百餘年前に彼國にマリヤと稱す處女がございましたが神はその使者の一を天から降してその處女の許につかはしましたそのときマリヤは天使を見て懼れたれば天使はマリヤに向ひ汝おそるゝなよ神は汝を善してなんぢに一子を賜ふべしうまれしのち其の名をイエスと稱ふべしこのイエスは世の諸王よりも大いなる王た

んで働きませんでも樹木はみなよく生長いたしました、然し放逐されてからこちらはその居むところに菓物は自然には生じませんからアダムは菓物を得るために樹木を植つけ勞力んで培養はねばならぬやうになりましたそうして自己と妻エバの爲に充分な食物を得るには甚だくるしみました、それよりもなほ悲しいことは彼等が罪を犯してから元善でありましたその心も忽ち變じて惡となりましたことで、これは誠に驚くべきことまた悲しいことでござります吾人の心は正しいことでも惡いことでもそれを行ふ源本でござりますから神を愛する善心を有つ時は義いことをすることを好みその善心がなくなれば直に惡事をいたしたがるものでござりますアダムエバは罪によつて其の心を惡くし神にもとる者となりました只自己の心を惡くしたばかりではなくその後小兒が生れましたがこれがまた同じく皆惡

りませんから母マリヤはイエスを布でつゝんで秣器を搖籃の代にしてその中にいれおきました。其のころ此の國にては人民が羊を澤山もつてをりまして其の羊に草を喰はせるため羊を野邊につれていつて野宿してをりましたが野邊にはもとより羊を圍つておく墻がござりませぬそのうへに彼の國には猛獸の狼や熊のやうなものがをりまして時々その羊を殺して喰ひに出て來ます、それ故牧者と稱す者がござりまして之を防ぐ爲に羊を一所において野邊に番をして居ましたそこでこの牧者は晝夜ともに羊を守て居ました、これは猛獸が來て羊を殺すのはおほく夜であるからでござりますさてイエスが生れ玉ひし夜牧者は野に羊の群の番をいたしてをりましたが忽ち光がこの牧者の周圍をてらしひとりの天使が天から降つてまゐつて牧者にはなしをいたしました、しかし牧者はその時天使を見またその聲を聞て一

るべしそれ彼は神の子なりと云て再び天にのぼりました、マリヤはもとより富者ではなく實に貧しひ一處女でその夫は大工職のヨセフと稱して之も亦貧者でござりましたこのことの後此の二人はベツレヘムとまうす府に往きました此の二人の住家ではないけれどたゝ暫時滯るために來りましたそれゆゑ泊らうと思つてある旅店にゆきましたがあいにく宿屋は客人で充滿で一室もござりませんでした、それゆゑよんどころなく廐にまゐつてねました、此の時神が以前に天使をつかはして約束なされた如くにマリヤに小兒が生れましたイエスの生れました家は富者がもつやうな美屋ではござりません賤がむらなるベツレヘムの廐の中で生れ給ひました、その中のやうすをかんがへて見まするに牛や馬などがそのそばにねて居たり或は秣を喰つたりして居ましたらう、このやうな所故イエスをねせておくによい寢床があ

たちがこゝを去つてこのことを人々に語りましたので人々はその話を聞て驚きました。そうして牧者等が再び野に出て羊のところにかへりますときに神様が天使をつかはしイエスのことを知らせ又己等を導きてベツレヘムにゆかせ救主を見せてくださつた惠を只管に感謝いたしましたその頃イスラエルの國にエルサレムと稱す一の都府がありましたが此の都府はベツレヘムよりは大きくてその人口や戸數も最も澤山ありました、その都府にゐた王の名はヘロデと稱して最大暴虐無道の人でござりました。イエスの生れましたときに遠國からエルサレムに來た者がござりました。でその人等がまゐつた事情を尋ねてみますと此の人等は賢き學者でおほくの事をよくしり常に空を眺め星を窺ひ天文を學んでゐたとのことであります、彼等が自分の國にをりました時いまだ見たことのない星を見ました。これはそ

同に甚だ恐れました、なぜこのやうに恐れましたかといへば彼等は前に一度も天使を見た事がござりませんでした、然し天使は牧者等の恐れるのを見ておそれるなよ予は汝等と衆民の爲に好きあたらしきおとづれを持て來たのであるぞ視よ今ベツレヘムの邑に汝等の救主たるべき小兒が生れたぞよ汝等ゆきて見よさらば秣器の中にその小兒を見るであらうとまうしました天使がこの話を竟ると忽ち天からおほくの天使が出て來て大聲に神をほめ神はこの世に住む人々を善に導く慈愛ある者ぞといつてやがてまた天にかへりましたこの後で牧者等が互に云ひますには我儕はこの奇を目前にみたすぐさまベツレヘムにいつて天使が我儕に話した救主を見やうとて羊を野邊にのこして置いて急いでベツレヘムに行き彼の廐にまゐりましたそこでマリヤヨセフと秣器の中に臥せてある小兒とにあひました。その後牧者

ころが即ちベツレヘムであるといふことがしれましたその時この賢人をおのれの許に招いて彼等が本國で見た星のことなどを問ひ合はせ其のうへで彼等に汝等はベツレヘムにいつて其の小兒を尋ね出し歸つて來て予に告よわれも亦いつて拜みたいと思ふと申しましたヘロデがこのやうに申したわけは眞實にイエスを拜むつもりではなく却つてイエスを殺すつもりでござりました。かくて賢人等はエルサレムからベツレヘムの邑にまゐらんとて出立いたしますと以前に本國で見た星があらはれてまた彼等の先に路案内をしてベツレヘムのその小兒のをる廐の上に止りましたので賢人等はたいそう喜んで其の家にはいりましたそして小兒が母マリヤとともにあるのを見て謹んでその前に跪いて之を拜みました。このころの例に人が王樣を見舞ふときには必ず賜物を持つて來る事となつてをりましたそれゆゑ此

の星を見せてイエスの生れましたことを彼等に知せんとの神の旨でござりました。さてそこで彼等はイエスを見て拜みたひと思つてその故郷を出立ちて遠くのイスラエルの國にまゐり山や河や荒野を渉り旅の憂を忍び疲勞を凌ぎ漸々のことで竟にエルサレムに到着きました。彼等はエルサレムに來ることは來ましたがイエスのありかゝしれませぬから人々にあつてユダヤの王と生れ玉ひし小兒は何處に在すであらうか我儕は故郷で其の星を見ましてその小兒を拜みにまゐりましたと申しました（ユダヤとはイスラエルのことでござります）そこでヘロデはこの賢人等のいふことを聞てはたしてそのやうな事があるならばその小兒は成人して我が位を奪ひ我が代りにユダヤの王になるであらうと思つて甚だおそれましたそれ故にその小兒をたいそう嫉みその家來をよんでその小兒の生れた所をきゝましたと

下の小兒をことごくころせと申しつけた事でござります。そこでベツレヘムに居りました小兒は憫にも皆ころされてしまひましたがイエスは殺されませんでした、それはどういふ譯かと申しますとヘロデの家來がベツレヘムにくるまへに神はその使者をヨセフの許におくりてヘロデが小兒をさがすから小兒とその母をつれてエジプトと稱す國へにげて行けと告ましたのでヨセフは神のこの命をきいて其の夜の中に直におきて人の見ないやうにひそかにイエスとその母マリヤをつれて急いでエジプト國に逃ていつてヘロデが死るまでそこにをりました。それからヘロデが死ぬとそのゝち神は再び使者をヨセフのところにつかはして今はイスラエルの國へかへるやうにと告ましたからヨセフは復マリヤと小兒をつれて其の國にかへりましたがそれから親子共にナザレと稱す邑にいつて此處に永く住でゐまし

の賢人等もイエスに賜物をもつて來りまして之を恭しく捧げましたその賜物は黄金乳香沒藥の三品でござりましたこの中乳香沒藥の二品は木からとれる物で膠液の類でこれを燒きますると好いにほひが出る物でござります。この國の人々は乳香沒藥などはたいそうけつこうな物と思ひこれをたいそう好みましたから賢人等は之を贈物にしてイエスに捧げました。これは即ちイエスを王として崇めたことでござります此の賢人等がベツレヘムにをる中に一夢を見ましたその夢の中に神が汝等はヘロデが申したとうりにエルサレムにかへつてはならぬといはれましたそれで彼等はこの告を聞てすぐに本國に歸りました。そこでヘロデは賢人等が己に背きしことを發悟りまして大いに怒り暴逆無道のことを始めましたそのことは即ちイエスを殺さうと思つてその家來をよんでいそいでベツレヘムにいつて二歳以

犬馬どうやうにとりあつかはれる者のことを申します)昔そのイスラエル人がエジプト國の王の奴隷となつてをりましたがこの王は暴虐に彼等を督責てはげしく働かせ彼等を鞭ちましたまだそれよりひどいことは其の子供等を殺させました、そこで神は大いに怒つてイスラエルの民をゆるせとエジプト王に命じましたけれども王はこれを肯がひませんでした、そこで終に神より大いなる罰を受けました、その罰はいろ〳〵ござりましたが其の中で最もおそろしい罰は一夜に神が天使をつかはして王やその家來の家にいつて王の子もその家來の子も長子たる者は皆殺さしてしまひました、しかしイスラエル人の家には其の使者を入らせなさりませんでした神はその使者にイスラエル人の家には入るなよたゞその家は逾越せと命じたまひましたゆゑに此の使者はイスラエル人の家にははいらずまた害を致しませんでし

た。前にもまうした通りエルサレムは人口も多く戸數も夥くて實に大きな美しひ都でござりましたがその中でことさらに立派な物は一つの建物でありました、これはユダヤ人がまゐつて神に禮拜祈禱などする爲に設けられた殿堂でござります、この殿堂は小丘の巓にたつてをりました、またこの殿堂は大抵大理石で造つてござりましてその門は金銀を以ておほふてござりました此の府に住む人々は常にたびたびこの殿に昇りましたが一年に一次イスラエル中に住む人々がみな集つてこの殿で逾越節と稱す祭をいたす例がござりました。神がイスラエル人にこの祭典を命じましたわけはある事を記臆させる爲でござりました。今すこしその事の發端の物語をいたしませう太古イスラエルの人民は悉く奴隸となつてしまつたことがありました（奴隸といふものは其の主人にしたがはねばならぬ者で若し從はなければ

しましたそのわけから此の逾越節の稱が出ましたのでございます。

第貳章

マリヤとヨセフイエスを伴なひて逾越節にゆく事
バプテスマのヨハネ野にて說敎すること及びイエスにバプテスマを施す事
イエス試に會ひ玉ふ事
バプテスマのヨハネ殺さるゝ事

○さてマリヤとヨセフはエジプト國からイスラエルの地にかへりました時ナザレと稱す邑にまゐつて住まつて居りましたが年々逾越節を守る爲にエルサレムに上りました、ナザレとエルサレムの間は凡そ三十里ばかりでござりますそれ故この節にまゐるには邑人はその友

た、そこでエジプトの王は天使のいたした事を見て大いになやみ甚だ恐れまして遂に神の命せられたごとくにイスラエル人民を其の國から出すことをゆるしました。そこでイスラエル人は其の夜の中に直に出立してそれからもう奴隷でなくなりました。その出立する前に神が彼等に祝の食事を致せと命じましたので其の夜羔をころして之を焼いて各の家で食しました。それから神はイスラエル人にその夜の事を記憶させかつ彼等がエジプト王の手から救ひ出された其の慈惠を忘れないやうにその後は毎年その夜にこの祝を致せと命じました。それゆゑイスラエル人たるものは誰にかぎらず皆エルサレムにまゐつてその夜この祝を守る例でござりました。此の節を逾越節と申すわけは彼時に天使はイスラエル人の家をすぎこしまして誰も害しませんでたいエジプト人の家にはいつて其の長子をことごく殺

づねましたところがイエスは殿の中に祭司や學士などゝ供に語り供に論じて人々を驚かせてゐました。これを見るよりマリヤは急いでイエスのそばにはしり行きなせ汝は我儕といつしよにかへらないで獨で後に殘りました汝の父と我はたいへん心配して汝をたづねましたと申しましたところがイエスが答へて汝は我の父が我を此の世につかはして我になさせ玉ふ事をごぞんじありませんかといはれました。なせまたイエスがこんな事をいはれたかと申しますと即ち天に在す神なる父がイエスを世に遣しましたのは我儕人類の罪を贖ひ其の罰を救はんが爲であるとの意を示されるためでござります。また神がイエスを此の世に遣し玉ひしは我儕が正きことを爲し神を樂ませるにはどうしたらよからうかと敎ふるためでござりました。イエスは此の時僅に十二歳の童子ではありましたけれどすでに早この事

人や隣の人とつれあふて衆多いつしよにまゐる風俗でござりました。この風俗は何から始つたかといへば遠路の旅ですから或は賊難に會ふこともはかりがたくまた何事についても相互に力になるからの事でござります、勿論當今は鐵道や馬車などの便利もござりますけれども往古は其の樣なものはありません故ナザレからエルサレムまでの旅行には數日かゝつた事でござりませう。ヨセフとマリヤは例の逾越節を守る爲に十二歳になるイエスをつれてエルサレムに上り七日の間こゝに滯留してこの節をしまつて後またその友人といつしよにナザレの家にかへらんと出立致しましたがイエスもその中にをることゝ思つてその日は終日ある旅店にいつて泊らうと思つて切にイエスをさがしましたけれども更に見あたりませんからヨセフとマリヤは驚いてとつてかへしイエスをたづねて再びエルサレムに參つてた

即ち預言者でたいへん善人でかつ聖人でござりました、この人は幼少ときから野外に出て人跡少なる寂寞地に住んでをりましてそうしてその身には駱駝の毛で織つた粗き毛衣を着腰には革で造つた帶をしめ食物としては蝗蟲と野蜜とを飲食してをりました蝗蟲は彼の國には實に澤山ゐまして彼の國の貧民は皆これをとり火にて燒いて少し鹽を付けて食物といたしました今日でもさやうでござります野蜜とまうす物は蜂が森や藪や洞木や或は岩穴などにつくつてをく蜜のことであります。ヨハ子が住んで居ました野邊には澤山これがござりました。ヨハ子は其の野に獨で居まして永き間種々神のことを考へ神の書物を讀みまた祈禱をなすことなどを怠らずいたして居たでござりませう。扨イエスはベツレヘムの廐の中で生れそれからおひおひ生長してはや成人になられましたのでユダヤ人（ユダヤ人とはやは

について人民にその話を始められました。そこでイエスはマリヤとヨセフにつれられてナザレの故家にかへり常に兩親に孝行をいたされ成人するまで此處に留り多くの人々がイエスを愛みました然し此の時分はまだ時がいたりませんから、傳道の仕事はなさりません、それ故衆人はイエスは神の子であるといふこともぞんじませんでした。

○さてイスラエルの國にバプテスマのヨハ子と稱す預言者がござりました。預言者とまうす者は何事でも未來に起ることを前に知つて之を人に敎ふる人でござります、すべての人は未來のわからぬ者で今日より以前のことは知つても明日のこともまた其の後のことも更に知れないものです然し預言者はその事の起らぬ前に何事が起るかよくしつて確にこれを言す權を神から賜つてをります故によくその前言を致したものでございますこのバプテスマのヨハ子とまうす人は

うにしてありました此の二人の盗賊は他人の物をみだりに取りましたから此の中に入れられて困つてをりました、そこでこの二人がともに其の行つたことを酷く悔い悲んでをりましたがその悲みかたが各〳〵異てゐました一人の盗賊の悲み方は只その罰のあるのを恐れて悲むばかりでござりました、これは若しもそこからだされたならばまだ賊をする者でござりましよう。しかしいま一人の盗賊はこれと異ひ悲むことは同じ様に悲んでをりましたがこれはその罪を犯し悪事をしたと思うてそのことを悲んで居ました、それ故このものは若しもそこから出る事が出來たならもう決して再び盗を致すまいと心に定めた者でござりますヨハ子がユダヤ人に罪を悔改めて用意せよとまうしたのもこの意味でござりました多くのユダヤ人等はヨハ子のまうすことに從つてこれまでいたした罪は迚だ悪むべきものであること

りイスラエル人のことでござります）に教をのべまた己は神の子であるとつげ給ふ時がまゐりましたそれで神はヨハ子を召して先行つて神のイエスが現れ玉ふと人々に告よと命じ玉ひましたからヨハ子は神の命にしたがつてヨルダン河に近いところの野に出て説教を始めました、ところが人々は之をきく爲にたいそう集つてまゐりましたヨハ子はその人々に神の子が速に汝等の中にまゐりますから其の用意をいたしなさいと申しましたその用意とは美服を着たり家を修復したりすることではござりませんたゞ己の罪を悔改めることをまうしました悔改めとは眞心より悲むことでござります、がその悲みやうにも種々ござります。　ある時二人の盜賊がとらはれて囚人となつて空窖といふ小な室に閉ぢこめられてをりましたこの小室の戸は鐵で作り窓には鐵の棒がはめてあつて容易ににげて出ることが出來ないや

スは罪なく常に清いかたでありながらなぜバプテスマを受けられましたらうかといふでございましよう。なるほど此の問は尤らしく聞えますがしかしイエスはこのバプテスマを自己の爲に受られたものではございません是は我儕の爲に我儕がなすべき手本をしめされたのでございます。イエスがバプテスマを受けて水から上つて仰いで祈禱をなされましたとき忽ち驚くべき事が起りました、といふのは頭上のそらが開けて天から鳩のやうなものが降つてまゐりました是は實の鳩ではございません聖靈が鳩の形に見えて降りましたのでございますこの鳩がイエスの頭上に近く來てとゞまりましたとき直ちに天から神の聲がありましてこれは我旨にかなうたる我愛子なりと聞かれました。

○イエスがバプテスマを受けてのちこの處を去つて寂然野にいつて

悟つて悲み悔んで是からはよいことをいたそうと勵みましたそれでヨハ子はその人等をヨルダン河につれていつて水を以てバプテスマを施しました。

○ヨハ子が人々にバプテスマを授けてをりました頃にイエスはナザレの家を出てこの野に來て同くヨハ子からバプテスマをうけられましたが然しその時ヨハ子がイエスを見てイエスにバプテスマを施すことをことはりました、それはなぜかと申しますとヨハ子はイエスが神の子で常に清く罪なき方であると知つてをりましたからでございます。その時イエスはヨハ子に汝は今その理がわからないでも我にバプテスマを施せこれはたゞしい事だから受なければならない事であるといはれました、それ故ヨハ子もいなむことができずヨルダンの河に下つてバプテスマを施しました。しかし或人はうたがつてイエ

ると思つて之でだまし始めましたそこで惡魔は地にある石を見て汝もし神の子ならば此の石に命じて之をパンにしてごらんなさいそうしたなら汝の飢は救はれましようとまうしましたイエスはもとより一言で直にその石をパンにすることが出來ますけれどもサタンは何の爲に來たかそのわけを知つてをられましたそうしてサタンの言にしたがつて事をするはもとより惡事でござります故答へて神にしたがひたふときことを爲すは飢ゑたときにパンを得るよりもつと大切なことであると聖書にしるしてあるといはれてイエスはサタンの誘惑に陷り給ひませんでした嗚呼諸君よ汝等がもしや飢ゑることがあつても救主イエスがなされたことをよく心にとめて食物を得るために罪に導かれないやうに氣をおつけなさい(食物を得て罪を犯すよりはいつそ飢ゑて死んだはうがよろしいのでござります)イエスが石を

四十日四十夜其處に居て神に祈禱なされました、この野には猛獸が澤山をりましたけれども決してイエスを害しませんでした、こは即ちイエスには大權能がある證據でござりましたイエスは四十日四十夜斷食して一物も食はずにをられましたので終にはたいそううゑたまひました。そこで徃時にエデンの園でエバをだまして罪にひきいれついに人類の心を惡にいざなうたサタンといふ者これは靈物で決して死ぬことのない者でございますから此の時もなほ生てをりまして今イエスが人心を再び善にする爲に天から降つて來られたことをしつて徃古園でエバをだましたやうにイエスをもだまさうと思つてこの野にまゐりました。サタンがはじめて人を惡に導くときはいつでもその人のほしがる物を考へ出してこれを得させるやうにしてだましますが今イエスは斷食して飢ましたれば食物がいちばん必要の物であ

たから又他の謀を考へてこんどはこゝを去つてある高山の頂につれていつて其の上から世界ぢうの各國をイエスに見せました、そうしてサタンが試みて汝は今跪いて我を拜みなさいそうしたならばあの富やその大いなる榮を皆あたへて爾を全世界の王にいたしませうと申しました。サタンが野にまゐつてイエスを試みた目的はイエスに石をパンに變へさせたり殿堂の頂からとび下りさせたりするのでなく只己が言にしたがはせやうといたしたのでござりますまた跪いて我を拜ましたなら世界ぢうを與へやうと約束したのもやつぱりイエスを己が意に從はせておのれをその主にしやうと謀つたのでござりますしかしイエスは之を聞いてサタンに我より退け聖書に拜むべき者はたゞ神のみなりとあれば我儕の崇拜べきものはたゞ獨一の神のみであると答へられました。サタンはいろ〳〵試みましても竟にイエ

パンになさりませんでしたからサタンはおほきに謀がはづれましたのでまたほかの仕方でだまそうと試みましたその試には即ちイエスをつれていつてエルサレムの殿堂の頂上につれのぼつてイエスに爾はこゝから飛びおりてごらんなさい若しや爾が神の子ならば天使が來て救ひあげましよう或は落ちても碎けて死にはいたしますまいと申しました（凡そ惡人が人に惡を勸めまする時は丁度今サタンがイエスを試みたと同じやうになんでも人を挑撥てゝ危いことに導きます）イエスは固よりすこしも害をうけないやうにこの頂上からとびおりる事は容易いことでありましたがサタンの言に耳たがつてそのことをなさりません、またサタンの言を拒んで聖書には我儕は好で危いことをして神が救ふかどうだかと試みてはならないと申してあると答へられましたそこでサタンはその謀もまたはづれて無益になりまし

かれましたがそこに或人の婚禮がござりましたイエスもその門徒等もこの婚禮に招かれてゆかれました。その時イエスの母マリヤもその家にまゐつて居られましたがそのうちにやがて時間が來て食物や葡萄酒など皆そなへられて饗應が始りましたところがその半に忽ち葡萄酒が盡きて甚だ困りました、そこでマリヤはイエスを招いて葡萄酒の無くなつたことを告げまた下僕にイエスが云ひ付けることはなんでもせよと申し付けておきましたこの家に大水瓶が六つありましたが頓てイエスが下僕をよんで其の六の水瓶に水をいつぱい入れよと申しつけましたから下僕等はそのいゝつけに從つて水を汲んで來て瓶の緣まで一杯に張りましたそこでイエスはまた下僕に命じて饗應のところに持つてゆけと申されますと下僕等はまたその命に從つてこれを持つてまゐりましたところが饗應を司る人がその水を嘗め

スをだますことが出來ませんでしたからイエスを離れて去りましたそこで天使が來てイエスに服事へましたイエスがサタンに勝つて苟も之に從ひたまひませんでした事は我儕にとつて誠寔にありがたいことでござりました。往古エバはこの同じサタンに欺されて罪過を其の子孫に及ぼしその心を惡くいたし實に悲むべき罪を世に來しましたがイエスは之とちがひよくサタンに勝ちてその惑に陷り給はず却つて人に新しき善心を與へ信ずる者には權を授けて神の子となすべき道をたて給ひましたのでございます。

○其の後イエスはこの野を去つてヨハヲがバプテスマを施して居たヨルダン河の近所にかへつて居られまするに或人々がその許に來て常につきしたがつて敎を受けておりました此の人々を即ちイエスの門徒と稱します一日イエスはその門徒等をつれてカナと稱す邑に行

名はやはりヘロデと申しました、この王もまたその父に似て甚だ悪事を致しました今すこしその事情をはなしましょう。

○さてヘロデの兄弟の妻にヘロデヤスと稱すひとがござりましたがヘロデは甚だ之を懸想してつひに口説いて己の家によんで自分の妻にいたしましたヘロデがこういふことを致しましたのは神の命に背いた事でござります、しかるにバプテスマのヨハ子はこれを聞いてヘロデの許にまゐつてそのわるいことをいたした事を誡めましたところがヨハ子のいましめたことをヘロデヤスが聞いてたいそうはらをたてて速にヨハ子をころしてくださいとヘロデに願ひました、去かしヘロデはヨハ子の說敎を聞いてこれは善人だと思つて彼をころすことを懼れましたが妻をよろこばせたいと思つて遂にヨハ子を縛つて牢屋に入れました、ヨハ子が牢屋にをるうちにヘロデの誕生日が來り

て見たれば已に葡萄酒に變つておりましたイエスが水を葡萄酒に變へましたのは藥などを用ひてしたのでも亦手の働でもござりません只に一言で水が葡萄酒になつたのでござります如此ことを即ち奇跡とまうします、奇跡といふことはとても人の力で出來ない驚くべきことをいたすことでござります、これは神でなければとても出來ないことです、イエスは神の子でありましたから神と同じ力を有つて居られました、それゆゑ奇跡を行ふ力もござりました、この水が葡萄酒に變りましたことはイエスが始めて行はれました奇跡でござりましたこの後におほくの奇跡をなされましたがそれはだん〳〵後にばなしましよう。已に前に語りましたとほりあの猛惡なるヘロデ王はイエスを殺さうと思つてベツレヘム中の稚兒を悉くころしたのち間もなく死んでしまいましたから其の子が代りの王になりましたそうして其の

公のいひ含め通りに願ひましたらヘロデは固よりヨハ子を殺すことを好みませんからたいそう憂ひました我儕が人に惡事の約束をいたしてのちにその惡事といふことを悟つたならば猶豫せず直に神の前にその約束した罪を謝してその罪の赦を願ひ罪のうへに罪を犯さないやうにするがよろしうございますヘロデは此の時サロメの願を否むばかりでござりましたがその席につらなつて居る客も其の約束を聞いて居ましたから今さら否むは臆病にして後來笑はれるだらうと思つて遂に牢屋に人を遣してヨハ子の首をきらせ之を盆の上に載せてサロメに與へましたればサロメは之を頂戴して母公にもつてまゐりました。ヨハ子の門徒はヘロデのしたことを聞いて王樣の御殿にまゐつてヨハ子の死骸を取りこれを墓に葬りました、それからそのことをイエスに告げました。

ました、それ故ヘロデはたいそうな祝をいたして軍陣の長や役人やその外高貴人等を多くまねきました。さてヘロデにはサロメと稱す女がござりましたがこの女は舞をよくまひました故此時祝の筵に出て人々の前で躍舞をまひましたところがその舞がたいそうヘロデの氣にいつてヘロデは女に汝の好む物を何でもやろうと約束しました、しかしヘロデがこのやうな約束をしたことは誠に愚なことまた惡事でござりました、サロメはまたどれほどよく躍舞を舞つてもそれほどの報賞を受るやうな功でもござりません。そこでサロメは急いで母公の許にまゐつて其の報賞に何を頂戴したら宜しうござりましようかと相談致しましたところがヘロデヤスの答に父ヘロデ王の許にまゐつて何卒バプテスマのヨハ子の首をきつて之を盆に載せて賜はれと願へといひふくめましたそれからサロメは再び王の許にまいつて母

にまゐりました。そのうちに一人の女が水瓶を肩にのせて水を汲みに邑からでてまゐりました、この女は固その心に神を愛せず甚だ罪を犯した者でありました、しかしイエスは人心を悉く見て人の行を悉皆知ることが出來ますからその女のことをよく知つてをられましてそれからイエスはその女にその惡事をした事を皆はなされましたところがこの女はたいそう驚まして主よ汝は預言者でござりますと申しました、こう申したわけはイエスを凡人でないこれはなんでも神の助を得て人の知らない事を知る人であると信じましたからでござります、また此の女が我は救主が世に來ることがあつて其の救主が世にまゐるときは我儕が致すべき凡ての事を敎え給ふときゝをよんで居ますと申しました、その時イエスはその言をきいて此の女に汝のまうす救主は即ち我なりといはれましたそれでその女は水瓶をそこにをい

第參章

イエスサマリヤの女と語り玉ふ事
イエス貴人の子を癒し、人民を敎へ、人より惡鬼を逐出し、
ペテロの妻の母及び癩瘋を病む者を癒し玉ふ事

○扨イエスはその弟子たちをつれてガリラヤとまうす地に行かれましたがその途中にスカルといふ邑がござりましたその邑の少し外に多くの人が水を吸みにまゐる一つの井がござりました此の國は水の甚だすくない所で人々が深く井を掘りまして一つの井戸を衆人が共有つてその水を吸む習でござりました、イエスがこゝに來られた時は晝の十二時頃で甚だ熱い時でありました、その上旅の疲もござりましたのでイエスは彼の井戸の側に休息みて弟子等は皆食物を買ひに邑

やしてくださいと請願ひましたがその時此の貴人は我の子が死なぬうちに急いで來てくださいと申しましたしかしイエスはその貴人に汝の子は癒つたから心配なく家にかへれとおほせられました、そこで此の人はイエスの言を信じて其處を立去りましたがその人の家は甚だ遠方でござりましたから其の途中に家來が出迎へに來つて汝の御子樣はもう癒りましたと申しましたそれで貴人はその病の癒えたその時を家來に問ひましたが昨日の七時ごろに熱がさめましたとまうしました、そこでその貴人が其の時をかんがへて見ましたところが丁度昨日イエスが汝の子は癒えたりとおほせられた時でありましたからたいそう驚いて遂に己とその家族等は盡くイエスを神の子なりと信じましたイエスはそこからナザレに行かれました、こゝはその子兒の時からマリヤヨセフと共にすんで居られました邑でござります前

て急いで邑にかへり言ひ評してまうすことには我の是迄いたした行を悉く知つてこれを我に告げた人がありますその人を見においでなさいこれが即ち救主ではござりませんかとまうしましたそこで多くの人々がイエスを見に來てそうしてイエスを請うてその邑へつれてまゐりました、イエスは三日の間こゝに留つて説教をなされましたそれで多くの人々がその言を信じまして、そうしてその信じた人々が其の女に今我儕がイエスを信ずるのは汝がはなしたからではござりません我儕は自分でその教を聞いて彼はたしかに天から降つた神の子であると知つたからですと申しました。

○此の後イエスは前に水を酒に變へたあのカナと稱す邑に再びまゐられましたところがこのところにある貴人があつてその子が大病に罹つて居ましたそこでこの貴人がイエスの許にまゐつてその病を癒

して イエスは 海邊に 出て 立つて をられました ところが 多くの 人々が
教を きゝ にその 周圍に 聚つて 來りました その時 そのあたりに 舟が 二
艘 ござりました そうして 漁人は その 舟を 出て すこし 離れた 處に 網を
修復て 居ました その 漁人の 一人の 名を ペテロ その 兄弟の 名を アンデ
レー と 稱し 二人 ともに そこに 居ました 人々は 此 海邊で 教を きかうと
て 押合ひました 故に イエスは ペテロの 舟を 借て 之に 乘り ペテロに す
こしばかり 陸から 押し出させて 其の 中に 坐し 海岸に 群つて 居る 人々
に 教を 說かれました 已に 教を 說き 終つての ちペテロと アンデレーに
汝等 いまから 海に 漕ぎ出して 網を うてと 仰せられました ところが ペ
テロが 答へて 我儕ども は 終夜 漁の ために 働きましたけれども 一尾も
とれませんでした 然し 今君の おほせにしたがつて 試みに 網を 投つて
見ませうとて 頓て 網を うちましたところが 不思議に 多くの 魚が 網に

にもまうしました通りエルサレムの都にはユダヤ人が來て神を拜む爲に建てた美麗殿堂がござりましたが此の都からとほくに隔つて住んで居るユダヤ人は安息日毎にその殿にまゐつて禮拜することが出來ませんから銘々が住んでゐる邑に禮拜堂を數く建てゝおきました今イエスがこられましたナザレにも例の禮拜堂がありましたからイエスは安息日にそこにいつてユダヤ人が多く集つて居る前に立つて吾は天から降つた救主なりといはれましたがそこに居るユダヤ人はイエスを救主と信ずることを好みませんで大いに怒つて遂に申し合せてイエスを捕へ禮拜堂から引出してその邑の嶮き山の嶺につれていつてそこから投げおとさうといたしましたがイエスはもとより神の力を有つておられますからすこしも害を受け玉はず悠然としてその邑を出てカペナウンに行れました此の邑は海邊でござりましたそう

○安息日にイエスはカペナウンの邑にある會堂に入つてそこに集つてをる人々を敎へられましたがその中に惡鬼に侵されてをる一人の男が居ました前にも述べました通り惡天使即ち惡魔とまうす者はもとは天に住んで居ました善天使でありましたが神に逆ひ竟天から逐出されて今は惡鬼となつてなんでも善ものを悉く嫉み即ち善に敵する者となりましたイエスが世に降つて敎をとかれる頃には殊に澤山惡魔があらはれて老若男女にかまはず人についてその人を己の思ふ通りに使ひました今この會堂の中に居る一人について居ました惡魔は誰にも逐ひ出すことの出來ないものでござりました人が惡魔を逐出すことが出來ないわけは惡魔といふ者は人に從はないものでござります此の惡魔がイエスの其處に來られるを見ると大聲にさけんでイエスは神の子であると申しましたイエスは之を聞くよりその者に

かゝつて網が破れるほどでござりましたそこでペテロとアンデレーは大いに驚いてその近所に居たヤコブとヨハ子と稱す二人の漁人を招いててつだつてもらひたいとまうしましたでその二人は直に一艘の舟を漕いで來て彼等を助けて網をひきあげてその魚をとりましたがその魚の多いことは兩方の舟に滿ちて舟が沈みかゝるほどでござりましたこんなに大そう魚が網に罹りましたのは全くイエスの力でこれは水を酒に變へ貴人の子を癒しましたと同じ奇跡でござりましたイエスが此の奇跡をペテロアンデレーヤコブヨハ子等に見せられたのは他の事ではござりません則ち之によつて彼等がイエスを信じ且イエスの弟子となるやうになされたのでござりますその時にイエスが彼等に汝等吾に從へと仰せられましたれば彼等は忽ちその舟や網や所有物を悉皆すてゝイエスに從ひました。

つかれた人々を多くつれてまゐりましたそこでイエスは病人らを癒しまた惡魔につかれてをる者からその惡魔を逐ひいだし玉ひましたその翌朝夜あけ前にイエスは早く起きてたゝ獨りで野の淋しい所に出て地にひざまづいて神に祈禱をなされましたイエスは假令神の子にして父と共に天に在したかたでござりましたとは申しながら今は我等と均しく人間となつて地に降つて居られます故に地におられる間はやつぱり人々の通りに苦と痛を多くその身に受られねばなりませんそれ故にまた人の樣に神に救助を願はれるはずでござりますイエスが獨で野に居られると後からカペナウンにをる人々がイエスを尋ねてペテロの家に來りましたしかしイエスはその家にをられませんと聞いてなほイエスを見出そうとして出てゆきましたがやがて野にいつてイエスに會ひましたその時此の人々がイエスに他所へ行つ

近づいて靜まれ汝この人より速に出よと命せられましたそうすると惡魔は忽然こゑをあげその人を地に倒して遂に出てしまひました此の時會堂の中にをりました人々は皆おどろひて是はいかなる人ぞや惡魔でさへも彼に從ひましたと互にまうしあひました。そうしてイスラエル國ぢうに住む人々は之をつたへきゝてみなみなが驚いたと聖書にかいてございます。

○イエスがこの會堂を出てペテロとアンデレーの家にゆかれました時ペテロの妻の母が大熱を病んでをりました、それ故此の二人がその病氣を癒してくださいとイエスに願ひましたこの時イエスがその女の寢床の側に行つて手をとつて之をひきあげられますると熱病は直に去つて善くなりましたそれからその女は直に起きて家にある人々の用事を致しましたその日の晩景になると邑の人々が病人や惡魔に

エスを救世主と信じなければなりません、そうしなければその法は我儕に無益でござりますイエスはどうして此の法をたてどうして我儕の代りに罰をうけられましたかはのちに詳細に話しましょう。

〇一日癩病人がイエスの許に來りました癩病とまうす病は人の皮膚に腫物が出來る病でござります、また時としては人體の一部に發しあるひは全體を煩はし頭から足までことごとく發するものでござります、この病は甚だ恐ろしい者でユダヤ人がその病に犯るときは直に自分の家を離れて淋しい所に往つてそこに獨でをるか或は他の癩病人と同居してその病の癒えるまでは決して家にかへることを許されません此の病をいやす者は神の外にはござりません。時としては神が惡人を罰する爲に此の病を煩はせ玉ふこともござります一度神は某王を罰して彼に癩病を煩はせたことが聖書にみえます、その王の名を

てくださるなと願ひましたけれどもイエスはその願をうけずして我は他の邑に行つてそこに居る人々を教へなければならぬとおほせられました。

○此の後イエスはその國中あらゆる町や邑に行つてそこに居る人々に福音を說かれました（福音とは善きしらせといふ義理でござります）イエスの說かれました福音は即ちイエスが我儕人間の罰せられるのを救ふ爲に天から降つたといふことをしらせられたのでござります神は己に背く者は悉く罰すると仰せられましたれども我儕はすべて神に背いてしば〳〵罪を犯しますからどうしても罰を免かれることができませんまた救はれる道もござりません。しかし玆に只一法がござりますイエスは即ちその法を立てゝ我等の代りに自ら罰をうけて我儕人間をよく救はれますしかし我儕が救はれるには罪を悔いイ

勢が來てイエスは身を動すことができない樣になりましたからこゝを去つて獨り野にいつて神に祈禱をしてをられました。

○その後またカペナウンの邑にかへられましたカペナウンにある家へ屋は通例一階造でその家根が平坦で夏の夜はその上に登つて涼みまたは歩いたりする事が出來る樣になつてゐましたそうして家根の緣の廻りには人が落ちないために低い欄杆や壁がござりました又此らの家には全く家根なしの一の室がありました是は大抵家の眞中にあつて是を「コート」と申しましたその中に入つてみると家の中ではない樣に見えましたそれは天井は蒼空でもしや雨でもふるか或は極暑の時に上に日おひを張つて之を防ぐことでありましたときにイエスがこの樣な室のある家にはいつてをられまするど村の人々がおほせいをしへを聞をきゝにあつまつてまゐりました餘りおほせい集りまして家の內

ヴデヤと稱しますヴデヤは二十八年の間この病のために苦みましたがつひに癒えないで死んでしまひました此の王がわづらつて居ました間はその子が代りに國民を治めました扨このおそろしい病を煩つてゐる人がイエスのところにまゐりましてその前に跪いて拜んで主よもし君の旨にかなはゞ君は我をよく淨くなさることが出來ますとぞんじますと申しましたればイエスはその人を見て之を憐み手をのばして此の人に觸つて我これをよくすべし淨くなれとあふせられましたところがその癩病が立どころに癒えてその人が淨くなりました其の時イエスがこの者に汝は我が汝を癒したことを誰にも告るなよとあふせられましたがしかし此の人はその病が全快して淨くなつた事を喜んであまりうれしさのまゝにこのことを人々に語りましたところが多人數押し合つてイエスの許にあつまつて來ましたあまり大

イエス十二使徒を撰び玉ふ事並に山に登つて說敎し玉ふ事

○前にも申しましたとほりユダヤ人のすんで居ました地はイスラエルの國と申して是は神が彼等に給はりました國でござりました。イエスが此の地に降生られました時から凡そ數百年前の頃に此の國に王がござりましてその國民を治めてよくしはいをいたしてをりましたが其の後彼等が神に背きましたから神は彼等を罰し他國の王を遣しました此の王は兵士を率ゐて來てユダヤ人と戰爭をいたしました、ところがユダヤ人は大いに負けて竟に他國の家來とされてしまいました、それゆゑユダヤ人は他國人の王に從ひまして最早自國の王がなくなりました。その國の名はローマ國と稱しましてこのときにイスラエルの地にあるすべてのユダヤ人等はローマに屬することになり

を赦すの權を有つかとまうしました、イエスは彼等がそのやうに思つてゐるのを知りて汝等はなぜそのやうなことを思ふや我に此の病人の罪を赦すの權が有ることを汝等に見せてやらうといひながら頓て病人に汝おきて寢床をとつて家にかへれと命ぜられましたこれを聞より此の病人は直にその床から起きてその莞蓙の床をとりあげてこれをその家にもつてゆきました、その時人々はこれを見てたいそうおどろいて我儕はまだ此の様なことをみたことがないと申しあひました。

第四章

イエスマタイを召して弟子となし玉ふ事

イエスベタスダの池に病人をいやし玉ふ事幷に手枯えたる人の手を癒し玉ふ事

○其の後イエスはエルサレムの市街に行かれました、このまちには大きな壁がありました、この壁は何の爲に築きましたかといへばこれは即ち敵を防ぐ爲にこしらへたものでござりました、このかべには人の通りぬけが出來る位の門がありましてその門の一を羊門とまうしました、なぜこれを羊門とまうしますかといへば常に羊をその門から此の市街に出し入れいたしますからこの名が出ましたのでその門の近所にベタスダと稱す小池があつて其の圍に五の廊がござりました、さうしてこれらの廊にはおほぜいの病人や不具ものが集つて居ました、これは何故かといへば時とすると天使がこゝに降つて池の水を動かすことがありました、その時一番先にその水にはいる者はその病氣が癒えたといふことでござりました、それから其の樣に衆人が集つて居るのでござりました一日イエスはこのベテスダの池に來てそんなに

ましたからなんでもローマ皇帝の命にしたがつて貢稅を收めました。しかしローマの皇帝はイスラエルの地には住まはずまた自ら稅金を取たてにはまゐられませんでたゝ役人を此の地におきてその貢稅などを此の役人にとりたてさせました。

○イエスが市中をあるいておられまするときにマタイと稱す稅吏がその役場にすはつて居ましたところがイエスがそのところを見て（此役場とまうすは稅を收めるところでござります）マタイに我に從へとあふせられましたところがマタイは速に立つて萬事をすておいてイエスに從ひましたマタイはその役場につとめてゐましたなら金錢が澤山できて富者になりましたらうがマタイはたとへ貧者になつてもイエスに從ふことを好んでその時からイエスと共に居てその門徒の一人となりました。

安息日にそのやうなことをするはよろしくない、なせならば是は神が安息日には働く勿れと命じ玉ひましたとまうしました。しかるにこの癒された人は決して安息日を犯したわけではござりません主のあふせに從つたのですから答へて我を癒した人がこの寢床をとつてあるけと命じましたといひました、そこでユダヤ人らが誰がそんなことを命じたかとたづねましたからイエスが命じましたとまうしました。ユダヤ人等はこれを聞て、イエスが安息日に人を癒したのはよろしくないと互に云つておほいに怒りイエスを殺さんと謀りました、その謀ごとはイエスは安息日を犯して神の誡に背いたといつて殺すつもりでござりますところがイエスはこれを知つてその人々に向ひ我がなせし奇跡を見よこれがすなはち神の我を遣し玉ひし證なり然るに汝曹は我を信せずそれ我は即ち神子にして病者を癒しまた死人を甦の

多くの病人が待つて居る廊の中をあちらこちらと歩かれまする時三十八年の間病み煩つてあるくことも立つことも出來ない一人の病人が寐床に臥て居るのを見てこれはたいそう長煩をして居る憫然な者だとおぼしめして汝は癒されたいかと問はれましたところがこの病人は水に入らなければその病氣が癒えないことゝおもつて左樣でござります天のつかひが水を動かす時があつても誰も我を助けて水に入らせてくれる者がござりませんから自身で水に入らうとするといつでも他人に先に入られてしまつてつひに癒されることが出來ませんと申しましたのでイエスはこれを聞いて汝おきてその床をあげてあるけとあふせられましたそこで此の病人は忽然丈夫になつて立つて寐床をとつて歩いてゆきました。當日はすなはち安息日でござりましたそれ故にユダヤ人等がその人の寐床を運ぶのを見て其の人に

○また他の安息日にイエスは一會堂にゆかれました人々は聖書を聞たり又祈禱をする爲に大衆こゝに集つて居ました、その中に右の手が枯てひらくことの出來ぬ人が一人居ました又その中に學士とパリサイの人が居てイエスは此の人を安息日に癒すであうふか若しもいやしたなら之れをイエスの過にしてやらうと思うてゐましたがイエスはとくその思考を知つてその手の枯た人に衆人の家に出て來いと命じてさうして又學士とパリサイの人に向つて爾曹の羊がもしや安息日に井戸の中に落たらそれを援ひあげないだらうか若し羊にさへ善事をするのが義ならましてや人に善事をするのは宜しいではないか我汝曹に語らんそれ安息日に善事をなすは義きことなりとあふせられました、それからイエスは手の枯たる人に汝の手を伸せと仰せられましたその人はこれを聞いてその手を伸しましたところが不思議に

權を有つものなり、また末日には死人も我がこゑを聞いて皆墓より出でて義きことをせし者は善報を得て樂みにいり惡人は暗きところに追ひやられて罰を受くべしとあふせられました。

○それからイエスは弟子と供に安息日に麥畑を過ぎゆかれますとその時弟子等はらが飢ましたから彼等はその麥をとつて之を手でもんでその粃をとつて食べました。その時パリサイの或人がこれを見て前にベテスダの池でやかましく云つた通りにこれは即ち安息日を破ることだとてイエスをとがめましたところがイエスは之を聞いて我は安息日の主にして今弟子等のいたしたことはすなはち我が免したことなれば決して汝曹の咎むべきことではないとあふせられました、かくあふせられたのは安息日でもイエスの自から爲し或は命せられましたことは何事でもたいしい事だと申す意でござります。

ヤコブヨハ子ピリポバルトロマイマタイトマスアルバヨの子ヤコブシモンヤコブの兄弟ユダとイスカリヲテのユダでござります

○イエスがある山に登つてそこに坐し玉ひましたれど衆多の人々がそこに集て來りました其の時そこにイエスが何が眞の福とまうす者であるかといふことを說かれました。今から其の說敎を話しませう。第一に(心の貧しき者は福なり)と說かれました心の貧しき者とは何の意味でござりましようか、是は即ち人は若しもその罪のあることをしりますなら謙遜になります、これその時が即ち心の貧しき者でござります、なぜそのやうな人を福と申すならかういふ人は高慢をやめて自己は甚だ惡者と思ひ自己の惡事をいたした事を憶へてその罪を痛く悔み神に赦を願ふ者ですから之を福なりとあふせられたものでござります。

その手がなをりました、それからパリサイの人等はたいそう怒つて如何してイエスを殺そうかと互に相談いたしました。イエスはそのことを知つて弟子をつれて此所を立去ましてガリラヤの海の邊にこられました、ところが遠の邑々に住んで居る人々も澤山したがつてまゐりました又病人や惡鬼につかれたものどもがイエスにさはらんとて集りつどひましたそはイエスにさはる者は皆その病が癒えましたからでござります。

○その後イエスは淋しい荒野にいつて其所で終夜祈禱をなされました。その翌朝イエスは弟子等をそばに召して其の中から十二人の使徒を撰ばれました(使徒とは使者の義にてイエスは人々を敎へんがため此等の人々を各所に遣はされます故その名を使徒とまうします)此の時に撰ばれました使徒たちの名は即ちペテロとその兄弟アンデレ

清心とは穢のない善心を申します已に前にも申したとほり吾等人間はみな惡事をすることを好む心を有つて生れるものでござりますが若しその心が變じて善となり義者となりました時は義しいことをして神をよろこばせることを好む者でござります、イエスは如斯者を指して福なりとあふせられました。

又(平和をなす者は福なり)と說かれました。

平和をなす者とは他人と爭はずまた力の及ぶだけ他人をも靜め或は已に爭つた事があるならばその人にわびて再び交接をする者を申します。

又イエスは其の門弟に向つて(他人が汝曹に不實なことをいたしても爾曹はその人等に不實なことを致してはならない却つて其の者に善事を致し又その者の爲に祈禱をいたせ天に在す爾曹の父は彼に

其次(飢渇く如く義を慕ふ者は福なり)とあふせられました。其の意味はすなはち人は若し飢ゑたり渇いたりするときはたいそう食つたり飲だりしたがる者でござります丁度そのやうに義しいことを求めて神を喜ばせますならば神も亦我儕を助けて善事をさせまた恩恵を與へたまふとの意味でござります。又(矜恤ある者は福なりその人は矜恤を得べければなり)と說かれました矜恤者とは他人にしんせつなることをする者を申します我儕が他人にしんせつを致してよく神にしたがひまするときは神は他人をも吾儕にしんせつにするやうにし、また神も我儕にしんせつをなされます神はまた互に深切にせよとあふせられました、これが即ち矜恤の意味でござります。

又(心の清きものは福なり)と說かれました。

せぬ、もし貧人に錢をやるにもそのことを他人にふれちらしてはいけませんもしもそのやうにするならば恩むのではなく却つて誇ることにあたります。

又祈禱をする時は彼のパリサイの人のやうに僞善をしてはならないパリサイ人等は常に市街で祈禱を致して他人にその祈禱を聞せて自己を甚だ聖者と思れたいとおもつてさやうにいたしたが爾曹わが弟子たる者は神より外に誰も聞く者のないところを撰んで祈禱をせよさすれば神はその祈禱に應じたまふ)と說かれました。

又(爾等は窄き門より入れよすべて亡に至る路は廣くその門は大なり)と說かれました。

窄門とは天にいたる善道のことで廣門とは地獄にゆく惡道のことをいはれたものでござりますこの廣門にいる廣道をあるくものは

從ふもの愛する者にも且又不順あいせざる者にも同じく親切なれば爾曹も之を則とせよ）と仰せられましたこれはたゞ其の時の人ばかりではなくやはり今日の我等にも語り玉うたものでござります。又（何事でも我等が他人にしてもらひたいと思ふことがあるならば又他人にもその事をしてやれ、若しまた他人にたゞしくとりあつかはれたいと思ふならまた人をも親切にたゞしく取扱つてやらなければならない）と說かれました。これも同じく今日の我儕にあふせられたことにあたります。

又爾曹が義ことをするにこれを他人に見せて譽めてもらはふと思つてはならない）と說かれました。

他人に見せて譽られやうなどと思つて致すことは義ことではござりません何事をするにも神をよろこばせる目的でなくてはいけま

だが我にそむく者は砂の上に家を建た愚者のやうな者だ)とあふせられました。

扨この二人の者とは善人と悪人をたとへ、嵐は此世の末の審判の日を譬へていはれたものでござります。

○其後イエスは再びカペナウンの城に來られましたがこの城に或るローマの兵隊の長がすんでゐました此の人は百夫の長とて即ち百人の兵卒の頭でござりました。此の百夫之長がひごろ愛してゐましたの一人の僕が丁度病氣で死にかゝつて居ましたところ此の百夫之長は毎度イエスの言を以て直に病氣を癒し玉ふことを聞いて居ましたれば只今イエスがその城に來られたと聞いて直にその友人のあるユダヤ人をたのんでイエスにその僕の病を癒してくださいと願に行つてもらひましたそこで其の友人がイエスの許にまゐつて申すにはこゝ

たくさんござりますが窄門を見出してその門に入て神に順ひ義きことを致すものは誠にすくないものでござります。

又此說教の終に弟子等に譬を以て語られましたには（こゝに二人の者が各その家を建たが一人は大丈夫な岩を撰んでこれを礎として其家を建てその家が出來あがると大嵐があつて其家にあてたれどもまた雨がどんなにおほく降るともその岩を流すことができず風はどんな大風でもこれを吹たふすことができないからその家は依然として居てすこしも害を受なかつたが、いま一人は其の家を建つるに砂を礎として之を建てたがやがて嵐がして來てその家にあてると雨はその砂を洗ひ流し風は其の家を吹きたふしてつひにその家がやぶれて切々になつてしまつた、といつてイエスは人々を顧みて我が言に順ふ者は皆岩の上に家を建てたかしこき人のやうなもの

ほど深く我を信ずる者をいまだ見たことがないと云つて、そうして其の使者に百夫之長の信に由つて其の僕は癒さるべしと告られましたればその使者等は家にかへりましたところが其の僕はよくなつて居ました。

○其の翌日イエスはナインと稱す邑にゆかれまする時その門に近くなると死人を棺にのせて擔出すところに會はれましたこの死人はある寡婦の愛子でござりましたからそのやもめをんなは泣きながら棺につきてゆきました、イエスは其の婦の泣いてゆくのを見て大いに憐みその婦に泣くなよといひながら棺の側について手を棺につけられると之を擔いでをる者等は立止りました、その時イエスは若者よ我爾に告ぐ起きよと大音聲に呼ばれました、ところが死人は忽ち甦りて立あがりそうしてものを言始めました。そうしてイエスはその子をそ

に百夫之長がござりますが彼はユダヤ人ではござりませぬローマ人でございますれど誠に善にして且眞實なる人でござりまして澤山の金を出して我等の爲に會堂を建てゝくれましたものでござります、願はくは彼の願をきいてくださいと願ひましたイエスは之を聞いてその使者に來た人をつれて其の百夫之長の家にゆかれまする途中で百夫之長から又使者が來てイエスにあつて百夫之長の申しまするには我が君を我が家に迎へ奉るは畏れおほし君は來り給はずとも一言を出したまはば我が僕は癒ゆるであらうと信じます、なせなれば我の下に屬く兵卒がござりまして我がこれに命じて行けといへばゆきまた歸れといへば歸ります況や君は大權を有玉ふ君なれば我が兵卒をつかふやうに病に命じて我の下僕を癒したまふことが出來ると申しましたとまうしたところがイエスは之を聞いて驚き我は此の百夫之長

第貳編

通俗

福音物語

杉山海南著

の母にあたへました、それから人々が死人の甦つたのを見て大いに驚きおそれてイエスはたしかに神より遣はされた大いなる預言者であると申しました。

○その後イエスは十二使徒を伴て村々町々を經めぐりその町や村に住む人民に教を說かれましたイエスはたとひ世界萬有の主にして大權と大榮をもち富は極なくもち玉ふかたでは、いましながら我儕人類を救ふ爲に常に貧乏にして困難にをられました。それ故イエスが病を癒し或は惡鬼を逐ひいだしてやられました婦人等がイエスの貧乏を扶けてイエスの入用の物をイエスにあげました、そのをんなたちの中の一人の名はマグダラのマリヤ又ヨハンナと稱すをんなまたその外にイエスを扶けたものがたくさんにありました。

第貳編　通俗福音物語

第九章　受難の週間

其一　勝利の入京

イエスは安息日を和氣靄々たる家庭の内に過し、その翌朝早くベタニヤを後にし程遠からぬエルサレムへと進ませられた、漸く橄欖山まで來た時イエスは二人の弟子に『爾曹向ふの村に向け、然らば人の未だ乘らぬ驢の子の繫げるを見出すべし、其を解きて引き來れ、若し誰か爾曹に何故其を連れて行くやと尋ねる者あらば主の用なりと云へ。』と敎へられた、弟子等は命令のまゝに其の村に入ると果して四つ角に驢の子の繫いであるのを見出した、夫で之を解き連歸らんとすれば側にゐ

其の心に疑ふことなくば其の願ふ處必ず成り、信じて此の山に移りて海に入と云ふも成るべし、爾曹信じて祈らば如何なる物にても與へられざることなしと。』信仰の大切なることを敎へられた。

イエスと弟子達は此の日も神殿の庭で敎を垂れられた、其處へ傲然として祭司の長、學者及び長老などが來り說敎の邪魔をせんとして『爾は何の權威を以て此の事を行か、又誰がこの權威を與へたるか？我儕に告よ。』と詰問した、そは誰よりもなしと云へばイエスを嘲笑りて己等の權威を人々に見せ、若し神よりなりと云ふならば己と神と同一にせしもの、自分より救世主と云ひしものとして訴へんとする二重の係蹄であつたのである、イエスは早くも彼等の心を見拔なされて此方より反對に『我も一言なんぢらに問ん、われに答へよ然ば我も亦なんぢらに何の權威を以てなすか答へん、ヨハヂのバプテスマは天よりか、人より

四邊を見たが、時すでに日の暮であつたので十二の使徒を連れ又もやベタニヤに引返し給うたのである。

明る月曜日の朝まだき頃、弟子達と共にベタニヤからエルサレムに來る時、イエスは非常に空腹を感せられたので道の邊にある無花果の樹を見て果が成つてあれかしと思うてゐた、猶太の律法では持主でなくとも取つて食ふことだけは許されてゐたものである、イエスが木の側に探索つて見ると葉の外一つの實もないので、此の無花果の樹に向ひ『以後何時までも果を結ぶ勿れ。』と仰せられ、共にゐた弟子達も此の言葉を聞いた。

又明る火曜の朝此處を通る時、弟子達は昨日の無花果樹を眺めた處、最早根から葉の先まで全く枯凋てゐたので、彼等イエスに向ひ『何ぞ無花果の樹の枯ること早きや』。と云うた、イエス『神を信せよ、凡そ誰にても

彼は行かなかつたのである。』

語り終るや彼等に向ひ『此の二子の內何れが父の旨に遵ひたるものぞ？』『長子なり。』と答へた。イエス論鋒をバリサイの輩に向け『爾曹が汚れたりとする稅吏および娼妓は爾曹よりも先に神の國に入るべし、見よ其の證據には、ヨハ子義道を述ぶるために來りしに爾曹之を信せず、却つて稅吏及び娼妓は信じたりき。』と彼等の傲慢を戒められた。

斯くもイエスは固なる有司共に手強き鐵槌を與へた後、又もや一つの譬喩を群衆に話された。

『或富る一人の農夫は葡萄園を作り、その周圍に垣や籬を搆へ、其の中に葡萄酒を作る處を設けた、其の後盜賊や野獸の侵入するを見張るための番小屋と樓閣を建て、之を小作人に貸付自分は遠き國へと旅立したのである、丁度實の成熟する頃小作料を取立てるために一人の僕を遣

か我に答へよ。』と仰せられた、彼等答へて人よりと云はんか其處に居る群衆はヨハヂを豫言者とする故に恐くは反對せん、答へて神よりと云はんか當然イエスの權威を神よりと認めねばならぬ、彼等は進退こゝに窮りあはれにも『我等知ず。』と答へた、夫でイエスも『我も亦何の權威をもて行すかなんぢらに語らじ。』と仰せられたげに彼等は見事失敗し大いに器量を群衆の前に下げたのである。

此の時イエスは群衆に『爾曹如何に思ふや。』と前置の下に次の譬喩を語られた。

『或人二人の子供を有つてゐたが、或日のこと長子に向ひ「我子よ、今日は葡萄園に行きて働け。」「否。」と答へたが親に逆くことの不孝なるを悟り、命令の通り行つたのである、また次子にも「我子よ、今日は葡萄園に行きて働け。」と云ふと、「父よ我行くべし。」と良い返事をしたがとうとう

旅行より歸り來りしならば此の惡しき農夫等を如何にすべき？』『惡しき農夫等を皆打ち滅ぼし、その小作料を収むる善き農夫に貸し與ふべし。』と答へた。

此の譬喩の內葡萄園の主人は神を指し、僕等は豫言者、愛する一人の息子は基督、惡き農夫等は猶太人を意味するのである、神は猶太人を特別に愛し給ふたことは前すでに讀める如く、又彼等は埃及にて奴隷たる時導き出してカナンの地を與へ、恩惠にめぐみを加へたるに拘らず、神の命に逆き不德不義を行ふたので、神は聖者或は豫言者を彼等に遣はし、罪を悔改むる樣敎へたが、彼等は豫言者の敎を受ざるばかりか、殘酷なる取扱ひをなし殺したことも往々であつた、今や神の一人子イエスをも惡しき農夫等の如く殺さんとしてゐるのである、パリサイ人と猶太人等は此の譬喩を聞いて腹を立てた、そは己等は農夫に例らへられ

はした、然るに小作人共は約束の小作料を收め様ともせず、僕を捕へ、鞭打ちたる上何物も與へずに主人の處へと追歸した、夫で主人はまた他の僕を遣はしたが小作人共は石を投げて僕の頭に傷を付け、はう〳〵の體にして追歸した、主人はもう一度他の僕を遣したが、相變らず僕を捕へ、打擲して遂に殺したのである、夫で主人は何したならば良いかと思案にくれた、彼には非常に可愛がつてゐる一人の息子があつた、我は此の愛する息子をもう一度遣はさう、然らばよもや彼等とても殺すまいと考へた、併し小作共は息子の來たのを見たときに「此は嗣子なり、いでや來れ、我等彼を殺して此の葡萄園を我等のものにせん」と相談した、夫で息子の來るや直ちに捕へ、籬の外に連れて行き、殺して了つたのである。』

さてイエスは此の譬喩を熱心に聞いてゐた人々に向ひ『葡萄園の主人

れで僕等は命令のまゝに道へと行き、會ふほどの人は貧乏人であらうが、富る者であらうが、連れて來ので饗應の席は一杯になつた、處が皆の衣服は王の家で着るに相應しくないので王は新しく且美はしき衣服を調へ、來客一人〳〵に與へて着せしめたのである、其の後王は來客を見んとして饗應の席を廻つて見たところ、禮服を着ぬ一人の者を見出した、夫で王は彼に向ひ「友よ、爾は如何に婚筵の禮服をも着けず此處に來りしや」と問うた、其の人は王より着物を賜つた時に自分は取なかつた故に何も答へなかつた、何故取らなかつたと云ふに己の着物の立派なるを誇り、之でも王の饗應に出るに充分と思ふたからである、此の有樣を見て王は大いに怒り、僕を召び「手足を縛り王の命令を守らざる人々を入るべき牢舍に投げ入よ。」と云つた。」

此の譬喩に於て王は神のことを意味し、其の息子はイエスのことを指

たことを知つたからである彼等はイエスを捕へて殺さうとしたが、イエスを信ずる多くの人を懼れて手出しすることを止た。

此の時なされた既う一つの譬喩話は次の通りである。『或王はその息子のために婚姻の饗應を設けた、我等の内誰でも王に招かれて喜ばぬ者がなからう然るに此の王が僕を遣はし招待してあつた人々に來る樣云ふてやつたが誰一人も來なかつた、夫で王は再び僕を遣はし「肥た牛と羊は屠られ、凡て馳走の準備はなれり、早く來り席に著れんことを」といはしめた、然るに或者は田に行き、或者は商買に出掛け、或者は殘酷にも僕を捕へて辱しめ其の果に打殺したのである、王これを聞くや大いに怒り多くの兵士を送つて其の殺せる者を亡し、其の村をも燒き拂つてしまつた其後王はまた他の僕に向ひ「前に招いた樣な惡人でなく、汝等道に出て會ふほどの人は誰にても連來れよ」と仰付けた、そ

エスは早くも彼等の計略なるを知り『僞善者よ何ぞ我を試すや、爾曹が貢に出す金銀を我に見せよ。』と仰せられた、彼等はデナリと云ふ銀貨一枚を持つて來たので『此の金の上に繪ける像は誰なるか？。』『カイザル』ローマ皇帝其の人なりと、答へた、夫でイエスは『然ばカイザルの物はカイザルに歸し、又神の物は神に捧ぐべし。』とうまくも彼等の係蹄を脫出でたので默然として言葉を出すものもなかつたのである。

脆くもパリサイの輩等は敗けたので、新手としてサドカイの輩は來り『師よ、モーセが我儕に書遺ける文を見るに子なくして其の夫を亡へる者は夫の兄弟に嫁ぐことを得べしとあり、若し然らば茲に七人の兄弟あり、長子妻をめとり子なくして死に、第二の者これを娶りまた子なくして死に、第三も第四も七人みな死に遂にこの婦も死ねり、斯くて復活の時かれら甦らば此の婦は誰の妻となるべき？。』イエス彼等に向ひ

すのである、最初に招いて來なかつた人々は猶太人のことで、後から來人々は信者を意味し、禮服を着用せなかつた人はイエスの弟子となつても其の命令を聞かず、己一人賢し英しとする人の事で、神は我等の心中をも見拔き、其の善惡に從ひて報を與へたまふものである。

其二　最大の誡律

此の時パリサイの輩等は如何にかしてイエスを苦しめんと相談し、其の代表者をイエスの許に送り『師よ、爾は正義の人にして誰にも偏らず、又外形に拘泥せず誠實を以て神の道を述ぶる者と知り、乞ふ貢をカイザルに納むるは宜きか、或は否らざるべきか？。敎へ給へ。』と殊勝らしくも問掛た、若しイエスは稅を出せと云はんか愛國心なき猶太人の敵として世に知せ、出す勿れと云んかローマに反する者として殺さしめんとする彼等の惡しき計略で、イエスの返答いかにと待まうけた、イ

神、全意志を以て主たる爾の神を愛せよ、是誡律の最も大いなるものなり、第二も之と同じく己の如く隣を愛すべし。」と仰せられた、こはパリサイ人のみでない我等すべての人の守らねばならぬ誡律である、然らば讀者の内にはみることの出來ない神を何して愛することが出來やうかと云ひ給ふならん、如何にも御仰せの通り神を見ることの出來ないのは誠である、が併し我等は常に親切をされたり、或は良にしてくれた人を見ずして終ることも度々ある、例へば讀者諸君は只獨り、遠き國に旅立ち歸らんとする其の途に、諸君の衣服は汚れて縕縷となり、靴は破れて足を出し、金は一文もなく空腹を感ずること甚だしく、道端の木蔭に憩うてゐる内熟睡したと想像せよ、又諸君が目を醒した時に諸君のために新しき着物、新しき靴、美味き食物が置かれてあつたと假定せよ、然らば例へ其の置いてくれた人を見ぬにせよ、諸君は必ず其の人の

『愚なる哉爾曹は聖書と神の力を知らざる故に斯誤てるなり、夫甦る時は娶らず、嫁がず、天にある使等の如し、この事はモーセの書棣の卷に明らかにあり、爾曹これを未だ讀まざるか？』と仰せられた、あはれ彼等も亦一言も發せずして立ち去つたのである。

又もやサドカイの徒は敗けたと云ふので先に敗けたパリサイの輩はやつきとなり、其の方法に就いろ〳〵と相談をした、此の時一人の敎法師傲然としてイエスの許に行き『師よ、多くの誡律の中最も大切なるものは何か？』と問うた、誡律とは神が我等人類になせと命せられしことどもである、例へば安息日を潔く送ること、他人に對して親切を盡すべきこと、盜み僞りはしてならぬこと、是皆誡律の一つである、神は此の外聖書に多くの誡律を敎へ給うた、夫で此の敎法師は其の中の大切なるものを知らんとしたからである、イエス之に答へて『爾の全心、全精

いて見せ、或は笑ひたくなきに笑つて見せる様に見掛のみとの意味である、之等學者とパリサイの人等は安息日に會堂に行きては人の注目し易い高き處に坐り、又祈禱をなす時は態と道端に出て人に見せ掛け、安息日の外は常に不義不正を行ひ、己の物にあらざる物を取込んで得得としてゐた、それでイエスは彼等を『僞善者』と呼ばれたのである、我等も敎會に行つてる時のみ善事を思ひ、又善事をなすが、敎會を出ると間もなく惡しき考をなし、惡しきことを行ふならば、敎會に行くこと、神に祈ることは何等の價値もなく、何處にも居り、何處にも見たまふ神は恩惠たまはぬのである。

エルサレムの神殿に庭と云ふ處あり、其處には喇叭の様な口を持つ箱がある、之は神殿に參詣した人々が賽錢を入る賽錢箱である、此の金は祭司が集めて神殿の必用品を買ふのであるから、此の金は神に捧げた

厚意を有難くおもふに違ひない、又諸君は眞暗な暴風雨の夜道に踏迷ひ、深き河に落込み、今や溺れて死なんとする時に、力強き人が來り、飛込みて諸君を助け、安全に岸まで上げてくれたと想像せよ、然らば其の人は暗にまぎれて行つて了つたと云へ、諸君は其の恩人たる彼を愛するであらう。

さて神は我等一人々々に着物と、食物と、すべて善物を與へ給うた、神は我等をして永遠の刑罰より免れしめんために獨子を此の世に降したまうた、是により例へ神は見えないとしても、我等は愛せずに居られやうか、我等は此の世に生きてゐる限り神を愛せねばならぬ、若し然でないならば神の子となることは出來ぬのである。

イエスは學者とパリサイ人らに向ひ『僞善者』と呼ばれた、僞善とは心にもないことをすることで、例へば俳優の様に自分が泣きたくなくも泣

いだ。イエスの一行も亦ベタニヤに歸らんとしてゐた、此の時見も知ぬ人使徒ピリポの處に來り『君よ、我儕イエスに見えんことを願ふ者なり。』といふた、夫でピリポとアンデレはイエスに此の事を取次いだ、イエスは弟子達を初め其處にゐた多くの人に『人の子榮を受くべき時至れり、夫一粒の麥地に落ちて死なずば何時までも唯一つにてあらん、されど死なば多くの實を結ぶべし、その生命を惜む者は失ひ、其の生命を惜まざる者は限りなき生命に至らん、若し我に事へんと思ふ者はわれに從へ。』といふた、此の時イエスは猶太人の將來を思ひ、福音の前途を考へて深き憂に沈ませられ父なる神と物語られた、傍にゐた人々は其の聲を聞き雷が鳴ると云ふ者があれば、天使が話をするのであると云ふ者もあつた、イエスは彼等に向ひ『此の聲は我ためにあらず爾曹のためなり、此の世は今審判せらる、見よ我は今に殺さるべし。』と仰せられ、

のと同じことである、イエスは忙はしき問答も終り、其の日の夕方此の賽錢箱の處に來てしばしの間勞れし身を休せられた、いろ〳〵の人が來り金を入れて行くが、其の內に貧しき寡婦が來り、僅四厘程の金を入れた、此の時イエス弟子達に向ひ『此の貧しき寡婦はすべての人より多く賽錢を入れたり、そは金持等は有餘る所より神に獻げたるものにして尙多くの財產殘れり、されど此の婦は貧しきに關らず其の持物を悉く獻げたればなり。』と仰せられた、之によりて見れば我等金持は時に割合に多く獻げたよりも貧乏の時、困難の時に少しづゝでも誠心を以て獻げることは神の最も喜び給ふ所である、神に何物かを獻げることは困難であるが、これは神を愛する者は喜んで何物かを獻げる者である。

イエスは多忙なる一日も無事に終へて、日は愈々西に傾き、鳥は塒に急

我に從はざる故にわれ爾曹を惡人等の行くべき地獄に投込ん。』と仰せらるゝことであらう、其の樣に惡人は地獄にて永遠に苦み、善人は天國に行き永遠に幸なる生涯を送ることである。

イエスは弟子達に此の事を注意する樣次の譬喩を語られた。

『新郎を迎ひに出る十人の處女があつた、そは猶太の國の習慣では結婚式をするに先新郎は其の友達と共に新婦の家に行き連れて來るのである、その新郎の家に近づかんとする頃多くの友達は各自に燈火を燈し大いに歡迎するのである、是等十人の處女は新郎を迎ふるために出で、燈火をともし、すべての準備をして待つてゐたがなか〳〵に來ないのでつい知らず〳〵の內に熟睡して了つた、併し其の內五人の處女は賢くして手燭の油の外に油壺を持つて來た、そは油の不足になつた時注ぎ足すためである、さりながら他の五人の處女は愚にして手燭の油

我が尚ほ生きてゐる内に神を信せよと敎へられたのである。

イエスは弟子の問に答へて此の世は審判べきこと、幷びに其の日には多くは天使等と共に又來りたまふ、と仰せられた、其の日には太陽も月も星も光を失うて世は黑白も分らぬ暗となり、地は震ひ、天には恐しき響あり、人は懼れおのゝき悲の叫は到處に聞えるのである、此の時イエスは凡ての人の見ゆる寶座に座し、すべて死せる人は甦り彼の前に立ち善惡何れにか審判かれねばならぬ、此の時は海の深みにも、山の奥にも、何處にも、隱れることが出來ぬ、そは神の力が何處にも届き御前に引出したまふからである、斯く生ける人を初め死せる人をも甦らして之を二つに分けたまふのである、而してイエス右手に立てる人々に向ひ『爾曹はわが言に從ひ、また我を愛したる故にわれ爾曹を善き所に送らん。』と仰せられ、又左手に集る惡人等に向ひ『爾曹はわれを愛せず、また

し、賢き處女等は常にイエスを愛し、イエスに從ひ、イエスの天より再臨したまふ時出迎をする善き人々を指すので、イエスは之等の人々を天國にまで導くことであらう、而して愚なる處女等とはイエスを愛せず、又その誡律を守らず、審判の日の用意をなさなかつた人々を指すので、彼等とても天國に行くことを望むであらうが、門は最早閉ぢられて入ることが出來ないのである、故に永遠に苦み悲まねばならぬ。

イエスは之等の事を敎へたのち弟子達に向ひ『二日の後に逾越の節あるは爾曹の知る處なり、我その日に捕へられて十字架に釘けられん。』と仰せられた、そは祭司等が己を惡みて殺さんとしてゐること、又弟子の一人なるユダは彼等と共謀して己を賣さんとするを前から知つてゐたからである、其の如くにユダは祭司の處に行き、我なんぢらの求むるイエスを爾曹の手にわたさば幾何の金を與ふるか。』と問うた、祭

の外何も持つて來なかつた、斯くて熟睡してゐる內に見張つてゐた人人は新郎の來るのを見て「新郎は來る、汝等出でて迎へよ。」と叫んだ、此の聲に眠を醒まされて急に起き、手燭を見れば最早眠つてゐる內に油は盡きて消えなんとしてゐる、夫で油を用意せない愚な處女等は狼狽ながら賢き處女の處に行き「汝の油を我等に分與へよ。」と云うた、されど賢き處女等は「我等の手燭と汝等の者に注ぐには足らず、油を賣る家に行き購ひて汝等の手燭に滿たせよ。」と答へた、夫で愚なる處女等は油を買ひに行つたが、其の內に新郎が通り過ぎて了つた、之に反して賢き處女等は手燭を燈け新郎と共に行き婚姻の席に坐つてゐたのである、時餘して愚なる處女等は來たが、最早時すでに遲く門は締られぞれ程外から叫んでも答ふる者がなく、とう〳〵入ることが出來なかつた。』此の譬喩の內の思はぬ時に來た新郎は審判の日に來るイエスを意味

市に行け然らば水甕を運ぶ人に會はん、其の人に從いて其の家に行き主人に會ひ「主と我等が晩餐を守るべき大いなる室房を見せたまへ。」と云へ、然らば主人は机幷びに椅子などのある廣き二階座敷を示すべし、汝等其處に用意せよ。』と仰せられた其の樣にペテロとヨハ子はイエスの命ずるまゝに市へと行いたが、水甕を運ぶ人に出會うたので其の跡に付けて行き、其の家の主人にイエスより教へられし通り云ふと人の誰もゐぬ大きな二階座敷を見せた、夫で二人は此處に節の用意をなしたのである。

其の日の夕方イエスと他の使徒達はベタニヤを出で橄欖山を過ぎ、エルサレムの市に來り二人が兼ねて用意してある晩餐の席に着いた、此の時イエスは彼等に向ひ『われ苦難を受くる前に爾曹と共に此の逾越の節をなすことを大いに願へり、我なんぢらに告ん、神の國の來るまで

司の長等は『銀三十を與へん。』と答へた、銀三十と云へば餘り多くの金でもないが、何物よりも金を愛する守錢奴ユダは遂に三年の恩を棄て彼等に賣すことに決心したのである、此の時よりユダはイエスを祭司等に賣さんがためにその獨でゐる機を伺うてゐた。

其三　最後の晩餐

猶太人の待ちに待つた逾越の節もはや明日となつたので何處の家でも用意に忙はしい、その準備と云ふのは此の節に家族打ち集うて食ふ小羊や其の他種子入ぬパンなどで、逾越の節は前すでに述べし通り夜中に食事を終つて了はねばならぬからである、イエスは己が身に來る慘劇の前に親しく辛苦を共にせし使徒達と共に名殘の集をせんかと考へてゐる時『主よ、我儕逾越の用意を何處に備ふべきか。』と弟子の一人が聞いた、イエスは最も愛するペテロとヨハネを召び『エルサレムの

猶太の國では水を汲んだり、主人の足や或は客の足を洗ふのは奴隷か一番下の僕がする役目である、然るに彼が斯くなしたのは何して先生たり主たる者が斯くなしたるかを敎へんためである、イエスは彼等の足を洗ひたる後、着物を元の如く直し、又食卓に付き、やをら彼等に向ひ『爾曹も之を知りて斯くのごとく行さば福なり。』と仰せられた、それよりまた言葉を續け『我まことに爾曹に告ん、爾曹の內の一人はわれに逆く者なり。』といはれた、そは使徒の一人なるイスカリオテのユダが彼を賣らんとしてゐることを意味されたのである、併し使徒等は此の言葉を聞いた時に非常に驚き且悲み互に顏と顏を見合はせつゝ何いふことかと怪しんだ、此の時彼の尤も愛してゐる弟子ヨハ子は彼の胸に寄掛つてゐたが『主よ、其の一人は誰なるか示し給へ。』というた、イエス『今我と共に皿に手を着け又一撮の食物に物を浸けて與ふる人ぞ夫で

は又これを食せじ。』と仰せられた、そはイエスは己の死が一刻々々と近づきもう一度と此の節を守れぬことを知つてゐられたからである、然るに使徒等はあはれにも之を悟さず、彼の死などは夢にも思はぬところで、只彼は神の子であるが故に英き人となり、遂には國を支配する王となつて己等も高位高官になるのだと思ひ込んでゐた、夫で彼等は前にもあつた様に誰が一番その高位を占めるかと互に云ひ爭うたイエスは彼等に向ひ『異邦人の王は其の民を支配し、又その上に權を取る者は恩惠を施す者と稱へらる、然ど爾曹は斯如すべからず、大いならんとする者は幼きが如く、首たらんとする者は役はるゝ者となれ、然らば父なる神は高き位を爾曹に與へん。』と教へられた。

イエスは此の事を實際に教へんとして食卓より離れ、着物の袖を折上げ盥に水を入れ使徒達の足を一人々々丁寧に洗ひ手拭を以て拭いた、

の教會に行してゐる、凡そイエスを愛する人々は彼が此の世に再臨し給ふ日まで此の聖餐禮を守り、パンを食ひ、葡萄酒を飲む毎に己の罪を考へ、十字架の上に死にたまひしイエスを思ひ、己が罪を悔改め再びせぬ樣に決心することであらう。

夫からイエス使徒達に向ひ『小子よ我なほ片時なんぢらと偕にあり、されど父の榮を現はすために行かん、爾曹われを尋ねることも來ること能はじ、之先に猶太人に告げし如し、われ世を去る前に新しき誡を爾曹に與へん、そは我なんぢらを愛せし如く爾曹たがひに相愛せよ。』と敎へられた、シモンペテロはイエスが行くとのことが氣になり『主よ、何處に行き給ふや？』『我ゆく所へは爾いま從ふ能はず後從はん。』『主よ、何故に今爾に從ふこと能はざるか、我は獄舍にまでも共に行き、死も亦敢へて厭ふ處にあらず。』『鷄なかざる前に爾三度われを知らずと云はん。』

ある、われは豫言の書に記されし如く行かん、然れど我を賣す者は禍なり寧ろ生れざりしならば幸ならん。』と仰せられ、一撮のパンをユダに與へられた、夫でユダは『師よ、我なるや？』『爾の云へる如し。』と答へられた、夫でユダは食卓を離れ、家を出で、闇の家に隱れて了つた。

ユダが出行くやイエスパンを取上げ、神に感謝して後細く割き、其の一片を使徒等に與へ、『之を取て食へ、此は爾曹のために割くわが身體なり。』と仰せられた、そはイエスの身體は凡ての人のため十字架の上に此のパンの如く割かれるとの意味である、次に杯を取り上げ神に感謝して後使徒達各自に廻し『此の葡萄酒は罪の赦しのために流す我が血にして立つる所の新約なり、爾曹飲む毎に我を記憶よ。』といいた、そは此の葡萄酒は彼が十字架に釘けられ、手足より流れ出づる血汐を示す模範であるとの意味である、之は今日も聖餐禮或は主の晩餐というて我々

ピリポは『主よ、我儕に父を示したまへば足り。』と云ふと『ピリポよ、我かく久しく爾等と偕にありしに未だ我を識ざるか、我を見し者は父を見しなり、何ぞ父を我儕に示せやと言うや？』と悲しげに答へられた、此外イエスを愛するならばイエスの誡しめを守るべきこと、又イエスを愛せば神も我儕を愛したまふことなどや、イエス此の世を去りし後は弟子達の心に聖靈を送り其の聖靈は常に彼等と偕にあり、彼等の願を凡て聞入れ、又彼等の悲む時に訓慰師となりたまふなど心行くまでに名殘の物語をせられた。

イエスは之等のことを語り給うた後、天を仰ぎ、弟子達のために祈られた、が併し之は只に使徒達許りのためでない、使徒達が述べし言葉よりイエスを信じた男女老幼すべての人のために祈られたものである、使徒等が千九百年の昔に死に失せて我々が其の言葉を聞くことは出來

と仰せられた。夫でペテロはいよ〳〵驚き益々やつきとなつて『われ死ぬるとも爾を知らずと云はじ。』と答へ他の使徒達も『然り。』と相槌を打つた。

然は云ひながら爭はれぬものは彼等の顏色何處となく憂に沈めるを見て『爾曹心に憂ふること勿れ、神を信じ亦われを信ずべし、わが父の家には第宅おほし、我なんぢらのために所を備へに行く、もし行きてわれ爾曹のために所を備へば又來りて爾曹を我に受くべし。』と仰せられた、此の父の家とは天國のことをいふたので、又來るとは最後の審判の日にイエスが來りたまふことを意味するのである、トマスは不信なる顏付にて『主よ、我儕なんぢの行く處を知らず、如何にして其の途を知り得んや？』と聞くやイエス嚴然として『我は途なり、眞なり、生命なり、人もし我によらざれば父の所に行くこと能はず。』と仰せられた愚にも

を此處に送らんとて來たまひ、八人の使徒を門の外に待たせ、最も愛するペテロ、ヨハヂ、ヤコブの三人を伴なうて園の内に入り、又イエスは此の三人より少しく離れ、地に跪き汗に血の交る程熱心に祈られた、聖書を見るとイエスは祈禱の内に非常なる苦痛をなされしことが書かれてある、何故イエスは斯かる苦痛を嘗めたまうたであらうか、そは彼が諸君や私のなした罪の刑罰を負はれたからである、噫罪は恐しいもの神は決して赦したまふことがない、併しイエスは我々の罪の身代となつてくれる故赦される、若しさうで無いならば我々は自身の罪を負はねばならぬ。

イエスは斯く祈禱をなした後三人の處に來て見れば皆熟睡してゐる、夫で彼等に向ひ『何故爾曹眠るや、起きて目を醒し惑に入らぬやう祈れ。』と仰せられた、そは今に彼等は惑ひ我を逃去ると云ふことを知つてゐた

ないが其等の人の言葉を書き記した聖書により彼等の言葉を讀むことが出來る、我等はもし其等の言葉によりイエスを信じ、又彼を愛する樣になつたならば其の時こそ彼が父に祈られた人々の内の一人になるのである、イエスは其の信ずる者のために『われ爾に彼等を世より取りたまへと祈らず、只かれらを守りて惡に陷らす勿れと祈る。』と父なる神に願はれた、斯くして後客房を出で、勇ましくも一同にて讃美の聲高く、暗路を辿りつゝ橄欖の山へと進ませられた。

其四　ゲッセマネの園

ケデロンの河を渡れば直ぐ橄欖山である、山の西斜面にゲッセマネの園と云へる處あり、今猶橄欖の大木生ひ茂り、此の内に入れる者は轉た無限の感に打たれるとのことである、イエスはエルサレムに來給ふ度毎に此處に來給ひ、靜かに父なる神と交はられた、此の夜も殘る僅な時

ユダの心根を悟ることが出來た。

さてユダは、『我接吻したる人はイエスなれば速かに逮捕せよ。』と約束してあつたので圖々しくもイエスの處に來り『主よ、主よ。』と云うて接吻をした、イエスは落付たる語調で『ユダよ、爾は接吻によりて我を賣すか。』と仰せられた、此の時祭司等の遣はした兵士等がイエスを捕へ、縛りて引き行かうとした、側にゐた徒使等は此の有樣を見て『主よ、我等は劍をもて戰ふべきか。』と聞いた、其の內に丁度劍を持つてゐたペテロは拔く手も早くイエスを捕へに來た一人の者の耳を切り落した、併しイエスペテロに向ひ『汝の劍を鞘に收めよ、凡て劍をとる者は劍にて亡ぶべし、若し我のがれんと欲せば父は數千の天使を送り我を安らかに守らるべし。』と云はれた、然るにイエスの逃げず捕へられたのは、前すでに度々述べし通り我等の罪の身代りとなられんためである、夫でイ

からである、彼は再び行き祈り、又來りて見れば先の如く寐ねてゐる、三度目も同じである。此の時イエスは彼等に向ひ『われは罪人の手に賣さるゝなり、起きよ我儕行くべし、我を賣す者近づけり。』と仰せられた。ユダは祭司の長等に銀三十にてイエスを賣すことを約束して以來、常にその機會を伺うてゐた、今やイエスは弟子達と共にゲッセマネの園に居ることを知り、好機會逸すべからずとなし、直ちに祭司の長とパリサイの人々に此の由を告げた、夫で彼等は兵士を連れユダと共にイエスを逮捕にかゝつた、足の音、松明の光、劍戟の閃光、靜かな暗の夜を破つて物悽い、イエスは遠くより此の有樣を見て已に急の及ぶを知つてゐられたが、逃げやうともせず、彼等の至るのを待つてゐた、松明の光はだん〳〵近づき人聲も聞き得る程になつた、熟睡してゐた三人も初めて目が醒たのである、見れば群衆の內にユダがゐる、此處で初めて彼等は

であるが、之等の人を支配する一人の祭司の長があつた、此の人は宗教の方面に非常な權威があつた計りでなく、政治上の力もあり猶太人の內最も貴い位の人である、其時の大祭司の長をカヤパと云うたが、實權は其の養父アンナスにあるので、イエスを捕へた人々は彼の家に連れて來た。

ペテロとヨハ子はイエスを打棄てゝ逃げたものゝ心も心ならぬので舞ひ戻り、人に知られぬ樣氣を付けながら見え隱れにイエスの跡に從いて來た、イエスが祭司の長の家に入る時ヨハ子は從いて入つたがペテロは戶口に立つてゐた、やがてヨハ子に連れられて入らんとする時門を守る一人の婢はペテロに向ひ「爾もイエスの弟子の一人ならずや？」。然らずと答へた、入つて見ると僕等や下吏共が寒さ凌ぎに燒き火をしてゐる、ペテロも其の側に立つて煖まりを取つた、此の內にもイエ

エスは手を伸しペテロの切り落した人の耳に觸り全く元の様に癒されたのである。

夫から祭司の長及び長老等に向ひ『爾曹なんぞ我を捕ふるに刃と棒とを持來り强盜に當ふが如くするか、われ日々爾曹と皆に神殿にありし時何んぞわれを捕へざりしや。』と仰せられた、此の騒ぎの内にイエスの弟子は皆逃失せた、先にイエスが逾越の節を守れる時彼等に語れる言葉を諸君が記憶してゐるであらう、彼等は異口同音に決して離れないと云ふた、殊にペテロは他の弟子達がどうであらうが自分のみは死に至るとも離れぬと云ふたに拘らず、ペテロも亦逃去り淺間しくもイエス一人を敵の内に殘したのである、其の内に彼等はイエスを捕へた。著者が先に祭司に就て話したことを諸君は記憶してゐることでしやう、祭司には各自の班に一人の長があり、普通これを祭司の長と云ふの

園の中に居し者にあらずや？』といつた、夫でもペテロは白を切つて『我はなんぢの云ふ處の人を知らず。』と答へた、此の時に丁度鷄が再び鳴いた、又イエスはペテロが己を拒むのを見て後を振向きペテロの顔を眺められた、夫でペテロもイエスが己に告げたまひし言葉を思ひ出し、如何に己の不信仰にして罪深きかを知り、密と家を出で靜なる處に行き、やるせなき胸を撫でながら男泣に泣いた。

さて祭司の長と猶太の宰等が常に會議をする集議所は神殿に近い處であつた、彼等は此下に於て律法に逆いた人々を審判き、罪を定めるのである、其處を法庭と云うてゐた。

東は白みて空は紅の色を示す、彼等はイエスを此の法庭に連れて行つた、色々と審問して見たが罪に處する程のことは一つもない、夫で僞の證人を呼んで來た、そは彼等は何にかしてイエスを殺さんことを願ふ

スはアンナスの前に立たせられ色々の事を聞かれてゐる、夫でイエス答へて『我何處にてもあらはに語り隱に敎へたることなし、故に我に聞の要なし、我が敎を受けし人々より聞け、彼等はわが云ひしことを凡て知れり。』と云うた、此の時イエスの傍に立つてゐた下吏が此の言葉を聞いてイエスを不敬漢と思ひ『爾祭司の長に答ふるに斯く不禮なる言を吐くか。』と云うて掌でイエスを叩いた、イエスわが語りしこと善からずば其の善からざるを證せよ、若し善くば何ぞ我を打つや？。』と詰問せられた、此の時祭司の長の或婢火に煖みを取つてゐるペテロの處へ來り、顏を見詰めながら『爾はイエスの弟子の一人にあらずや？。』と問うた、ペテロは又『然らず。』と答へた、時はもう夜も更けて曉を知らする鷄の聲は高く聞えたのでペテロは立上り、玄關より出掛やうとすると、先にグッセマネで耳を切落された親類の者が來り『爾はイエスと共に

き血を流し、我は罪を犯しぬ、金を返せばイエスを赦せよ。』と願うた、されど彼等は世情も『我儕に於て何ぞ與らんや、爾みづから其の罪に當るべし。』と答へ勿論金は受取なかつたのである、夫で止むなくユダは金を地に投げ付け、彼等を後にして野に行き、自ら縊れて死んだ、彼は斯くの如く死ぬ代りイエスの處に行きその大罪に就て悔改めたならば赦されたことであらう、我等は今少し前に讀みたる如くペテロは彼を知らぬと云つて罪を犯したなれど、其の後イエスを愛し、イエスに從ひし故に罪が赦された、されどユダは眞にイエスを愛せず、又誠に罪を悔改めなかつた故に只自殺する程に心配した丈である、ユダの立去つた後祭司等は金を拾ひ取り、ポッターの野と云ふ處の田を買うた、夫より其の田は家族や友達を放れて寄べなき人がエルサレムに來て死だ時葬る處にする慣例になつた。

たからである、併し多くの僞の證人が來り、有りもせぬ事を有るかの如く述立てたが、何れもイエスを殺す程の證據にはならなかつた、夫で祭司の長自身はイエスに向ひ『爾はキリスト神の子なるか？』『然り爾の云へるが如し、夫われは神の右に坐し、審判の日に天の雲に乘りて來るを見ん。』と答へられた、此の言葉を聞いた祭司幷に宰共は大いに憤り『我儕何ぞ又他に證據を求めんや、此の一言は死罪に處すべき價値あり。』と異口同音に叫んだ、夫で彼等はイエスを嘲笑ひ、或は唾し、或は目隱をして頭を叩き『誰が叩きたるや？若し汝は神の子ならば豫言せよ。』と云うて嘲弄した。

さてイエスに逆いたイスカリオテのユダはイエスが眞に殺されるやうになつたのを見て、初めて己の罪が如何に大いなるかを思ひ大いに心配した、彼は銀三十を手にして宰と祭司の長の所に行き『われは罪な

律法に從ひ勝手に審判せよ。』と云ふと、彼等は何にかしてイエスを殺さんと思ひ『我儕に人を殺すの權威なし、彼は民を惑はし稅金をローマ皇帝カイザルに納ることを拒み、又自ら王なるキリストと稱ふるなり。』とピラトの手に掛けるやう讒訴した、夫でピラトも是非なくイエスを法庭に呼び入れ『爾は猶太人の王なるか？』『爾これを聞は自身よりか、或はまた他人の訴へによりてなるか？』『我は猶太人にあらず自身にあらざること勿論なり、爾の國民と祭司の長等は爾をわれに渡せり、爾なにをなしたりや？』『我國はこの世の國にあらず、若し我國この世の國ならば我猶太人に捕へらるゝ時に我僕は戰ひしならん、されど戰はざるを見ば此の世の國あらざるを知るべし。』と答へられた、ピラトは猶も念を押し『爾は王なるか？』『然り爾の言葉の如く我は王なり、われ之がために生れ、これがために世に來り、人々に眞正を證せんとする者

其五　ピラトの審判

以上に述べて來た樣に祭司の長達や學者及び宰等はイエスを死罪に定めたが、日本の裁判官が刑を執行する樣に直に行ことが出來ず、其の許可をローマ皇帝より遣された猶太の知事に願はねばならぬ、そは度度前より述た如く猶太はローマの屬國であつて、自治の政體を許されてあつたが、人を死刑に處するが如き大事件は許可を受けねばならなかつたのである、夫で彼等はイエスを縛り、當時猶太の知事であるピラトと云ふ人の家に連れて行つた、此の時は最早平旦方である、彼等は同國人でないピラトの家に入るのは汚穢れると思うたので仲々に入らない、夫でピラトは自ら出て來て『如何なる事を以て此の人を訴ふるや？』と聞いた、彼等『彼若し惡を行さずば如何で爾の處に連來らんや。』と答へた、ピラトは事の面倒なるを思ひ『爾曹は彼を連れて行き爾曹の

來るやヘロデは色々の事を尋ねた、併しイエスは一言も答へない、ヘロデも案に相違し、目的もはづれたので兵士等と共に嘲弄し、美はしい着物を着せ又もやピラトの處へ送り返した。

夫でピラト又祭司の長等や民の學者共を集め、爾曹は此の人を我に連來り民を亂したる者となせど此の人に斯る罪あるを見ず、ヘロデも亦然り、故にわれ笞打てこれを釋さん。』と謀つた、人々は仲々に其の位では承知せない、ピラトは亦一策を考へた、そは毎年逾越の節の時にローマ政府に反抗して牢屋に入れられた猶太人の一人を赦す慣例になつてゐる、時は丁度逾越の節であつたのでイエスを釋さんことを彼等に建議した、併し人々はイエスを釋すことに承知せず、バラバを許せ。』と口々に叫んだ、此のバラバと云ふのは有名な盜賊で、ローマの政府に謀返を企て捕へられたのである、此の時ピラトの妻は彼の側に來り、此の

なり。』と仰せられた、之に依て少しもローマの法律に逆くものでない。それで祭司の長は群衆に向ひ『我はこの人に少しの罪あるを見ず。』と云つた、此の言葉を聞いた人々はやつきとなり『彼はガリラヤより始めて遍くユダヤを教へ、此處まで來りて民を亂せり。』と騒いだ、ピラトは彼がガリラヤより來たといふのを聞き、ガリラヤはヘロデの領地である故ヘロデに送るに越したことがないと思ひ早速に送つた。ヘロデに就ては前すでに精しく述たれば今なほ記憶してゐるであらう。

彼は洗禮のヨハヂを殺し、其の母を殺し、其の臣僕を殺し、兄弟の妻をも盜んだ惡人で、キリストは彼を狐と呼びなされた、此のヘロデはイエスに會ふことを非常に喜んだ、それは前よりイエスの噂を聞き、イエスの奇蹟を目の當り見たいと思つてゐたからである、夫でイエスの送られて

ずして尚ほ十字架に釘けるやうイエスを彼等に與へたのである。

さてローマの人々は罪人を十字架に釘ける前に鞭打のが習慣であつた、彼等は衣服を剝ぎ、身體を少しく前に扛げる樣低い柱に縛り付け、其の後より殘酷にも棒を以つて脊を叩くのである、其樣にピラトはイエスを捕へて打擲した、それから彼を十字架に釘ける兵士等は嘲弄し初めた、イエスは自身から王であると云うた故に彼等は其の上衣を剝ぎ取り、其の代りに紫の衣服を着せた、そは王は紫の衣服を着る習慣しがあつたからである、そして彼等は棘の冠を作りて被らせ、黃金の王笏の代りに棒を右手に持たした、それから彼等は恰も王の前に出たかの如くうやうやしくイエスの前に出て跪き、『猶太の王よ安かれ。』と云ひつつ唾を吐かけ、或は其の手に持つてゐる笏の代の棒を以て頭を叩き、猶ほあらゆる嘲弄をなした。

善人に何もかゝはる勿れ、そは我この人に苦しめられ大いに恐たる夢を昨夜見たればなり。』と云つた、ピラトは少々恐れながら早くことを決せんと思ひ『キリストと稱ふるイエスを如何にすべきか？』『十字架に釘けよ、十字架に釘けよ。』と叫ぶ、ピラト尚も『彼にかゝる罪なきにあらずや。』と云ふと、人々は一層聲高く『十字架に釘けよ。』と狂ひ叫んだ、ピラトは最早說くの無益なるを知り、只亂の起らんことを恐れ、人々の前で手を洗ひ『我は此の義人を死刑にするに就ては何の關係もなし、爾曹みづから其の報に當れ。』人々『其の血は我等とわれらの子孫に係るべし。』と答へた、ピラトが手を洗うたのは汚れたものを水で洗ふ樣に己の罪をも洗ひ落す積りであらうが、罪は手を磨り剝く程に洗うた處で落るものでない、何故なれば罪は手になくして心の內にあるのである、其の證據に彼はイエスの無罪を知り十字架に釘けることを可とせ

人は己の十字架を刑場まで負うて行かねばならなかつた、併しイエスは非常に打ち叩かれた後である故に、大いに疲れて十字架を背負ふことが出來ず、七度も倒れたと云ふことである、夫で田舍より來て此處を通合したシモンと云ふ人に其の十字架を背負はした、エルサレムの婦人等は此の有樣を見て女心の優しくも同情の涙を流した併しイエスは彼等に向ひ『エルサレムの女子よ、我がために泣く勿れ只己とおのが子のために泣け、子を產まざりしならば幸福なりと云ふ日來らん、其の時には人々山と陸とに向つて我が上を被ひ、我を敵より隱せと叫ばん。』と仰せられた、そはエルサレムの人々が神の誡律を守らず、不義と罪惡の生涯を送つてゐる故に神の刑罰は今に來るとの事である。

やがて彼等はエルサレムの市はづれガルバリ又の名をゴルゴタ、即ち髑髏と云ふ意味の所に來た、此處でローマの兵士等は罪なき彼を十字

斯くも兵士等があらゆる嘲弄を加へたる後ピラトは既う一度イエスを釋す樣祭司の長と多くの人々に計らうと思ふた、夫でイエスに棘の冠と紫きの衣服を着せ、彼等の前に引出し、あらゆる殘酷とあらゆる嘲弄を加へた、そは此の有樣を見て憐みの心を起し、釋す樣に願ふであらうと考へたからである、斯して彼等に向ひ『我この人に罪あるを見ず。』と云ひも終らぬに人々は天地も崩るゝ計り『十字架に釘けよ、十字架に釘けよ。』と大聲に叫んだ、ピラトは、爾曹勝手に彼を捕へ、心のまゝに十字架に釘けよ、我は此の人に罪あるを見ず。』と云うたものゝ反對の聲が餘り強いので大いに懼れ、薄志にも無罪の人イエスを彼等に付し、十字架に釘けることを許したのである。

其六　十字架上の死

ローマの國の法律では誰でも死刑の宣告を受け、十字架に釘けらるゝ

處せられたもので自業自得である、十字架に釘けられた人はそう直に死ぬものでない、其様にイエスは朝十字架に釘けられたが、尚正午になつても死なぬ、併し此の間に言語に絶する苦痛を嘗められたのである、兵士等はイエスを十字架より下して盜むものはないかと番をしてゐた、そして彼等はイエスの着てゐた衣をそれ〳〵に分け、裏衣のみは上等なもので又縫目がないので互に『誰の屬になるか籤を引かん。』と云つて其の如くになした。

ユダヤの知事ピラトはイエスの罪標をギリシヤ、ロマ、ヘブル三ケ國の言葉を以て『猶太人の王と。』書き頭の上の方に打付けた、ゴルゴタは前すでに述べし如くエルサレムの市盡頭であつて、多くの人が通ふ道筋であつた故に人々は立止つて罪標を讀んだのである、併し彼等は十字架上のイエスを見た處で同情の念も起らねば又助けやうとの考も起

架に釘として大きな釘を手と足に打込んだのである、斯る間も彼は柔和に忍耐し、父なる神に彼等を罰し給へと云はず却つて『父よ、彼等を赦し給へ、そは彼等はなすべきことを知ざればなり。』と祈られた、此は彼等がイエスを殺すことは大いなる罪で又罰せらるべきことを自覺せぬ故赦したまへとのことである、斯も彼等は彼を殺すとも、彼等を愛し、彼等が害を加ふるに反して善を與へんとし給ふのである、此時兵士等は酢と酒の混たものをイエスに飲ませやうとした、そはイエスをして正氣を失なはしめ、苦みを少くする積りであつた、併しイエスは飲まなかつた、何故なれば彼の死は我等人類が永遠に罰せらるゝことより救ふのである故、苦なしに死ぬことを望まなかつたからである。

イエスが十字架に釘けられた時に同じく一人は右に、一人は左に十字架に釘けられた、併し是等の人は盜賊であつて己の惡業により死刑に

弟子ヨハヂ其の外にクロペの妻マリヤ、七つの惡氣を逐出されたマグダラのマリヤなど立つてゐる、イエスは今や死して愛する肉體の母を殘さねばならぬ、思へば母マリヤは早くより夫に分れ、辛苦に辛苦を重ねて今日に至る、今やまた杖とも柱とも賴む己は先に立ねばならぬ、此の賴りなき母を慰さめんとしてマリヤに向ひ『此の使徒ヨハヂは爾の子の如く爾に仕へん。』又ヨハヂに『爾の母の如くマリヤを愛し且親切にせよ。』と呉々も托された、夫でヨハヂはマリヤを家に連歸り、其の後何不足なく養うたのである。

十二時ごろより三時頃まで全地には黑白もわからぬ眞の闇になつた、そは神の獨子が惡人に殺されてゐたのを悼みたまふたからである、此の時イエスは十字架の上より天にゐます父なる神に『わが神わが神何ぞ我を棄たまふや。』と叫んだ、諸君が若し不從順であつて父の機嫌を

らぬ、却つて嘲り笑ひ『爾もし神の子にしてイスラエルの王キリストならば今十字架より下りよ、然らば我等爾を信せん。』と罵つた、イエスが若し下りることを望んだならば下りる事が出來たであらう、併し前から度々述べしが如く我等人類のために十字架の死を取りたまふたのであるから自分のために下りないのである、其の時共に十字架に懸けられた盜賊の一人は『爾もしキリストと稱ふる救主ならば己と我を救へ。』と惡口を吐いた、今一人の盜賊は之を聞き咎め『爾かくも審判を受けながら神を懼れざるか、我儕は行し事の報を受けて當然なれど此人は少しも善らぬ事を行さいるなり。』と詰り、尙ほイエスに向ひ『主よ、爾國に至りし時は我を憶ひたまへ。』と云つた、イエスは心善く『今日爾はわれと偕に樂園に行くべし。』と答へられた。

偖十字架の下には首を垂れ憂ひに沈みイエスの母マリヤと最愛の

イエスの死を見て『誠に此の人は神の子なり。』と云つた、さて猶太人等は安息日に死骸を十字架上に置くことを好まぬので、ピラトの處に人を遣し二人の盜賊およびイエスを殺して死骸を取除くことを願つた、夫でピラトは兵士を送りユダヤ人の願ひの樣に盜賊の足を折つて殺したが、イエスは最早死んでゐた故に足を折なかつた、併し眞に息を引取つてゐるか否を驗べるために一人の兵士は槍でイエスの脅を刺た、さうすると水と血は流れ出たのである。

イエスが殺された近くにまだ人を葬つたことのない新しい墓穴があつた、それはアリマタヤと云ふ町の金持で又集議所の議員であるヨセフといふ人の所有であつた、此の人はイエスの弟子であつたが今までは猶太人の迫害を恐れて明らかに信仰の告白をなさなかつたが、イエスの死後大膽に云ひ現はして彼はピラトの處に行き、イエスの死骸を

害ふならば勘當されることがあるのを承知であらう、其の樣に神が今イエスより遠ざかつたのである、勿論イエスは神に不從順でなかつたが、我等人類の罪を彼一人に引受けたゆゑ、丁度イエス自身が罪を犯した樣に神より遠ざかつたのである、イエスは之を悟ると今まで忍んでいた凡ての苦痛よりも其の事が心配で其の悲しさのため叫んだのである、十字架の側にゐた或人は此の叫び聲を聞や海綿に酒を滲ませ芦の棒に付けてイエスに飮ました、イエス之を飮むと間もなく『事終りぬ。』と云うて首を垂れて靈魂を神の手に托した、此は彼が天の寶座より降り、我等の罪の重荷を負ひ、救の事業を全うしたことのことである、此の時に神殿の幕は上から下まで裂けて二つとなり、又地は震ひ、岩は搖けて善人を葬る墓は開き其の地下に葬られてあつた人々は復活してエルサレムの市に行き、多く人々に現はれた、十字架の側にゐた百夫の長は

トは彼等の願ひの通り兵士を遣はして墓を固守しめた、日は暮れ西の空の茜色も薄くなつて世はだん〳〵暗の帷帳に被はれるので、イエスの弟子等ござんなれと兵士等は待設けた、何程待つても人の氣合もせない、夜はしん〳〵と更て午滿頃俄然大いなる轟と共に地震がして來た、そは神が天使を遣はし、墓の口の石を轉ばし其の上に座つてゐたからである、彼の顔は太陽の如く輝き、其の着物は雪の如く白かつた、さすがに大膽な兵士等も此の樣子を見て大いに懼れ、地に伏し、身動きもせず恰も死人の樣になつてゐた。

貰ひ受けてその新しい墓穴に葬ることを願つた、ピラトは百夫の長よりイエスの全く死にたるを聞き、願ひの如くヨセフに與へたので彼は死骸を十字架より下し、新しい布をもて身體を被ひ、ニコデモの持つて來た香物を塗りて前の墓に葬り、その戸口に大きな石をもて閉して置いた、ヨセフは斯くも丁寧に葬りの用意をしてゐる時その側に二人の婦が座つてイエスの死體を瞰めてゐた、之はマグダラのマリヤと他のマリヤである。

イエスが葬られた翌日祭司の長とパリサイの輩等はピラトの所に行き『主よ、我儕はイエスに就て斯る事を思ひ起せり、そは彼が生前に於て三日の後甦らんと云へり、故に願はくは三日の間兵士を遣はして墓を固守しめよ、恐らくは弟子等きたりて彼を盜み而して死より甦りたりと云はん、然らば人民を惑はすこと前よりも大いなり。』と云つた、ピラ

第參編

子供の權利

田村直臣著

第參編　子供の權利

第壹章　廿世紀の大問題

はや人間を獸の樣に取扱ひ賣買をする事は世界になくなつたのであります。又專制國と云はれて居つた露國の樣な國でも、又民權などは夢にも見なかつた支那の樣な國でも、近來は權利の問題が中々に盛んになつて來ました。また女の權利問題も廿年此方非常な進歩を致しました。米國の或州では女に投票の權を與へ、又女が役人になる事も出來ます。英國でも今は盛んに女權運動が始まつて居ります。此の有樣で行けば女も男と同じく己の權利を自由に實行する事が出來ると思ひます。

す。而も子供は人類の大部分を占めて居るのであります。試みに日本の戸籍を調べても能く解ります。平均一家に必ず五人の家族が居ります。其の五人の内二人は大人で三人は子供であります。子供は世界の人口の内大多數を占めて居る事は明白なる事實であります。斯くの如く大多數を占めて居る子供が少數の大人より壓制を受け己の神より與へられた貴き權利を踏みつけにされて居るのであります。早かれ遲かれ子供の權利問題は何うしても起つて來る問題であります。若し人が此の問題を等閑に附し、川向の火事の如く思ひ、子供の爲に子供の權利を主張せなければ、巷に横たはつて居る石が正義を叫ぶに違ひありません。

然し權利は獨り男や女にあるのではありません。子供にも亦權利があります。廿世紀に必ず起つて來る重大なる問題は子供の權利であります。よく〳〵調べて見ると昔良い民が惡逆な君の爲に、無暗に權利を奪ひ取られて酷い目にあつたよりも、又女が男から非常な壓制を受けたよりも、はるかに今日の子供が親の爲又社會一般の人々より酷い壓迫を受けて居るのであります。或場所に於ては子供を獸よりも酷く虐待して居るのであります。近頃は日本でも動物虐待防止會と云ふ樣な會も設立せられて、動物を虐待するものを國の法律で罰せんとして居るのであります。痩せ馬が慈悲のない馬子に酷く尻を打たれても、人はそれに對して反對の聲を放ち其暴行を防がんとして居るのではありませんか。然るに貴き子供の權利に向つて叫ぶ者のないのは悲しむべき事ではありませんか。子供は人類の一部分でありま

あります。私は子供であるからには、親の所有品ではなく、神様のものであります。私には神様から與へられた子供としての權利があると、云ふ事は出來ませんか。子供が親に愛せらるゝのは、愛せらるゝ價はないものであるけれども親の慈で愛せらるゝといふのでありますか。神は、親と云ふ者は子供を愛する樣に御造りになつたのではありますまいか。又子供は親から愛せらるゝ權利を有して來たのではありませんか。若し親にして子供を愛せず、又其の子供に子供たるの敎育を與へませぬなれば、親は子供の權利を奪ふたのであります。權利と云ふものは非常に貴いものであります。王樣でも誰でも人間の權利を無暗に奪ふ事は出來ません。子供は自分の權利の爲には、親に對しては、何事も云ふ事も又する事も出來ない弱いものであります。子供は親に對してこれは酷い壓制だと思うても、親の命ずる通りに何でもや

第貳章　子供の權利

權利と云ふ言葉は何だか耳觸りのする言葉であります。權利と云ふと直法廷に出て爭をする樣な感じが起るのであります。故に或人は女權と云ふ言葉を聞くと躬の毛の倒立つ樣に嫌ふ者があります。從つて子供の權利と云ふと、女權と言ふ事を嫌ふ人がある樣に、嫌に感ずる人があるかも知れません。然し子供の權利と云ふものは決して、子供に投票の權があるとか、又は財產を所持する權があるとか、云ふのではありません。よく靜かに考へて見ると解ります。子供と云ふ者は所有品の如く親が自分の勝手氣儘にしてもかまひませんか　親は子供に對して何してそんな權利を有して居るのですか。子供は親に對して『私は物品でもなく、又、獸でもなく、飽迄も人間の一部分なる子供で

酒と云ふ物は社會を害し人を毒し、酒の爲に一人の人が一身を誤るばかりではありません、一家を亡ぼし又一國を亡ぼすものであります。然るに其の酒を飲んで社會に毒を流す者は何の位あるか知れません。禁酒會員は有らん限り其の矯正に盡力して居るのであります。又惡少年は云ふに云はれぬ擧動をなして兩親を泣かすばかりでなく社會を泣かして居るのであります。而して之が爲には惡少年を矯正せんとて感化院と云ふものがあります。其の他此の社會を救濟せんとして財を捧げ身を捧げて居る者は枚擧に遑がないのであります。然し今日社會改良に從事して居る人は根から矯正せずして、恰も左官屋が壁を塗る樣に外部から其の惡事を消さんとして居るのであります。

ホルンと云ふ敎育學者が云はるゝ樣に、今日の社會は山の高い所から轉がつて傷をした者を、山の下で病院を建て其の病人を醫すにき

つて行かなくてはならないのであります。親たる者は此の弱い子供に神の與へ給ひし貴き權利のあると云ふ事を決して忘れてはなりません。親が子供を自分の所有品であると思ふのは大なる間違であります。親は單に子供の保護者であります。子供は親に神樣から預けられた大切なる寶であります。然し金銀寶石の如き朽つる寶ではありません。神の形の印を持つて居る、生命ある、大未來を持つて居る、希望に滿ちたる、神の子供であります。

第參章　社會改革と子供の權利

今日の社會が何もよくないと云ふのは誰一人疑ふ者はありません。それで此のよくない社會を改めんとして働いて居る人は大勢あるのであります。

長しても其の習慣を續けますから、社會は從つて善い子供が出來ればと云ふ多くの戰があつたと云ふ事であります。今日迄の歷史に依ると血を流し又腕力に訴へなくては權利を取返す事は出來なかつたの

歷史家の言に依りますと人民が自分の權利を回復する爲に既に四千

第四章　子供の權利を實行する方法

出來る程淸くなつて行くのであります。子供に善い敎育を與へる事を爲さずして、大人になつて惡い者になつたと云て騷ぐのは、實に話の出來ぬ程間が拔けた事であります。社會が今日腐敗して居る其の罪は社會自身の罪であります。子供の權利を無にした結果であります。子供の權利を重んじなくては何しても根から社會を永久に救濟する事は出來ません。

ゆうきゆうとして居るのであります。山の上を見れば、山の上には人の落ちない様に防禦をして居らぬから、人はどし〳〵落ちて傷を負ふのであります。實に馬鹿げた事ではありませんか。今日社會を改良せんとして居る者は此の馬鹿氣たる事をして居るのであります。子供に目を就け、其の子供の權利を重んじて適切な敎育を施さなくては此の社會が根から改良せらるゝ事は出來るものではありません。廿年も卅年も酒の奴隷たる者が毎日々々養つた習慣を破る事は容易に出來るものではありません。又十五年も廿年も盜賊の癖をつけた者を恢復さする事は殆ど不可能であります。習慣には一定の法則があるのであります。其の法則は神の御與へになつたものであります。神が御造りになつた法則を無暗に破ると云ふ事はなさらないのであります。子供の時から毎日々々善い習慣を付けさへすれば、子供は成

ヨン（勇者）であつたのであります。子供の權利を認め給うた御方はイエス一人であつたと思ひます。もつともグリシヤの哲學者プラトーは非常に子供に重きを置いた一人でありました。然しプラトーが子供を大切にした理由は、子供は大人となつて國民になると云ふ利益から割り出して、斯く子供を大切にしたのであります。今日日本に於て子供の大切なる事を口を以て又筆を以て主張する人がありますが、畢りプラトーの如く利益上より子供の大切なる事を主張するのであつて、イエスの如く權利上より主張するのではありません。利益上から子供を大切にするのと、權利上から子供を貴ぶのとは月と鼈の違があります。其の理想の高低は誰にも解るのであります。我儕はイエスの足跡を踏み平和的に戰爭なくして子供の權利を主張し、又其の權利の實行せらるゝ樣に盡力しなくてはなりません。子供

であります。　權利史は實に血の歷史であります。　若し血を流し又腕力に訴へなくては權力を得る事が出來ないなれば、子供ははや己の權利を得る途はないのであります。　云ふ迄もなく子供は腕力もなく、又金力もなく、又權力を叫ぶ智力もないのであります。　思へば實に子供は哀れなる者であります。

ギルマン婦人の曰はるゝ樣に『家庭に於て子供は親の權力內にあつて親より如何なる虐待を受けても訴ふるには法廷なく、論をせんとしても智力なく、又證人を呼ぶ特權もないのであります。　親は自ら裁判官にして又行政官であります。』子供は自分の力で自分の權力を主張し又自ら實行する事は出來ないのであります。　貴き權利を有しながら其の權利を實行する事が出來ないとは何と哀れな事ではありませんか。　幸にもイエスは世の聖人君子又豪傑とはちがひ、子供のチヤンピ

事です。三つ四つ位の子供には、眞實と嘘との區別を明瞭にする事は出來ません其れ故に此の時代の子供の嘘に對して、嘘と云ふ定義を下す事は出來ない場合があるのであります。然し七八才になれば嘘は眞實でないと云ふ事が能く解かつて來るのであります。親たる者は、子供が如何なる理由で嘘を云ふ者であるか、其の嘘の性質を調べて見なくてはいけません。

第一に子供と云ふ者は、想像力が非常に強い者でありますから、色々の事を想像致します。それが爲め子供の心に嘘が出て來るのであります。其の嘘には大人の云ふ嘘の樣に決して毒氣はありません。能く氣を付けて見ると、無邪氣で、或時には、詩の樣な嘘があるのであります。第二に子供と云ふ者は、人からお前は偉いと讃められるゝと、非常に悦ぶ者であります。そこで人からお前は偉い子供だと讃められたい爲

の權力に就きて盡す程名譽な働は他にないのであります。米國の大説教者ヒイリップスブルークス氏は『子供を助けるのは人類を助けるのである。人類を助けんと思ふなれば子供の時に助ける程大なる助けはない』と言はれました。

第十一章　子供の嘘言

嘘を云ふ子供をこらしめ、又嘘を云はぬ様に矯正する事が、親の務である事は云ふ迄もない事であります。子供の時から嘘を云ふ癖を付け、子供に自由に嘘を云はして置けば、其の子供は大人となつて、嘘にて作り上げた人間となるのであります。然し大人の嘘と子供の嘘とは違ふ所をよく心得て居つて、子供の嘘に對し大人のそれと同じ刑罰を與へる様な事をしてはいけません。嘘と云ふ事は眞實でないと云ふ

るのであります。親のする事は何でも眞似をするのであります。子供が嘘を云ふのも、其の嘘の多分は親に眞似てやつて居るのであります。お母さんがお父さんに嘘を云ふのを能く知つて居ります。また客人が訪ねて來た時に、お父さんは家に居るのであるのに、子供に取次をさせて、家に居りませんなどと云はする事があります。其の他ある親等は毎日々々自分が嘘八百を云うて居るのであります。子供は親に習うて嘘を云ふのであります。故に親が子供の嘘に對して罰を加へんとすれば、親自身が大いに鑑る處がなくてはなりません。

以上述べました四つの理由はほんの概であります。若しもつと詳しく學理的に子供の嘘を解剖して見れば、其の他未だ色々の理由があるかも知れません。何しろ子供の嘘と大人の嘘とは大いに違ふ點があると云ふ事は明白なる事實であります。

に、自分はした事もないに、「道で犬が子供に喰い付がんとした時に、助けてやつた。」とか、又「子供が水に落ちたのを救うてやつた。」とか云うて、人から讃められるゝ爲に、嘘を云ふのであります。大人の嘘の様に人をペテンにかける様なことゝはまるで違ひます。

第三は子供は心に平常親と云ふ者はこはい者であると云ふ考を持つて居るのであります。また惡戲をして、親から叱らるゝ事があると、親から受くる罰を脫れんが爲、自分のした事でもしないと、嘘をつくのであります。此の嘘は決して他人を害する爲の嘘ではありません。言葉を換へて云へば、防禦上より嘘を付くのであります。

第四に子供は人の眞似をして、凡ての事を學んで行くものであります。カーライル先生の言はれた様に、子供は親の歷史を繰返して居るのであります。子供と云ふ者は親の擧動や親の言葉に非常に注意して居

利を害する事は出來ません。

第十二章　子供の恐懼

子供と云ふ者は生れつき恐がるのであります。恐がるのは子供の性質の様であります。

六才以下の子供は大概は自分の想像から恐がるのであります。然し年を取るにつれて、實物を見て恐れるのであります。子供は眞暗な所に携れて行くと恐がります。又何か異様な物でも、又何か音でも聞くと顔を青くして恐がります。之には必ず種々の理由があるのであります。第一に子供と云ふ者は非常に弱い者であります。自分獨りで何をする事も出來ません。何をするにも親や又他の助を要するのであります。故に弱い者が恐がるのは當然な事であります。大人でも弱

親等は子供の嘘に對して、亂りに嚴しい刑罰を加へ、子供の權利を害する事については、非常に心懸けなくてはなりません。無學なる親が、自分は毎日々々嘘を云つて居るのにも係らず、子供の嘘に對して、打つたり、又蹴つたりするのは、實にけしからぬ擧動であります。親は子供に對して何うしてそんな權利を有して居りますか。實に理由の解らぬ事であります。然し前にも述べた通り、假令子供の嘘には如何なる理由があるにせよ、其の嘘を等閑に附して、子供の云ふがまゝに嘘を云はして置けば、其の結果取返しのつかぬ者になるのでありますから、親は何所迄も親の權利と權威とを以て、子供に對して制裁を加へなくてはなりません。然し其の制裁を加へる前に、よく〳〵其の子供の云うた嘘を調べる事が必要であります。無暗と子供を叱つたり、打つたりする事は、子供の權利を害するのであります。親と雖も無暗と子供の權

子供と云ふ者は感情的にして、物事に恐れやすい者なれば、親や學校の先生は此の點に於て、非常に注意しなくてはなりません。夜子供に怪談をして聞かす事は、子供の感情を激昂せしめて子供に恐れる心を增さしむるのであります。實に危險の事ではありませんか。

今日日本の小學校で小さな子供等を集めて先生は怪談をして聞かす事があります。其の話を聞いた子供は家に歸つて來て、神經が非常に鋭くなつて、夜寢る事も出來ず、又寢て居ても恐い夢を見るのであります。子供を餘り恐がらすると云ふ事は確かに子供の權利を蹂躙したのであります。日本に於ける子供文學は非常に亂脈であります。子供の性質をよく知つて子供の話を書く文學者が何人ありますか。子供は感情的でありますから、誰でも悲しい話を聞きたがるのであります。從つて悲しい話を書けばよく賣れるのであります。然し其の話

蟲は物に怖れるのであります。第二に子供と云ふ者は未だ理性が充分に發達せず、何事も萬事無學であつて、物の原理をよく知る事は出來ません。大人の内にでも、無智無學の者は無暗に物に怖れます樣に、子供の恐れるのは全く其の理由であらうと思ひます。第三に子供と云ふ者は前に述べました通り、非常に想像力に富んで居ります。竹をも馬と思ひ、又腰掛も馬車と思ふのであります。二本の棒を見ても、直ぐと人の足を想像するのであります。故に想像の強い爲怖れなくてもよい事に恐がるのであります。第四は子供と云ふ者は非常に神經が鋭いのであります。言葉を換へて云へば、感情的であります。或學者は『子供の時代は情が七分を占めて居る』と云うて居ります。感情の強い大人が非常に恐れ易い樣に、子供が直物に恐れるのも其の理由であります。

基督信者の親や又日曜學校の先生が、日曜學校に於て、未だ物事がよく解らない子供に、イエスの十字架につけられてお居でになる畫を見せたり、又十字架につけられて血を流し給うた話をするのは大變に惡い事であります。

子供に宗教を教へ樣として、却つて其の子供を害するのであります。四歳や五歳の子供にイエスの十字架の畫を見せる必要も無ければ、又十字架の話をする必要もありません。子供を恐がらす事は恰も子供を殺す樣なものであります。子供の時に神經を餘り刺戟していらいらさすると、大人になつて取かへしの出來ない結果を見るのであります。

子供は飽迄も子供として取扱はるゝ權利を有して居るのでありますから親と雖も其の權利を奪ふ事は出來ません。

が如何ばかり子供の神經を刺戟し、子供をいら〳〵さする樣にして、子供に害を及ぼすかと云ふ事を悟らないのであります。

米國で、一人の女中が臺所の大きなストーブで肉を燒いて居りますと、可愛い四ツ五ツの子供が其所へは入つて來ました。女中は其の子供を相手にして遊んで居りましたが、ストーブの肉を見ながら其の可愛ゆい子供に、『私の國では子供を此の通り暖かい所に入れて燒きますよ、』と惡戲を云うたのであります。其の子供は其の事を聞くと『きやつ』と泣き出し、其の夜から毎夜、『私を燒いてはいやだ〳〵』と云うて泣き通し、遂に四五日の內に死んでしまいました、女中は決して惡氣があつて云つたのではありませんが、此の女中は、子供と云ふ者は感情が強い者であると云ふ事を知らなかつた結果、此の樣な大事を引起したのであります。

は、屢、何故に私の子供はこう嘘を云ふ者になつたのですか、何うして私の子供は女狂をする様な惡青年になつたのでありますか、何うしても私は其の理由が解りませんと云うて、悲慘な聲を發する親がありますが、決して瓢箪から駒は出ません、子供が惡青年になつた理由があるのであります。昔スパルタと云ふ國では、子供が罪を犯した時は、其の罪は子供に歸せないで、其の罪を親に歸する法律があつたのであります。今日子供の惡くなる十中の八九迄は親の責任にあるのであります。今日の社會は子供を善くする場所ではありません。子供に惡い暗示を與へるのであります。子供程催眠術に掛り易い者はありません。親がねんねん〳〵と云ふと、横になりながら子供をたたけば寢る暗示を受けて、直ぐすや〳〵と寢てしまいます。子供が傷をしても、其の子供に痛からうと云へば、痛いと云ふ暗示を與へますから、痛くないのに

第十三章　子供の暗示

子供と云ふ者は恰も蠟の如きものであります。鑄型に入れると直に何な形にでもなるのであります。又子供と云ふ者は恰も寫眞を取る様な物であります。何でも直に寫す事が出來るのであります。子供は何うして言葉を使ふ様になるかと云ふ事を調べて見ますと、子供は親の唇の動くのを眞似て、言葉を使ふ様になるのであります。赤坊であるから何も解りはしないと思うて、赤坊の前で親が悪い顔を見せたり、又夫婦喧嘩をすれば、其の擧動は皆子供に寫つてしまふのであります。子供が見たり聞いたりした事が、必ず一生涯に一度は、實物になつて現はれて來ると云ふ事は、疑ふ事の出來ない事實と思はれます。實に恐ろしい事ではありませんか。悪くなつた子供に對して、親

や紳士を見るに、身が治らない人が多いのであります。學校は教育的でありますが、社會は非教育的であります。毎日々々此の社會に於て見る物聞く物が悪くあります。言葉を換へて云へば、今日の子供は毎日悪い事を爲る様に催眠術を掛けられて居るのであります。之で何してよい青年となる事が出來ますか。

或善い家庭で、三ッ位の可愛い娘が、後鉢巻をしてかつぼれを舞り始めました。親等は云ふに及ばず、家中の人は驚きました。そこで親は女中を集め、誰か此の娘を携れて、かつぼれを見に行つた者があるかと、嚴しく問ひましたが、誰一人此の娘を携れてかつぼれを見に行つた者は無かつたのであります。然し此の娘は生れながらにしてかつぼれを憶えて來たのではありません。吟味をして見ると、此の娘の赤坊の時子守が毎日毎日かつぼれを見に行つた事を發見したのであります。

ワア〳〵と泣きます。然し痛くあつても、『それ醫つた、最う痛くない、』と云ふ暗示を與ふれば、直ぐ痛くなくなります。子供によい暗示を與ふれば善くなり、又惡い暗示を與へれば、惡くなると云ふのは宇宙の法則であります。いくら學校の先生が、酒と云ふ物は惡い物であると敎へても、家に歸へつて親が酒に醉うて居る有樣を見、又學校の遠足會に行つて、校長が女敎師に酌をさして、酒を飮んでる處を見れば、敎ふる事は駄目であります。暗示によつて酒飮にしてしまふのであります。今日の日本は、大學校や中學校や小學校を國中に建てゝ、非常に敎育に重きを置いて居ります。學校では修身學も敎へますし、又勅語も讀み聞かせて忠君愛國の精神を養うて居りますが、學校で敎へらるゝ事と社會で見る事とは大いに違ひます。學校で立派な先生も、家に歸れば地金を現はして、不道德な事をします。馬車自働車に乘つて居る大臣

第四編

二十世紀の日曜學校

田村直臣著

赤坊にかつぼれを寫したのであります。一ツ二ツの時はかつぼれを舞る事は出來ませんでしたが、三才位になつて自由に身體を動かす事が出來る樣になつて、かつぼれを舞つたのであります。實に恐しい事ではありませんか。

或國には催眠術を掛ける者に對して、一ツの法律があります。それは惡い事をさする樣に催眠術を掛けてはならぬと云ふ事です。然るに日本の惡い社會は、日本の子供に惡い事をする樣に、毎日催眠術をやつて居るのであります。此の社會は子供に對して、子供の權利を蹂躙して居るのであります。子供の惡くなるのが社會の罪であると云ふは、過言とは云へないのであります。暗示され易く造られた子供に惡い暗示を掛ける事は大罪であります。正義を重んずる者は子供の權利を保護する大責任があるのであります。

第四編　二十世紀の日曜學校

第壹章　日曜學校の使命

敎育とは何である乎

日曜學校の使命に就て述べ樣とするに、先『敎育とは何である乎』といふ問題から說き始めようと思ふ。

現今社會に口を開けば、輒ち敎育々々と叫んで、敎育の必要を唱へる者が少くない。然し其等の人々は、果して能く敎育といふことの眞義を解して居るのであらう乎。

コロンビヤ大學のバットラー博士は、曾て『敎育の意義』と題する演說に於て、次の如く演べて居る。曰く『人間は其の天性として五つのものを有つて居る。即ち學術的、文學的、審美的、社

ことの出來ない程、人生に取りて大切の者である。

宗教的教育を施すべき場所

然らば宗教的教育は、如何なる所に於て之を施すべき者である乎。日本の學校制度は、英國や米國の制度に倣つた者であるから、國民の租稅を以て建つて居る諸學校に於て、宗教的教育を施すことを禁じてある故に若し宗教的教育を施さうとするには、勢ひどうしても私立學校に於て之を施さなければならない。是に於て日曜學校なる者が、如何に宗教的教育を施すに、最も適當にして又最も大切なる場所であるかといふことが知れよう。苟も宗教的兒童教育を重んずる人々は、日曜學校の使命の大いなることを悟り、其の發達を圖り、其の盛大を期する樣になさなければならない。

二種の傳道法

交的及び宗教的の天性是である。而して教育とは此等五つの天性を圓滿に發達させることを云ふのである』と。如何にもその如く教育とは唯學問だけのことではない。文學だけのことでもない。又美術や社交だけのことでもない。實に諸君は宗教が如何に大いなる關係を教育にもつて居るかといふことを知らなければならない。若し宗教的要素を缺く様のことがあつては、ホントウに之を稱して教育といふことが出來ない。世の所謂教育家なる者は此の點に於て大いに其の眞義を誤つて居ると思ふ。近世の心理學者は、心理上から論斷して、宗教的教育を受けて居らない者のことをば、決して教育せられた者だと謂つて居らない。然るに我が日本の教育家たちが、此の如く必要なる宗教を、教育界より除いて了はうと務めて居るのは、如何にも馬鹿げたことではない乎。實に此の宗教的教育といふものは一日も忽にする

兒童の時に宗教的教育を施すことが、如何に必要であるかは、すべて此の通りである。

「リバイバル」(信仰復興)よりも教育

然るに今日の傳道法を見るに、之とは全く反對で、さながら兒童が成長して罪人になり、其の悔改めて救に入る時の來るのを待つて居る樣なものである。凡ての傳道者は、何でも人間は大人になつた上でなければ、天國に入ることが出來ない者だといふ樣な考を以て傳道し、信者も亦從つて熱心に「ペンテコステ」の日の再び來る樣にとばかり祈つて居て、毫も兒童の宗教的教育といふことには重きを置かず、從つて眞面目に日曜學校の爲に、全力を注いで働く者が少ない。是は實に大いなる間違である。四福音の中には、一度も「リバイバル」の有つたことが書いてない。唯使徒行傳に一度「ペンテコステ」の日に、三千人の人々が悔改

そも〳〵キリストの王國を建設するに、二つの方法がある。一は英語でいへばコンクエスト（Conquest）（征服）とでもいふべきものであつて、戰爭的態度を取り、眞向から敵に對ひ、之を征服する方法である。いま一はエヂュケーション（Education）（敎育）とでもいふべき者であつて、兒童の時から之を敎育して、神の臣民とする平和なる方法である。たとへていへば丁度樹木を植ゑ變へるのと、種子から育てあげるのとの差違の樣なものである。此の二つの方法は、何れも皆必要のものには相違ないが、其の中孰れが最も健全の者であるかといふに無論後の方法であらふ。キリストも使徒たちも、皆此の方法に由りて傳道し給うた。彼のルーテルが宗敎改革に從事するや、『兒童と學者は敎會の基礎である』と信じて、兒童の敎育に重きを置いた爲、能くその目的を果すことが出來た。又舊敎派の人々も殆ど之と同じ樣の考を以て、『七歲になるまで兒童を我に與へよ』と叫んで居る。

以上說いた所に由りて、諸君は日曜學校の大使命を既に了解したであらう。ブシヂル博士の云つた如く、『日曜學校は、世界に於て最も偉大なる働』である。否、唯一の働である。世界を救はうとするのに、日曜學校より外に、有効の途はない。思へば日曜學校の使命は實に偉大なる者である。

發問及び暗示

○日曜學校は國民教育に如何なる使命を帶びて居る乎。
○教育といふ眞正の意味は何である乎。
○新教育といひ舊教育といふが、其の判然した區別は何である乎。
○何故に我邦の教育家は宗教を教育界より取除けんとするのである乎。
○宗教的教育を施す場所は何處である乎。
○何故に官立學校で宗教を教へることが出來ない乎。

めて救はれたことか書いてある。若し「リバイバル」が唯一の傳道法であるものならば、使徒等の傳道は失敗であつたと謂はねばなるまい。南「メソヂスト」派の新監督アトキンスといふ人の著した『搖籃に於ける天國』といへる良書の中に『若し毎日「リバイバル」が、世界中に四十ケ處づつあつたとしたところが、其の方法の傳道だけでは、三十三年かゝらなければ、全世界の人々をキリストに導くことが出來ない。而して三十三年かゝつて、やつとのことで全世界の人々を救に入れた所が、三十三年後には、多くの兒童が既に成長して居るから、只大人にばかり傳道する方法では何時までたつても全世界を救ふことは出來ない』といふことが書いてある。如何にも兒童をキリストに導くことは、傳道の最もよい方法である。

結論

の先祖の遠い由緣を尋ねて見ると、決して近世に始つたことではない。實に遠いユダヤの古代に溯つて居る。當時ユダヤの國では、會堂の傍に小さい建物が別に建てゝあつて、其處で多くの兒童に神の道を敎へて居つた。これが今日の日曜學校の遠祖とでもいふべき者であるが、それはなか〳〵盛なものであつて實にユダヤ敎會の基礎をなして居た。然し惜しいことには、此等の兒童敎育は、歷史上いろ〳〵な變遷を經た爲に、其の後殆ど全く斷絕した樣の有樣であつた。勿論一縷の命脈は尙僅に存して居つたに相違ない。

日曜學校の誕生

さて其の僅に存して居つた一縷の命脈が、雨の惠と日の光とを得て、遂に再び芽を出す樣になつた。其の時は紀元一千七百八十年（今より百三十年前）の八月であつて、處は英國のグロチエスターといふ町である。此のグ

○心理上宗教は如何なる地位を有して居る乎。
○何故に聖書の中に「ペンテコステ」の日は一度しか記載してない乎。
○基督の傳道法は「リバイバル」式であつた乎。又は教育式であつた乎。
○何故に我邦の教役者や信者は、教育に重を置かないのである乎。
○ブシ子ルは何故に日曜學校を偉大なる働であると云つた乎。
○「教育に由れる救」といふ語を誤解せぬ樣に注意し其眞意を知るは大切である。
○教育の本位は兒童であることを知り、其の兒童を研究せよ。
○教會歷史を讀みて、兒童教育に重を置いた時代は何時である乎。
○天主教の人は何故に兒童教育に熱心である乎。

第貳章　日曜學校の進化

日曜學校の遠祖

日曜學校といふ者が、世の中に生れ出でたのは、近來の事ではあるが、其

に二回づゝ其處に兒童の敎育を施し、始めて之を日曜學校と稱したのである。これがそも〳〵今日の日曜學校といふ者の起源である。

最初の日曜學校

當時レエキスが初めた日曜學校は、如何なものであつたかといふに、其の起つた原因から容易に推して知られる通り、今日の普通敎育と、宗敎敎育とを混合した樣なものであつて、先づ「いろは」の如き者を敎へ、その傍に神の眞の道を說いて聞かせたものである。歷史家グリーンは、其の著した『英國史』の中に、『レエキスが始めた日曜學校は、英國に於ける普通敎育の初である』と云つて居る。

日曜學校の進化

宗敎界の雄鎭であるジョン、ウエスレーは、最も早くからレエキスの立てた日曜學校に着目して、其の利益と効用の甚だ大いなることを認め

ロチエスターといふ町は、非常に「ピン」留針製造業の盛な處であつて、其處には澤山の工場があり、又數萬の兒童が其等の工場に傭はれて居た。此等の兒童は日々工場に出て働くために、學校に通ふ暇とてはなく、何れも皆無智蒙昧であつて、自分の名さへも書くことの出來ない樣の始末であつた。されば彼等が唯一の休日である日曜日を如何いふ風に過すかといふことも、亦推して知るべきであらふ。彼等は街頭に群をなして歩き、其の爲す所は亂暴狼藉、到らざる所なく、唯徒に時間と金錢とを費すのみであつて、常に心ある人々の胸を痛めて居た。其の胸を痛めて居つた人々の中に、ロバート、レエキスといふ、博愛任俠なる一人の篤志家があつた。彼は其の兒童等の有樣を見て、深く心に思ふ所があつたと見え、直に自費でもつて一軒の家を借り受け、又一人に五十錢づゝの謝儀を拂つて、四人の女教師を傭ひ、安息日に禮拜式の前と後と

い言葉だと思ふ。

今日の狀態

斯く日曜學校は、ウエスレーに由りて一段の進化をなしたが、今日に及んでは更に尙は一層の進化をなして居る。即ち教育學の大原理に從ひ、兒童學と兒童心理學とを應用して、兒童に宗教的教育を施すことになつて居る。且つ外形上に於ても其の進歩は著しい者であつて、今や二百萬の教師と二千五百萬の生徒とを有する一大學校となつて居る」。以上は僅に其大要を述べたるのに過ぎない。されど諸君は此に由りて尙日曜學校の今日まで進化して來た梗概を知ることが出來たであらう。

發問及び暗示

○基督の時代には、今日の日曜學校の樣な者はなかつた乎。

○ユダヤ人は、兒童教育に關して、如何いふ制度を有つて居つた乎。

て居つた。然るに其の後自ら大いに熟考する所があつて、其の中から全く普通教育の分子を除き、之を純然たる宗教的教育を施す所となした。是は日曜學校に取りて、其の大いなる進化であつたと謂はねばならぬ。

レエキスはたゞ日曜學校を始めたまでのことであるが、ウエスレーは之を大成して、チヤンとした一個の學校になした者である。例へて言へば、レエキスは林檎の地に落つる現象を見た様の者であるが、ウエスレーは引力の法則でもつて、之を説明した様の者である。ウエスレーは自ら其の創立せる「メソヂスト」派の諸教會に命じて、日曜學校を設立し、兒童の宗教的教育を盛大ならしむる様にした。「メソヂスト」教會の今日の如く盛大になつた所以は、主として日曜學校の働に重きを置いたからである。故にレエゲー氏は『メソヂスト』派の起つたのは、兒童の「リバイバル」に基づいたのである』と言つて居るが、實に理の深

が出來よう。　歐米諸國に於て、何れも皆宗教的兒童教育に重きを置いて居る所以は、全く此の理に基づくのである。　今左にその景況の概略を述ぶることにしよう。

(一)　獨逸

獨逸の教育は中央政府が凡て之を管轄して居る。　何處の州であつても、其の教育の方針は、凡て中央政府の命令するまゝになつて居る。　但幸のことには、獨逸の南部諸州では舊教を信じ、北部諸州では新教を信じて居るから、宗教的兒童教育を施すのに都合好く、各自の信ずる所の教理を教へることが出來る。　獨逸の教育の大目的は、神を畏れ國を愛し、自主獨立することの出來る國民を作るのにある。　故に學校に於て、普通教育を授けると共に、亦宗教をも教へて居る。　普通の學校に於て、一週間に四時間乃至五時間は、宗教を教へる規則になつて居る。　小學

○何故に中古時代には、兒童教育が衰へた乎。
○今日の日曜學校は、誰が何時、何處で設立し始めた乎。
○ウエスレーは日曜學校に對して、何の名譽を有つて居る乎。
○日曜學校は、普通學校に、如何な感化を及ぼした乎。
○日曜學校は、宗教界に如何な活動力となつた乎。
○二十世紀の日曜學校は、如何に進化し且發達した乎。
○今日の日曜學校は、世界に於て幾人の教師と生徒を有つて居る乎。

第參章

歐米諸國に於ける宗教的兒童教育の景況を述べて我邦の兒童教育家に警告す

文明開化と云はるゝ國の中で、宗教的兒童教育を輕んずる國は、何處にもない。宗教は國の生命である。その生命である宗教を、兒童の時から其の國民に教へ込まないで、如何して其の國が健全に發達すること

(三) 英國

英國では宗教的兒童教育を、普通學校に於て施すばかりでなく、日曜學校に於ても亦盛に行つて居る。その日曜學校に入學して居る生徒の數は、普通學校に入學して居る生徒の數よりも遙に多いとのことである。この一事を以てしても、英國の人民が如何に宗教的兒童教育に熱中して居るかといふことが知れるであらう。世には英國の新教育案を見て、英國の人民は宗教的教育に反對して居る者の樣に、誤解して居る人々が少くないが、事實は決して然でない。唯非國教派の人々が自分たちの信じて居ない教理を普通學校に於て教ふることに反對して居るばかりであつて、宗教的兒童教育その者に反對して居るのではない。現に英國では目下宗教的兒童教育に就て種々なる方面に向つて盛に活動して居る。

校より中學校、中學校より大學校と、順次に卒業して行く中に、生徒は充分宗教的要素を具ふる樣になるのである。凡そ世界の中で獨逸ほど、其の國民に宗教的教育を、規則立つて教へる國はあるまいと思ふ。

(二)　佛國

佛國では舊教の信者が多數を占めて居るけれど、之と共に亦新教やユダヤ教の信者も隨分あるから、獨逸の樣にウマク官立や公立の學校で、宗教的兒童教育を施すことが出來ない。佛國の宗教學校は、政府から多額の補助金を受けて居るから、ウマク行きそうなものであるのに、事實は全く之に反して居る。普通の學校に於ては、勿論宗教的教育を施して居らない。されど一週間に一日、木曜日をば學校の休日と定め、他の學課を休んで、專ら宗教的教育を施すことになつて居る。近頃に至つては、佛國に於ても、宗教的兒童教育の問題がなか〳〵盛になつて來た。

かも知れない。然し宗教的精神と宗教的活動とに於ては、米國に及ぶ國は何處にもない。近頃に至りては、米國に於ても宗教的教育協會と云ふ者が出來て有名な教育家は、皆之に加入し、新教育學と新心理學との原理に從つて、盛に宗教的兒童教育を施すことに盡力して居る。

(五) 結論

以上述べた所に由りて之を見ると、方今世界の文明國は、何れも皆宗教的兒童教育を對岸の火災の樣に心得て居らぬことが知れよう。然るに我が日本に於ては、之と全く反對で、教育家たる者が、教育の中より宗教的要素を逐ひ出さうと務めて居るのは、如何なる理由によるのである乎。思ふに今の教育家たる人々は、曩に陛下の下し賜はりたる教育の勅語を以て、宗教に代用することの出來るものゝ樣に心得て居るのであらう。然し如何なる教育家であつても、若し新心理學を少しでも

(四)　米國

米國ほど宗派の多い國はない。又米國ほど民主々義の盛な國はない。此の二つの事實は、米國をして如何しても官立や公立の學校に於て、宗教を教へることの出來ない樣にして居る。米國の普通學校から宗教的教育の分子を取り除けてあるのは、全く之が爲であつて、決して宗教に冷淡なるが爲ではない。實に米國ほど基督教の盛な國は何處にもあるまいと思ふ。その米國に於て兒童や青年に宗教的教育を施す場所は主として日曜學校であつて、其の他別に何もない。故に米國の宗教家は、何れも皆日曜學校の教育に全力を注いで居る。されど米國の宗教的教育は、英國や獨逸の如くに規則立つて居らず、又科學的でもない。その日曜學校の教師たる者も、教育家よりは寧ろ篤志家が之を行つて居るから、宗教的知識に於ては、獨逸や英國の方が遙に勝れて居る

立の精神を養ひ、自治の氣象を熾ならしめて、之を實際に行はせる樣にしなければ、如何して教育家の本分を全うした者といふことが出來よう。我邦の教育家たる者は、もう少し宗教的教育の大切なることを知つて貰ひたい。妄りに宗教に反對して、兒童の日曜學校に來るのを妨げるばかりが、教育家たる者の本分ではあるまいと思ふ。

發問及び暗示

○歐米各國で、宗教的兒童教育に重きを置く理由は何である乎。
○獨逸の制度は、如何な者である乎。
○佛國の制度は、如何な者である乎。
○英國の制度は、如何な者である乎。
○我邦では、教育の勅語を、宗教の代用の樣に思ふて居るのではない乎。
○歐米各國の兒童教育の制度を鑑み、我邦では如何なる制度を取るべき乎。
○宗教と教育とは、如何なる方針に向つて進歩しつゝある乎。

研究したことがあるならば、必ず宗教と教育とが密接の關係を有つて居つて、之を全く分離して了ふといふことが、如何に心理學の大原則に背いて居るか位のことは、承知して居るべき筈である。そも〳〵教育家の職分たるものは何である乎。圓滿なる人格を作るにあるのではない乎。宗教的教育を施さないで、果して能く圓滿なる人格を作ることが出來ると思うて居るのである乎。たゞ智力ばかりを發達させたからとて、決して完全な人物の出來ないことは、論より證據、今日我邦の道德界が示して居る事實ではない乎。今日我邦の教育家たちは、さながら不具の國民を作るのを其の本職となして居る樣に見える。教場で講義をさへすれば、それで教育の本分を仕遂げた者の樣に思つて居るのは大いなる間違である。苟も教育家たる者は、教場以外に尚其の生徒を教育する職分を有つて居る。其の生徒に神を敬ひ國を愛し、獨

敎訓は、唯馬太傳第十八章の一節から十節までと、同第十九章の十三節から十五節までとに見ゆるばかりであつて、聖書全體に比べて見ると、濱邊とその眞砂の一粒の樣なものである。されば聖書を愛讀する人の中にも、この兒童に對するキリストの敎訓に、餘り注意しない者のあるのも、決して無理ではない。然し兒童に對する敎訓は唯此だけで充分であつて、其の外別に求むることは要らない。今此の二章の敎訓をよく解剖して見ると、それに九の要點がある。

（一）もし改まりて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ（馬太十八〇三）此の一節を讀めば、明らかに天國に入る者は、嬰兒でなくてはならぬといふことが解る。嬰兒は天國に入る者の模型である。獨り天國ばかりではない、何の王國に入るにしても、嬰兒の如く無邪氣であつて信任深く、且謙遜であつて無私でなくてはならぬ。嬰兒の中には非常に貴

第四章　兒童に對するキリストの教訓

萬國の歷史を開いて讀むと、何處の國の豪傑であつても皆兒童に對して至極冷淡であるばかりでなく、反つて兒童などのことに頓着するのは、豪傑らしくないと思つて居る樣に見える。わけて東洋流の豪傑と來ては、婦女と兒童のことをば毫もその眼中に置かない。彼等が何麼か輕蔑することのある時には、必ず其の材料として婦女や兒童を持ち出すのである。然るにキリストは之に反して兒童の友人であり、又兒童の「チャンピョン」(勇士)でおはし給うた。キリストが斯く兒童の友となり給うた所以は、兒童が後に至りて豪い者になることが出來るからといふ樣な理由ではなく、只兒童その者の本性を善く御存知であつたからである。基督教は兒童の宗教である。兒童に對するキリストの

兒童はキリストの大使（アンバセダー）である。我が稜威高き天皇陛下の大使をいやしむる者は何處にある乎。歐米諸國に遣されて居る我が全權大使の尊ばれる所以は其の稜威高き我が天皇陛下の使者であるからである。若し兒童が『諸王の王、諸主の主』なるキリストの大使であるならキリストを尊ぶ如く、亦兒童をも尊ばねばならぬ。キリストの大使なる兒童の前には、われ人ともにウレボニヤスの樣に、禮節を盡さなくてはならぬ。

（四）此の小子の一人をも愼みて輕視る勿れ　馬太十八〇十

輕視るといふことは勿論その價値を輕く視ることである。例へば路上に一文錢が落ちて居つても、餘りそれに目を注ける者のないのは、之に重きを置いて居ないからである。然し若し金剛石が落ちて居つた

い一種の人格が具つて居る。キリストが兒童を愛し之を祝福し給うた所以は此の人格の具つて居るからである。

（二）嬰兒の如く自ら謙る者は、天國に於て最も大いなる者なり（馬太十八ノ四）

嬰兒は唯天國に入る資格を有つて居るばかりでなく、亦其の天國に入つた上で、最も大いなる者とされて居る。如何な人であつても、嬰兒の樣な人格を具へて居らなくては、決して天國に於て大いなる者となることが出來ない。故に豪傑になるには、兒童の性質を脫しなくてはならないと考へるのは、大いなる間違である。『大人は赤子の心を失はざる者である』と孟子の言つた樣に、豪傑の豪傑たる所は、其の兒童の心を有つて居るからである。キリストが兒童を愛し給うた所以は、確に御自分にこの兒童の心が具つて居つたからである。

（三）我が名の爲に、此の如き一人の嬰兒を接くる者は、我を接くるなり

にても、此の一節の外に、キリストが『貴様死ね』とまで仰せられた所はない。キリストの口から斯ういふ激い強い御言葉が漏れて出て來たのは、確に兒童敎育が最も大切なことであつて、何をさて置いてもなさねばならぬことを敎へ給うたのである。

（六）嬰兒を容せ（馬太十九〇十四）

昔キリストの使徒等が、今の世の人々の樣に、兒童を五月蠅がつたことは事實である。當時母親たちは其の子を思ふ親心にひかされ、キリストの祝福を受けんとして、其の兒童をつれて來た時、使徒等は『エヽ五月蠅い』といはぬばかりに之を睨み付けた。その時キリストは使徒等を戒め、嬰兒の我に來ることを容せよとて、温顏微笑を含み、一人々々嬰兒を抱き上げて、之を祝福なし給うた。世に此の如く美しい畫がまたと有らふ乎。恐らく如何な畫工であつても、こんな美しい畫は、之を描く

らば如何であらう。　誰でも必ず大騒をするに違ひない。　こは其の金剛石の價値を重く視るからである。　されば世の人々が兒童を輕視るのは、彼等が眞に兒童の價値を知らないからである。　近世の敎育學は、次第に兒童本位になつて來た。　今日ではキリストの敎訓に從つて、兒童より大切な者はないと思ふ樣になつて來た。　キリストの敎會も亦今まで兒童を輕視つて居つたことを悔ゆる樣になつて來た。　是は實に喜ぶべき現象であると思ふ。

（五）此の小子の一人を躓かす者は、磨石を其の頸にかけられて、海の深みに沈められん方、尙益なるべし　馬太十八〇六

豈と恐ろしい言葉ではない乎。　キリストの御言葉としては、隨分ヒドイ者の樣に見える。　兒童の敎育をおろそかにする者は、磨石を頸にかけられて、海の中に投げ入れられる方がよいのである。　聖書の中何處

天國に居る者は如何な者であるかと、之を知らうと欲はゞ、先兒童を見るのが一番捷徑である。兒童は天國に入る者の資格と天國にて最も大いなる者の模型とを示して居る。天國に居る者は皆兒童の如き者であるから、天國は即ち兒童であつて、兒童は即ち天國であると言つても差支がない。而して又敎會は天國の模型であるから、其の最も天國らしい敎會は兒童の多い敎會であるといはねばならぬ。

（九）彼等が天の使者は、天に在りて、天に在す我が父の顏を常に觀ればなり 馬太十八〇十

凡て兒童には天の使者が一人づゝ必ず隨伴て居る。其の天使は誰である乎。こは言ふまでもなく其の母親である。母親は兒童の天使として、天から遣はされた者であつて、之を養育し又敎育して行く母親の責任は、實に大いなる者である。日本の母親たちは、果して能く此の天使

ことが出來ないであらう。多分その時キリストの御顏には、得も言はれぬ美しい嬰兒の笑顏があらはれて居つたに違ひない。

（七）我に來ることを禁むる勿れ（馬太十九〇十四）

『容せ』と『禁むる勿れ』とは、同じ樣な言葉であるが、其の實同一のものではない。『禁むる勿れ』といふ言葉の中には、一種の權威が顯れて居る。これは命令の言葉である。即ちキリストが其の敎會に對する命令である。日本の敎會では只大人ばかりに目を注け、兒童の敎育を怠り勝ちで、日曜學校や共勵會の働などをば殆ど度外視して居る。斯ういふ敎會の牧師や傳道師や會員に對して、キリストは此の御言葉の命令を出し給うたのである。『汝等兒童敎育の爲に其の全力を盡せよ』とはキリストの敎訓であり、又命令であることを忘れてはならぬ。

（八）天國に居る者は此の如き者なり（馬太十九〇十四）

○基督の兒童に對する敎訓と、近世の兒童學とは、相反する所がある乎。

○兒童に對する基督の敎訓九ケ條をよく研究せよ。

○大人に於ける如く、兒童には權利なきや。

○兒童とは如何なる者ぞ。

○基督は大人に向つて兒童になれと言ひ給ひしが、兒童に向つて大人になれと言ひ給ひしことある乎。

第五章　日曜學校と家庭との連絡

宗敎的兒童敎育の大機關は、日曜學校よりも、何よりも、家庭に最も力がある。若し家庭の助がないならば、日曜學校の敎育は、殆ど無效になつて了ふ。日曜學校の兒童に施す敎育は、一週間に僅か一時間より多くないが、家庭に於て兒童を敎育するのは、時間に限りがない。故に兒童敎育の大部分は家庭に於てするのである。聞く所に由れば、每年四百

たる務を全うして居るか否か。是れ實に一大疑問である。若し母親にして其の兒童の敎育を怠る樣のことがあるならば、それは確に罪である。兒童の罪の大部分は皆兩親の責任である。兩親の兒童に及ぼす感化力は、實に大いなる者であることを忘れてはならぬ。

以上列擧した九ヶ條の事項は、其の分量に於ては少いが、實質に於ては充分である。兒童に對して、この外キリストより敎訓を受くる必要はない。此の九ヶ條の敎訓を幾度も繰返して讀み味ふならば、兒童の光が段々顯はれて來て、兒童を愛する心が段々深くなり、牧師も傳道師も亦は兩親たちも、皆共に齊しく大いに悟る所があるに違ひないと思ふ。

發問及び暗示

○兒童に對して基督と他の聖人及哲學者との區別は如何。

○基督は何故に兒童を愛し、又之を貴び給ひし乎。

すことではなく、行爲でもつて感化することである。家庭の最大目的は人格を造るのにある。故に基督信徒の家庭はキリストの如き人格を造る所であると謂はねばならぬ。アトキンスといふ人は、『兒童を家庭に置く理由は、之を天の方に發達させる爲である』といふて居る。現今日本の親たちの大いに間違つて居ることは兒童を敎育する所は只學校のみであつて、家庭は之に何の關係をも有つて居らない者の樣に心得て居ることである。故に兒童を學校にやることには、隨分骨を折つて居るが、家庭に於て敎育を施すといふことには、毫も力を盡して居らない。今日普通敎育に從事して居る人々が、最も苦心して居る點は、如何かして學校と家庭との連絡をつけたいといふことである。世の親たちが家庭の敎育に力を盡さない所以は、敎育といふことは、只學ぶことをいふのだと思ひ、鍛ひ上げて人物を造ることをいふのだと思は

萬の赤坊が此の世に生れて來ることであるが、その赤坊は色も違ふし、又大さも違ふけれど、母の保護を受けなくては、獨りで生存することが出來ないといふことだけは皆同じである。曾てヘヤーといふ人が、『アダムには樂園（パラダイス）が家庭（ホーム）であつたが、我々には家庭が樂園である』といつたことがある。彼の米國（アメリカ）の兒童が常に好んで『家庭（ホーム）にまさる所はない』と歌ふて居る樣に、兒童に取つて家庭より大切な所はない。又悅ばしい所もない。人間の赤坊が獸の兒の樣に早く成長しないのは、神が赤坊を親の側に長く置きたいからの御思召である。犬や猫の子の樣に直と大きくなる者ならば、別段親の心配もなく又手數のかゝることも少いけれど、その實親が兒童を育てゝ行くには、十年も十五年も、長い年月の間夜晝目を離さず、心を盡して養育しなければならない。而して斯く兒童を敎育するのに最も必要なることは、言語でもつて敎へ諭

送る様にしたなら、何處の教會でも確に善い日曜學校が出來るに違ひない。　又信徒の兒童でなくても、日曜學校の價値が解れば、その親たちは必ず之を日曜學校に送るに違ひない。　宗教的兒童教育には、日曜學校の教師と親たちと、一所になつて教育しなければ、充分の結果を見ることが出來ない。

日曜學校と家庭との連絡に就き、心得べき條件は、

(一)宗教的教育は普通教育と同じく、完全なる人物を造るのに缺く可からざる者であるから、兒童を必ず日曜學校に出席させる事。

(二)日曜學校の學課は、必ず一週間の中に用意させる事。

(三)日曜學校にて學んだ事は、家庭に於て之を實行させる事。

(四)病氣又は事故ありて缺席する時は、缺席届を出す事。

(五)献金は必ず兒童に持たしてやる事。

ないからである。たゞ學校で讀み書きを習ひさへすれば、それで立派の人物が出來る者だと心得て居るからである。兒童が學校で習つて來たことは親たちが之を家庭でやらして見なければ可けない。例へば日曜學校で、神に祈ることを習つて來たならば、家庭に於て祈らせもし、又親たちも自ら祈りをする樣でなくては、折角日曜學校で敎へたことは、何の益にも立たない。日曜學校を、兒童の遊び場所の樣に心得、家に置くと五月蠅いから、之を日曜學校に遣るといふ樣のことであつては誠に困る。基督信徒の親たちであつても、まだ宗敎的兒童敎育といふことは、如何なものであるか、よく解つて居らないから、其の兒輩を普通の學校に遣ることには、隨分嚴くして居るが、日曜學校に遣ることには、それ程大切に思つて居らない。我邦では基督信徒の兒童がまだ少いけれど、若し其の親たちが本氣になつて、其の兒童を必ず日曜學校に

○フナスター嬢は兒童を教育するに、四人の教師が要ると言つて居る。(一)母(二)日曜學校の教師(三)牧師(四)普通學校の教師。此中何れが一番大切であるか。

第六章　日曜學校に對する牧師の義務

日本の牧師や傳道師は、比較的に日曜學校に熱心でない。其の理由は種々あるに相違ない。(一)牧師は說敎するのが本職であると誤解して居ること。(二)兒童をば其方除にし、只大人にのみ着眼して、早く獨立の敎會を造りたいと熱中して居ること。(三)日曜學校の事に關しては殆ど全く無學なること、即ち神學校にて神學や說敎學などをば學んだけれど、兒童學をば學ばなかつた事。(四)日本の牧師や傳道師には、仙人的の君子が多いから、日曜學校の樣に事務の才幹を要するものには、適當して居らないこと。以上の理由の外にも尙ほ澤山あるかも知れぬが、

（六）學校の時間をよく守る樣にさせる事。

などである。親たちが善く以上の事を心得て居て、之を實際に行りさへすれば、宗教的兒童教育に貢獻する所は、どの位だか分らぬ。斯く日曜學校と家庭の連絡がついてこそ、始めて完全な宗教的教育を施すことが出來るのである。

發問及び暗示

○兒童が家庭に成長しなくてはならぬ理由は何である乎。

○人間の子が獸の子よりも成長の遲き理由は如何。

○家庭の目的と日曜學校の目的が如何なる點に於て一致して居る乎。

○兒童教育に取りて學校と家庭と何れが大切な場所である乎。

○兒童を日曜學校に送るに就て親の心得て居るべき個條を擧げよ。

○何故に信者の親達であつても其子を普通學校にやることには嚴しくして日曜學校にやることには寬である乎。

らぬ。牧師の教會に於ける位置と責任とは、米國の事にして言へば、大統領に當り、日本の事にして言へば、總理大臣に當るのである。勿論牧師自ら必ずしも日曜學校を教へ、又は管理しなくてもよい。只責任を以て、日曜學校の大運轉を司らねばならぬ。凡て牧師たる者は、自分一人で、十人前の働をするよりは、十人の力を用ひて、各其の働をさせる樣にした方がよい。日曜學校とか、共勵會とか、其の他種々の傳道事業に、教會の會員を用ひて、之を手足の樣に働すことの出來る牧師は、最も價値ある牧師である。今日の牧師は、餘り自分一人で働き過ぎて會員を使ふ術を知らない樣に見える。其の傳道に十分の成功のないのは、其の原因或は此に在るかも知れぬ。されば牧師たる者は、其の教會の日曜學校に自ら非常の熱心を以て力を盡す樣にしなくてはならぬ。今左に牧師の日曜學校に對する心得を列擧しよう。

此等は先其の主要なる者であらう。斯く牧師や傳道師が、日曜學校に出席もせず、又何をもしないものだから、自然教會の信徒は、日曜學校といふものは、自分たち信徒のなすべき事業であるといふ様に思つて居る。是は無論大いなる誤謬である。日曜學校に重きを置かない牧師は、自ら己の務むべき職務の何たるやを知らない者である。一體牧師とは何である乎。牧者といへることではない乎。其の小羊を顧ない様の牧者は、決して之を本當の牧者といふことが出來ない。大人のみが教會の羊ではない。其の兒童は無論小羊である。或る點から言へば、牧者の最も念を入れて務めなければならない仕事は、其の可憐なる小羊を養ひ育つることである。キリストは三度までも、『我が小羊を牧へ』と、ペテロに仰せられたではない乎。説教をすることばかりが、牧師の務ではない。教會全體の進運に關する、傳道の事業を支配せねばな

の覺悟を忘れてはならぬ事。

(六)生徒の中に病人のある時には之を見舞つてやること。

(七)途上にて生徒に逢つた時には、笑顏を以て之に接し、ねんごろに其の生徒や兩親の安否などを問ふべきこと。

(八)生徒の中に洗禮を受けた者がある時には、其の組の敎師をして其の生徒の信仰の發達を圖つてやる樣にさせる事。

(九)長い間生徒であつて、まだ洗禮を受けない者のある時には、其の敎師に注意を與へ、洗禮を受ける樣に勸め告る事。而して十二三才から二十才までの間は、洗禮を受けるのに最も好い時期であることを忘れてはならぬこと。

(一〇)校長や敎師たちとは、常に親密に交際して、少くとも一年に二回位は、其等の人々を招いで、相共に互に樂むべき事。

（一）常に日曜學校の教師を訓導することに力を盡し、且教會員の中に、日曜學校の教師となるべき人物を、成るたけ多く用意して置くこと。

（二）假令自ら教授したり、又は管理などしなくても、日曜學校の始まる時か、又は終る時には、必ず出席して祈禱を献げ、又は簡短い勸話をなし、生徒の顔をよく覺える様にすること。

（三）若し教會が盛大になつて、他に傳道師や副牧師を置く様になつた塲合には、專心日曜學校に從事する傳道師を置く様にする事。

（四）牧師は獨り教會のみでなく、亦其の日曜學校の牧師であるから、生徒の名を知つて居らねばならぬ事。且其の姓名簿をもつて居る様にすべきこと。

（五）若し其の教會の日曜學校がウマク行かない時には、獨り其の校長や教師たちが責任を負ふばかりでなく、牧師も亦共に其の責任を負ふ

ならぬこと。

（一九）校長と一體になりて働くべき事。

この外にも尚ほあるかも知れぬ。されど此だけの事をよく心得て、それを實行したならば必ず盛大な日曜學校が出來るに違ひない。若し今日の牧師が兒童に着目して、專心日曜學校の爲に働くならば、百年後には必ず日本を基督教國にして了ふことが出來るであらう。兒童を救はないで、如何して世界を救ふことが出來よふ。『聖國を臨らせ給へ』と毎日祈る所の牧師は、兒童をキリストに導かなくては、決して聖國の臨らないといふことを、記憶て居つて貰ひたい。

發問及び暗示

○何故に今日の牧師や傳道師は割合に宗教的兒童教育に熱心でない乎。

○牧師とは如何な役目をするものである乎。

（一一）日曜學校の經費は、充分に教會から出させる樣に盡力すべきこと。

（一二）明日の教會員たる者は、今日の生徒であることを忘れてはならぬ事。

（一三）兒童に對するキリストの教訓をば、よく之を服膺して一日片時も忘れてはならぬこと。

（一四）禮拜の時には、必ず日曜學校の爲に祈るべき事。

（一五）祈禱會の主意の中にも、日曜學校の事を入れて置く樣にすること。

（一六）日曜學校の役員會のある時には、必ず自ら出席すべき事。

（一七）兒童に對する親の務に就きて、時々之を說敎すべきこと。

（一八）死せる日曜學校は、死せる牧師を代表して居ることを忘れては

○基督の人格を具へさへすれば、如何な牧師でも必ず兒童を愛する樣になる。

第七章　日曜學校と共勵會との關係を論じて、兒童教育の大原理に及ぶ

日曜學校といふものは、基督敎が我邦に入つた時から、既に設立されて居るから、苟も基督信徒である者は、皆之を知つて居るであらう。然し共勵會といふものは、僅に二十五年前に始めて世界に生れ來た者であるから、之を知つて居る者は、極めて少いことゝ思ふ。現に自ら共勵會を設けて居る敎會の信徒でさへ、其多くは共勵會の大原理を知つて居らない樣に見える。此れは丁度外國から、共勵會といふ着物を、何の氣もなく持つて來て、只着た樣なものであつて、其の中には一脈の生命も通つて居ない。之を活用しようとするには、外國で行つて居る共勵會

○一人で働く牧師と、十人を働す牧師と、孰れが成功する乎。

○基督が三度までペテロに「小羊を牧へ」と宣ふたのは如何な意味である乎。

○米國に於ける教役者の教育の方針は如何なる有樣に變つて來た乎。

○明日の教會の基礎となる者は何ものである乎。

○何故に牧師は信者の姓名簿を有つて居りながら日曜學校生徒の姓名簿を持つて居らない乎。

○死せる日曜學校の牧師は尙自ら生きて居るであらふ乎。

○牧師は日曜學校の教員や役員と如何して關係を厚くする乎。

○牧師は何故に兒童に說教をしないの乎。

○牧師が兒童を懷け樣とするに、如何な方法が一番よい乎。

○善く日曜學校の爲に祈る牧師は必ず善い日曜學校を有つて居る。

○牧師が日曜學校の校長になつては惡いの乎。

○兒童を好かない牧師は生れ變つて來るがよい。

通一般に同じ様の意味に用ひられて居るが、其の實此の二つの言葉の間には、劃然たる差別があつて、「チーチング」の方は外部から智識を與へることをいひ、「ツレエニング」の方は内部に在る、能力を發達させることをいふのである。日本語では後者を『鍛へ上げる』とか、『訓練する』とかいつて譯して居るが、實に適當の言葉だと思ふ。凡そ教育には此の二つの者を要するのであるが、分けて之を言へば、日曜學校の方は、前者即ち教へる所であつて、共勵會の方は、後者即ち鍛へ上げる所である。ツランボールといふ人は、『日曜學校は手でもつて眞理を捉へる所であつて、共勵會は足でもつて其得たものを行つて見る所である』と云つて居るが、如何にも其の通り、只手ばかりの教育をしたのでは、丁度居職の職人の様に足の方が全く無益になつて了ふ。故に坐つて手ばかり働かせて居るだけでは、何も益に立たない。歩くことも走ることも出來なく

の原理を採つて來て、之を日本に應用し、それに適當なる着物を着せるのである。勿論其の着物とても、外國のものを其の儘採つて來たのでは無効である。日本人には日本の着物が要る。日本の共勵會は、何處までも日本的のものでなければならない。さりとて亦共勵會の原理は、萬國同一のものであるといふことを忘れてはならない。詮る所共勵會は、新心理學の進歩と、新教育學の發展とに由りて、自然に起つて來た結果に過ぎない。而して日曜學校と共勵會とは、もと〳〵一體二相の者であつて、兒童と青年との宗教的教育に必要欠く可からざる機關である。今日まで兒童の教育は、只教ふるといふことばかりに重きを置いて、教へさへすれば、兒童教育の能事畢つた者の様に誤解して居つたのである。現今の牧師や傳道師なども、亦等しく此點に於て間違つて居る。英語の「チーチング」(教授)と「ツレエニング」(訓練)といふ言葉は、普

も亦共勵會の必要なることは解ると思ふ。日曜學校で聖書を敎へる。されど只其だけでは聖書の敎ふる善い思想は、兒童の所有とはならぬ。之を實行させた上で、始めて彼等の所有となるのである。而して其の之を實行させる所が、即ち共勵會に外ならない。是れ予が前に日曜學校と共勵會とは一體二相の者だといつた所以である。

兒童敎育に從事する者の、注意しなければならぬことは、兒童といふも のは本來活動的の者であるといふことである。兒童は寸刻ともジッとして居らぬ。大人には怠惰者があるけれど、兒童には一人もない。其の怠惰者のないといふことは、活動が兒童の生命であることを證して居る。食物を與へたからとて、只其だけでは、兒童は成長する者でない。食物を與へると同時に、活動をさせなくてはならぬ。日曜學校で敎へるのは、丁度食物を與へる樣なものであつて、只それだけでは生命

なる。足も手と一所に働かせる樣にしなくてはいけぬ。『何でも物は使へば使ふ程發達し、使はなければ使はない程退歩する』といふのが、ダルウヰンの發見せる進化論の大原理である。人間の頭腦には活動の中樞と記臆の中樞とがあつて、神經は其の中樞に繋つて居る。若し兒童に記臆ばかりさせて置くならば、其の記臆の中樞は發達するであらふが、その代り活動の中樞は發達せず、終に全く不具者になつて了ふであらふ。實に恐ろしいことではない乎。故に兒童を教育するのに手や足を一樣に働かせる樣にすることが必要である。此の理由により日曜學校が兒童や青年の宗教的教育に必要なる如く、共勵會も亦必要欠く可からざる者であるといふことが、容易に解るであらふ。且近世の心理學の主張する所に由れば、『如何なる理想も之を行つて見なければ、決して其人の所有にならない』とのことであるが、此の點より觀て

順序である。　然し兒童は然うではない。　理解してから活動するのでなく、反て活動して後に感じ、其の結果として物を理解する樣になるのである。　兒童の心理の順序は、活動感情理解といふ樣に、大人とは全く反對である。　故に兒童を敎育するには、敎へるといふよりも、寧ろ行らして見る方がよい。　今日まで日本に行はれて居る年期小僧の制度が、最も善く兒童心理學の原理に適つて居る。　例へば大工の小僧であるならば、其の親方は理屈や何も說かないで、只大工の仕事をさせる計りである。　而して五年か十年經つ中には、チヤンと立派な大工になつて、其の活動の結果として自然に建築の大原理を悟る樣になるのである。　基督敎青年會の制度は、此の年期小僧の制度と同じである。　先づキリストの爲敎會の爲に働かせて、自然と基督敎の眞理を悟らせる樣にする所である。　日曜學校で敎へた大眞理を實際に悟らせるのに、基督敎青年會ほど大

がない。之と同時にそれを働かせる所が必要である。而して共勵會は之を活動せる所である。たとへば日曜學校に他の生徒を導いて來る、病人の兒童を見舞に行く。自分の大切な金を、貧乏な子にやつて助ける。親たちを教會に導いて來る。稚心でもつて熱心に神に祈る、讃美歌を歌つて元氣をつける。感話をして膽力を練る、凡て此等の事を兒童に行らせれば、何でも喜んで行る。兒童ほど働きの好な者はない。斯く兒童や青年を、キリストの爲、又教會の爲に働かせ、其の宗教的生命を維持し、又發達させるのが、共勵會の大使命である。今日まで兒童に就て非常な誤解をなし、活動といふものは、物事を理解し、且感じが起つた上でないと起る者でないといふ樣に考へて居つた。如何にも大人であるならば物の道理を理解して感情が起り、其の結果として活動する樣になるのである。理解、感情、活動といふのが、大人の心理の

から直に働け』といつたからとて、働いた習慣のない者に、なか〳〵ソウはき〳〵した働きの出來る者ではない。獨り教會のことばかりではない、何であつても皆然うである。例へば小學校の教師をつかまへて來て、直ぐ今日から家を造れといつたからとて決して造れる者ではない。生徒を教授するのに數年の經驗を要する如く、家を造るにも亦同じ經驗を要するのである。故に學校の教師をして直大工にしようとするのは、無理の注文である。然るに今日の教會は信者に對して、之と同じ樣なる無理の注文をするから、皆逃げて行つて了ふのである。信徒になりさへすれば、直と教會の爲、又キリストの爲に、働くことが出來ると思つて居るのは、大いなる間違である。元來教會の働は大いなる事業である。中々〳〵大工が家を建てるどころの騷ぎでない。それであるのに、經驗もない、伎倆もない者に之をさせるのは、餘り無法の事では

いなる力あろ者はない。故に日曜學校に教師の要る如く、共勵會にも亦教師が要る。日曜學校に教師がなければ、其の生徒が發達しない樣に、共勵會にも亦之を導く者がなければ、其の會員が發達しない。日曜學校の發達しないのは教師の罪であつて共勵會の發達しないのは牧師の罪である。日曜學校と共勵會のない教會は、いくら今日完全な教會であつても、將來に於て盛な教會になることは出來ない、返す返すも兒童は明日の教會員であることを忘れてはならぬ。日曜學校と共勵會とは、鳥の兩翼の如く、又車の兩輪の如く、教會に於ける教育上の二大機關である。將來に於ける教會の運命は、全く此の教育上の二大機關と連絡して居る。大人を捉へて來て、直ぐ教會の爲に働かすのは、無理な注文であつて、道理上決して出來る者ではない。五十や六十になる老爺さんや、老婆さんに向つて、ヨサアお前さんは信者になつたから、今日

すれば、如何な無理なことでも、神は屹度なして下さるといふ様な迷信を有つて居る。神の力がなければ何事も出來ないといふことは、聖書を信ずる者であるなら、誰でもよく知つて居ることである。然し神は無法な仕方を以て、教會を盛大になし給はない。必ず正しい方法に由りて、萬事を統べさせ給ふに相違ない。而して日曜學校と共勵會とは、兒童によき習慣をつけ、十年も十五年もかゝつて之を鍛へ上げ、立派な健全な信徒にするのが目的であつて、何處までも教育であり、又兒童を發達させるのである。其の兒童を發達させるのに、神の御助の要ることは、固より言ふまでもない。既に我が日本に於て、共勵會の數は殆ど二百近くある。然し共勵會の設けてない教會が、まだ〳〵澤山ある。實は一個の教會に是非とも三か四つ位の共勵會が必要である。年齢と男女とに由りて、之を別々に設けねばならぬ。聞く所に由れば、我邦

あるまい乎。キリストは其の使徒等を敎育し、練磨するのに、殆ど全くその生涯を費し給ふたではない乎。アリストートルは『琴を學ぶには、實際琴を彈いて見るより他に善い道はない。此の如く善人となるのにも亦實際善を行うて見るより他に道はない』と言つて居る。又心理學者のゼームスも『飮酒家になるのも、聖人になるのも、つまり同じ道をたどるのである。飮酒家は初め一杯飮み、二杯飮みして居る中に何時しかそれが習慣となつて、終に大飮酒家になるのである。丁度その如く聖人になるのも、亦一つづゝ善い事を行して居る中に、何時しかそれが習慣となつて、終に聖人となるのである』と言つて居る。されば兒童の時からキリストの爲、敎會の爲に働く習慣をつけて置かなければ、大人になつてから、善の爲に働く樣になりはしない。今日敎會のやり方は、心理的でもなく、科學的でもなく、實に無茶苦茶であつて、只祈りさへ

發問及び暗示

○共勵會は何時、何處で、誰が設立したのである乎。

○共勵會は何の必要から起つて來たものである乎。

○共勵會の大原理は、新教育學に如何なる關係を有つて居る乎。

○英語の「チーチング」と「ツレエニング」とは、どう違つて居る乎。

○日曜學校と共勵會の關係は如何。

○進化の原理は教育學に如何な貢獻をなした乎。

○心理上思想と實行とは如何な關係がある乎。

○活動は兒童に取つて何である乎。

○大人の心理の順序と兒童の心理の順序とは如何に違つて居る乎。

○共勵會の制度と我邦の年期小僧の制度とは類似して居る乎。

○曾て學んだこともなく、又行つたこともなくして基督の爲め、教會の爲めに充分に働くことが出來る乎。

の日曜學校の數は千二百あるとのことであるが、若し千二百の日曜學校があるなら、少くとも四千の共勵會がなければ、日曜學校と相須つて、兒童の宗教的發達を圖ることは出來ない。日曜學校が千二百あつて共勵會が二百しかないとすれば兒童の多くは不具者にされるのである。手ばかり發達して足が發達せず、全然で一寸法師の樣であるのは、見たばかりでも隨分可笑しい話ではない乎。

以上論じた所に由りて、日曜學校と共勵會とが、如何に密接なる關係を有つて居るかといふことが知れるであらう。日本には「日本共勵會同盟」といふ者があつて、其の本部を岡山に置いてある。而して毎月『共勵會雜誌』といふ者が、其處から發行されて居るから、若し共勵會の事を詳に知りたいと思ふ人は、直接本部に向つて問合せて下さることを望むのである。

第五編

幼年教育百話

田村直臣著

○アリストートルの善人となるの法は何である乎。

○ゼームスの大飲酒家になるも聖人になるも、心理上の法則は同一であるとは、如何なることである乎。

○今日の教會の活動しない理由は何である乎。

○一個の日曜學校に幾千の共勵會が有るべき筈である乎。

○共勵會を活動させる種々の方法の中其大切な者は何である乎。

○共勵會の本部は岡山に在り、又共勵會雜誌も其處から發行されて居る。

第六　かたわの獅子

政吉といふ子供と義一と云ふ子供と、學校へ行く道で。

義『政ちさん、昨日電車に乘つて何處へ行つたの！。』

政『君は僕が昨日何處かへ、行つたのを宜く知つて居るねへ。』

義『僕は君が、ニコ〳〵して阿父さんと一緒に京橋から電車に乘つて居るのを見たよー。』

政『ウン、昨日は面白かつたよ、上野へ行つて獅子を見て來たよ、君はまだ見ないかい。』

義『まだ僕は見ない、畵では見た事があるが、如何だ畵とは違はないかい。』

政『行つて見たまい、體と云つたら、君の阿父さんよりも大きいよ、顏といつたら、畵に書いてある鬼の樣な恐しい顏をして居るよ、おまけに眼

市場で買つて來て、人間をも人間と思はずに、酷い獸の取扱をすると
さー、此のお金持の家に一人の僕が居つたが、大變な働き者で、骨惜み
なんかは、少しも致ないで、朝から晩まで、一生懸命で、よく〳〵働くの
に、御主人は大變無慈悲の奴で、少しの過をほじくり出して、罪もない
のに、哀いさうに鞭で、ビシヤリ〳〵とたゝくから、常に手や足に、生き
づの、絶えた事は、なかつたさうだ。

夜になると、此僕は、臥床の中で、獨で毎晩きづに膏藥をはりながら、
ウン〳〵と泣いて居つたとさ。

或る晩の事であつたが、何んだか、非常にふさいで居つたが、己も斯
樣酷いめに、毎日〳〵逢うては、とても辛棒は出來ない、機をうかゞつ
て家出をしやうと決心をしたさうだ。

次の夜、御主人も、仲間の者も皆、シーンと寢沈まつた時に、靜かに雨

の玉と云つたら、水晶の様に、ピカリ〳〵光つて居るよ、力と云つたら、牛でも馬でも、人間でさへも、唯一打で殺してしまうよ、怒つた時には、雷様が五十も百も、一緒にガラ〳〵ピシヤリと云ふ様に恐しい、ひどい響がするよ。』

義『獅子は獣の内の王様と云ふから、ほんとうに恐いだろう。』

政『昨日獅子を見て來て、阿母に獅子といふ獣は、恐しい、恐い獣だと云うて、話すと、阿母のおつしやるには、この恐い、恐しい、獣でも恩義を忘れずに、恩返をする、良い性質があるというて、面白い、長い獅子のお話を聞いたから、僕、君に其話をして聞かすから、よく聽き給へ。』

義『一寸此石に腰を掛け給へ。』

政『昔昔、大昔、千六百年も以前に、亞弗利加といふ、熱い國に、大層な、お金持があつたとさ、此の國では、人間を馬や、牛や、鳥の様にお金を出して

から、よく〳〵獅子を見ると、足を大變に傷つけて、血を足から流しながら、ちんばを引いて、居つたとさ！。

僕は恐々獅子に、近よつて足を見ると、足に何だか、大きな棘がさゝつて居つたから、大きな獅子の足を、肩に乘せて、足にさゝつて居た剌を取つて、やつたとさ！、すると獅子は有り難う、有り難う助かりましたと言はんばかりに、頭をさげ、犬の様に肩に足を掛けたり、又た大な舌で手や、足をペタ〳〵となめたとさ！。

此の日から、獅子と僕とは大層仲のよい、朋友となつて、獅子は、毎日何處からか、食物を運んで來て、此の恩人を養つて居つたとさ、僕は茲で中入にしやう、斯様のべつに話すと、疲れてしまふよ。」

義「君水でも飲んで、これから先を確りやつて呉れ給へ、君は阿母の話をよく覺えたなー、君は話し家の前座位には今でもなれるぜー、これか

戸を開けて逃げ出したさうだ、然し逃げるは逃げたものゝ、懐に一銭の銭もなし、又誰といふて、便つて行く人もなかつたから、近所の眞暗がりの森の内へ、逃げ込み、其所で其の夜は、堅い石を枕として、恐わ〳〵寝たさうだ。風の音で朝早く眼を醒して見ると、向から、恐しい一疋の獅子がやつて来た。是は大變潮うの事で、辛い主人の家から出て安心だと、思ふ間もなく、又々この恐しい獅子に、出逢つたから、眞青になり、體はブル〳〵慄へ、戰ふに及もなければ、鐵砲もなく、逃げるにはつかれて逃げる事も出來ず、穴にかくるゝにも、近所に穴はなく、につちも、さつちも、何する事も出來ず、進退これ谷つたとは、此の事で、唯だ死ぬるも、生くるも、神様におまかせ申す外仕方がなかつたさうだ。

獅子がだん〳〵と近よつて来るのを見ると、實に奇態だ嚙みかゝる様子もなく、何だか、イタイ〳〵助けて呉れ〳〵と云ふ風であつた

から、悄れて、座つて居つた、次の部屋ではウーウーと獅子の大聲が聞えた、見物人は其の獅子が、非常な勢で、次の部屋から、飛び出て來のを見て、顏を青くする者もあつた、ブル〳〵慄へて居つた者も居つた、大聲を出した者もあつた。

嗚呼、危機一髪、僕の生命は、瞬く間に、なくなる所である、見物人は皆、堅唾をのんで、見て居つた、實に奇態なのは茲だ、獅子は僕のまぢかに來ると、ウーウーといふ恐しい聲は止んだ、恐ろしい眼の光は、消えてしまつた、見ると、飼狗が主人にふざける樣に、肩に手を掛けたり、手や顏をベタリ〳〵となめたとさ、この有樣を見た、役人や、僕の主人は驚いたも、驚いたも、非常に驚いた、其の上に、僕から自分が一度、山奥で獅子の足の莉を、ぬいてやつた、恩を忘れず、恩返しをしたのであると聞た時は、非常に驚いたばかりでなく、誰れでも、皆非常に感服したさ

ら扇子でも持つて、もつとやり給へ。』

政『お話變つて、家の方では、僕が夜逃げをしたといふので主人公は目の玉を怒らし、やかんあたまを、あつくして、其の由を役所へとゞけ出し、四方八方に手を廻して、探しましたが、如何しても、手がかりがありません、二三ヶ月後に、獵師の爲めに、捕まへられ、どう〳〵其主久公の家につれて歸られたそうだ。

一體此の國では金で買はれた僕が、主人の家から、逐げ出すと、其の刑罰は、荒い獸にさき殺させるんだそうだ、それで此の僕も國法によりて、逃げ出した罰として、ある荒い獸に、嚙み殺される事となつた。

さあ、今日は逃げ出した僕が、荒い獸に嚙み殺される日だと、云ふので町の人々は成人でも、子供でも我先にと見物に出かけた。

僕は青い顏をして、土間の上に頭をさげて、涙をポツリ〳〵流しな

げ、柔しい聲で、

『なつと、なつと』

と賣り歩いて居りました。

すると向からきた、せいの高い、立派な鬚のある中々品格のある大學の帽子をかぶつた青年がしきりに、其の娘をながめて居りました。

小娘は其の青年を通りすぎ、恥かしさうに、下を向きながら、小聲で、

『なつと、なつと』

と再び賣聲をあげますと

青『なつと屋さん。』

小娘『はい有難う……いくらあげませう。』

青『僕は、なつとを買ひたいではありませんが、少しあなたにお尋したい事があります。』

うだ、殘酷な主人も、其の話を聽いて、非常に自分の、惡かつた事を悔い、僕の刑罰を、ゆるしてやり、家に連れ歸り、それから其の僕を大切に使つてやつたとさ！』

義『いや恐れ入つた、獅子の話を聽いて、感心だ、僕等もなんでも、神樣や、阿父や、阿母や、朋友から受た恩義を忘れてはいけない、一生懸命に恩を返さう、學校に行つて勉勵しやう』

と兩人づれで學校に行きました。

第七　なつと賣の小娘

九段坂の下で一人の十五六歳位になる、丈のすらりつとした、色の白い、丸顏で上品な愛きようのある小娘が、束髮で、ゑび茶の袴を少しく高くはき、足には靴を穿き、長いたもとを上に卷きあげ、手に平たい桶をさ

思ひなされて、人樣の縫いものをしたり、洗濯ものをしたりして漸うの事に私を小學校を卒業させ、今は神田猿樂町の東京女子中學院で勉勵いたして居りますが、一ケ月前から御母樣は、ひどいリョーマチスで洗濯どころではありません、針も動かす事も出來ませんから、月謝にはこまり、食べる事も出來なくなりましたから、止を得ず學校から歸つて參りますと、直其の足でなつと賣に出るのでございます。」と涙のながるゝ眼を長いたもとでおさへながら、何かくしなく物語りをいたしました。

靜に聞いて居つた、靑年は小供の時から。何不自由なく育つた者と見え、世の中には實に氣の毒な者があればあるものである、小說を讀んだりして涙を出した事はあるが、小娘から自ら實話を聞いて泣いたのはこれが始めてゞありました。

小娘『何の御用で御座いますか。』

青『見受けますと、あなたはなつと賣をなさる様な身分でない様に思はれます、夫には何か子細がおありなさる事と、思ひましたから、何かお助になれば致したいと思うて、よび止めた理由で御座います。』

と、如何にも質朴な、隱しのない、親切が自然と其の風采や言葉にあらはれて、居りましたから、小娘は、

小娘『御親切様にあり難う御座います、御見受の通り私は三四日前から、なつと賣を始めました、新參者で御座います。私は熊本藩の士族の娘で、お父さんに小供の時に別れ、お母さん一手で育てあげられた者であります、昔はかなり公債證書もあつたそうでありましたが、日本では女と申すと兎角馬鹿にされ、色々にだまされて五六年前には何にもない様になりました。母は私をどうか一人前の女にしたいと、

と述べ立てました。

十五六歳の小娘としては、非常に、氣高い獨立心がありました。

小娘は言葉をつゞけ

小娘『若し、御親切があるなれば、何卒なつとを買て下さい、五十錢の資本で一圓になります、一圓殘らず買つて下されば直家に歸つて勉勵する事が出來ます。』と申しますと

青年は生れてから、なつとと云ふものは嘗て見た事もなければ、食べた事もありませんから、何か甘いものと思つて

青年『それでは僕は一圓で買ひますから、皆下さい。』

小娘『それは有り難う御坐います。』

と云つて、桶の內からなつとを出し

小娘『どうも有り難う〳〵』と禮を述べて家に歸りました。

青年『私も熊本藩の者であります、私にも妹があつて學校に參つて居ります、若しや御さしつかへがなくば、私の家にお出でなさい、母も喜んで御世話を致します。』

小娘『有り難う存じます、私の様な者でも親切になさつて下さる御方がありまして私の家にお出で〳〵と云うて下さる朋友も、御座ります、又困るであらうと云うて金錢を持つて來て下さる御方が御座りますが、今まで數年の間、母一手で私を育て〳〵下さつたに、一ヶ月位母が病氣になつたからといつて、人様の御やくかいになつたり、又金錢をめぐんで戴きますことは如何も私は親に對して濟みません、學校も一二年内に卒業をいたしますし、又母の御病氣も、長くはありますまいから、私はどうしてもなつと賣をして獨立で親を養ひ學校を卒業いたしたい決心であります。』

母も妹も下女のお竹までが半分馬鹿にひやかしました、然し青年から感心な、なつと賣の小娘の話を聞いて、誰一人として涙を流さなかつた者はありませんでした。

小娘は一二年降つても、てつても、なつと賣をして母さんを養ひ、とう學校を卒業いたす様になりました。

小供には獨立心といふものがなければいけません。人の世話になるよりはなつと賣をしても自分を支へた方が餘程貴いのです。

卒業式の當日は、多勢の立派な、美麗な衣服をきた、學生や、其の親達は學校の講堂に一杯充ちました、卒業生は五十一人で、皆な十七八歳の立派なお嬢さん方でありました、衣服といつたら、皆、ちりめんの紋付、其の内に手織の木綿ぎものをきて、はげたゑび茶の袴をはいて居つた、一人の娘がありました。

青年は一圓のなつとをさげて行きましたがどうも〳〵鼻にプンと臭くつて仕方がありませんから、開けて見ますと腐つた様な味噌でありました、こんな物を持つて家に歸つても、何の用にも立つまいと思ひ、何度か溝に捨てゝしまはふとしましたが、まさか一圓も出して買つたものを、みす〳〵無益に捨てゝしまふわけにも行きませんから、いやながら、家までさげて歸りました。すると十二歳になる妹は兄が何か家にさげて來るのを見て

妹『おや、お兄さんお歸り、お土産を下さい、兄さん何を買つて來たの！、兄さん何だか、くさいよ！。』

母も聲をそろへて、何だかくさいよーと云ふのを聞いて、青年は大へん閉口をしましたが、仕方がありませんから、一圓で買つたなつとを見せますと。

と云うて其の卒業證書と御ほうびをお母さんの手に渡しました、すると萬堂の人々は皆拍手喝采を致し一時は雷の様な音がしました。其の内常子萬歳、常子萬歳というたものは一圓でなつとを買つた青年でありました。

第十一　十二人の養子

八王子在の豪農とまでは云へませんが、田畑の十町歩ももつて居る、可なり教育のある立派な農家がありました、此の家に秀太郎と申す今年取つて十三歳になる非常な天才のある子供がありました。村中のものは此の子供を神童と字名しておりましたが、小學校を卒業する時は優等で卒業いたしました、今年は愈々東京に行つて早稲田中學に入學が出來ると思て非常に樂んで待つて居りました。

校長は卒業式の演説を終り卒業證書を渡さうとして、大聲で澤井常子と呼びますと、手織の木綿衣服をきた、はげたゐび茶の袴をはいた、なつと賣の小娘が、實に奇體です、五十歳位になる、きたない衣服をきた女の手を引ぱつて、校長の前に進んで參り、自分は校長の前に立ち、其の女は、其の側の腰掛に坐らしました。

校長は此の度卒業生五十一人の内第一番の大名譽を以て卒業した、卒業生は澤井常子であると云うて、卒業證書と賞とを渡しますと、滿堂の人々は皆手をたたいて賞めました、すると其の娘は側に坐つて居つた母を立たせて申しますに、

小娘『私は自らこの卒業證書や、御賞を受くる値はありません、この私の母が涙の内に、神の御助により、私を育てゝ下すつたお影でかく名譽を以て卒業する事が出來ました。』

と見え、神童といはるゝ秀太郎を亡くなし、村中が唯一人の子供の爲に火が消えた様になりました。

兩親は天にも地にも唯一人の秀太郎を失ひました日から、家庭は暗黑となり、兩親の目から涙の絶えた事はなく、何につけかにつけ思ひ出すものは秀太郎です、寢て夢みるものは秀太郎です、鏡の前に立つて自分の顏を寫そうとすれば其の鏡にうつるものは秀太郎の顏です、秀太郎々々と云うて一年も心淋しく暮して居りましたが、秀太郎の兩親は早や五十以上で、自分で再び子供をもつ望はありませんから二人相談の上、秀太郎の代に、養子をとる事に一決いたしました。

東京麹町に博愛家庭と申して、哀な親なしの子供を十二三人も自分の家で自分の子供の様に世話をする家がありますから兩親は早々其の主人に手紙を送つて、若しよい子供がありますなら八月一ケ月試み

八月の極暑い日でありました、五人の朋友と連れ立つて思川に泳ぎに參りましたが、其の五人の内の一番弱い太郎と云ふ子供が向の岸に泳ぎ行かうとして、急流の爲めに下に流され、水を飲んでアブアブして居りましたから、秀太郎はよくも泳げませんでしたが、友達の死ぬのを見のがしにするわけにはいきませんから、自分も幾分か險のんとは知りながら、助に飛び込みました、すると見る間に流されました、然し太郎を助けやうといふ熱心が滿ちて居りましたから、太郎だけはやう〳〵の事に助けましたが、自分は非常に水を飲んで死人同樣になりました。

其の事が村の人々に知れますと、秀太郎の兩親はいふに及ばず、村中の人々が驅け付けて參り、百方手を盡くして、秀太郎を倒にして水を吐かしたり、火を燃いて身體を溫めたりして、出來る丈の方法を以て助けやうと致しましたが人間の生命は人の支配することの出來ないもの

中の物入でありますから、夫婦二人は首を傾けて相談をいたしましたが、どうもよい考もつきません、十人の子供を返さうとすれば如何にも氣の毒でたまりません、置こうとすれば懐がいたみます、然し大決斷をして何は兎もあれ八月一ヶ月は十二人の子供を自分の家に置く様にいたしました。

十二人の子供は東京に居るとはちがひ馬が廣場に放された様に氣が何となく延びた様であります、食物は畑から取り立てのものがたべられるし、空氣はよし、運動は思ひ存分できるし、十二人の子供は誰も東京に歸るのは厭になりました。其の上十二人の内一番よい子供が一人この家の養子になれると云ふ事を聞いて居りますから十二人の子供は落第してはたまらないと思ひ、子供ながらも非常に行に注意し、朝は早く起き、晝は思ひ〳〵に野に出て働き、夜は一生懸命に勉強し、十二

に一二人の子供を世話をして見たい、若し其の子供が氣に入れば其の一人を養子にいたしたいとの望をいひ送りました、主人は財政上非常に困難をして自分の家の子供をどうしたらよいか其の處置に對して考もし、祈もし、朋友とも相談をして其の方法を搜して居つた最中でありましたから、一二人と書いてあつた手紙を早合點に十二人と讀みましたから、主人は喜んだも喜ばないものか、十二人の子供によくいひきかし、汽車に乘せて家中の十二人の子供を殘らず八王子在に送つてやりました。

秀太郎の兩親は東京からよくも揃うて十二三歳位の子供が十二人もやつて來たのに驚きました、見ると皆が可愛い〳〵顏をして居りますから、一二人より家に置く事ができないから、あとの十人は東京にお歸りと云ふ事も出來ず、さりとて一ケ月でも十二人の子供を養ふには中

夫『己もそう云はうとして、居つた。』

婦『正太郎はどうですか。』

夫『正太郎は中々思ひやりのあつい處は秀太郎生寫だ。』

婦『そうとも〳〵正太郎は思ひやりのあつい子供ですよ。』

夫『信吉はどう思ふか。』

婦『あの子の目のぱッちりして居る處は秀太郎の目をまるであの子に入目した樣で、中々愛嬌のある目ですよ。』

夫『ウンそうだな。』

婦『常太郎はどう思ひなさいますか。』

夫『彼奴はなか〳〵骨がある、秀太郎の氣象によく似て居るよ。』

婦『そうですか常太郎は偉いものですよ。』

夫『竹太郎はどうだ。』

人の子供が居て喧嘩一つした事はなく、仲善く八月一ケ月も無事に暮しました。

九月の一日になりましたから夫婦二人は十二人の内どの子供を秀太郎の代に養子にしやうかと大切な相談を始めました、一時間も二時間も相談をいたしますけれども、なか〳〵まとまりません、夫は妻に向ひ夫『いくら相談をしても中々まとまりがつかないから十二人の子供を一人々々に意見を云ひあひ、一人づゝ刎ねのけて一番後に殘つたのを養子にする事にしやう』

とそれ丈は相談一致して一人々々に意見を付する事になりました。

夫『政吉はどうだ。』

婦『政吉は聲がどこか秀太郎に似て居る所があつて、政吉の聲を聞くと秀太郎の聲を聞く様で、何だかなつかしいです。』

る後にはたいした宗教家になるよ。』

婦『そうです、いつも私等の爲に泣いて祈つて居りますよ。』

夫『次郎はどうだ。』

婦『次郎は鼻筋が通つて眉毛の濃い具合は秀太郎の生き顔の様でどつか、氣高い處がありますよ。』

夫『あの子は何でも家柄の子だよ。』

婦『甚藏はどうですか。』

夫『あいつは勉強家だよ、一番朝早く起きて己等のまだ寢て居る内に獨で雨戸を開けるよ、秀太郎の後繼ぎになれるよ。』

婦『そうとも〳〵あの子には秀太郎の様に骨惜しみをする事はありませんよ。』

夫『長七はどうか。』

婦『竹ですか、身丈のすらりとして襟筋の處が秀太郎その儘よ、ホヽヽヽ。』

夫『そうだねー、よく似て居るな。』

婦『勇之助はどうですか。』

夫『彼奴は學問のたちがよい、十二人の内一番だろう。』

婦『そうですかねー。』

夫『富吉はどうだ。』

婦『富ですか、あなたあの子の歩き振をよく御覽なさつたか、前足に力を入れて歩く處は秀太郎にそのまゝですよ、よくもまあ似たものですね。』

夫『奇態だねへ。』

婦『忠雄はどうですか。』

夫『彼奴は子供に似合はぬ宗教家だ、聞いて居ると秀太郎の祈丸寫であ

上野公園では毎年春秋に太平洋畫會と申す油繪の展覽會が催されます、此の秋は毎度と違ひ大家の油繪も出品し又近頃佛蘭西から歸つて來られた若手の畫工も、筆を揮うて書いた珍しい新奇な、風變のはんじ者の樣な畫を出すと云ふ事であります。未だ展覽會の開かれぬ先から小學校の子供達の間には誰云ふとなく大評判になりました。今日は愈々開かれると云ふ十月五日の早朝から、百人も二百人も小學校の子供達は、我先にと上野公園の展覽會場の門前につめかけましたそれとは知らなかつた切符賣が、七時頃に出張來て切符賣場へ入らうとすると、百人も二百人も子供が門前に集つて居るのを見て早がてんして、何か展覽會場に變事が起つた者と思ましたが、子供は唯がや〳〵ワイワイ言うて更に明からず押あひの中を漸くの事で切符賣場に入りました此の切符賣は十五年もつゞいて毎年春秋に切符賣の役目を勉め

婦『頭の恰好といひ毛の墨の様に黒くて笑ふと靨の深く入る處は秀太郎の顔を見るやうですよ。嬉しい事ねへ。』

夫『彼奴は笑ふと中々よい靨があるなー。』

婦『誠一はどうです。』

夫『あいつか、正直だな、いくら金を貰つても馬鹿つかひする氣遣ひはないで。』

婦『ほんとにあの子は秀太郎のやうに正直です。』

と十二人の内誰れ一人として秀太郎に似ない子供はありませんでしたから、どう〳〵十二人は殘らず秀太郎の代に養子としてしまひました。

第廿六　親友

で右の手で心を指して居ります、其の心の上に「近」と云ふ字と「遠」と云ふ字がかいてありました多勢の子供は此の油繪の前に立ち、何にが何だか了解りませんから、出駄良目の事を言うて譽めて居りました。

梅吉『ヲイ常ちやん、此の畫は何だらう、お可笑な、額の上に夏と冬と云ふ字が書いてあるよ、此の青年は「夏」と「冬」になると頭痛がするから、それを知らする爲めに夏と冬と書いてあるのかなあ。』

常吉『馬鹿を云ふな、藥屋のかんばんであるまいし頭痛を知らする爲に、畫工がそんな事を書く者か。』

梅吉『それでは何だらう。』

常吉『僕にはよくわからんが、夏と云ふ字は「か」と讀み、冬と云ふ字は「とう」と讀むから、此の青年は加藤清正の様に強いと云ふんだらうよ。』

梅吉『成程君は僕より餘程漢學者だよ。』

て居りましたが、此の度の様なことは始てだと申しました、午前九時に會場の戸があきますと、二三百人の子供は鯨波の聲をあげて勇ましく入りました、なる程這入て見ると今迄の展覧會とは違ひまして、一風變つた油繪が澤山あります、其の内で最も人の目を集めたのは、人物を書いた畫で、幅がなんでも六尺もあり縦が一丈もある額に一人の青年の立姿の畫であります、風采が勇ましくて何とも言はれません、頭には何にもかぶらず、衣服も立派ではありませんがキリッと着て、殿様の様なぬら〳〵したきかたでもなく、何處かに氣骨があります、誰が見ても一種の感化力のある、如何にも氣高い青年でどこやら懐かしい心持がいたします、奇妙なことには此の青年のいかめしき額の前方に「夏」と云ふ字と「冬」と云ふ字が書いてあります、又衣服の右の袖に「命」と云ふ字左の袖に「死」と云ふ字が書いてあります、そして此の青年は左の肩を半分脱い

こまるな。』

梅吉『なに今すぐ支那へ行く譯でもない、も少し漢字を習つて行くのだから、別に困りもせんよ。』

常吉『僕の考では、近と云ふ字は、近と讀む遠と云ふ字は遠と讀むから、きんゑんだ、そら金圓だ、此の青年はよく働いてこの通り金圓をふところに貯めて居ると云ふ事だ。』

梅吉『そうかな、して見るとこの青年は、加藤清正の樣に強く、腹のへらぬ樣に用心深く、能く働いて金圓を澤山ためたと云ふ事を敎ふる畫か。』

常吉『なか〳〵善く出來て居るな、僕等も此の青年の樣に善くならなくてはいかん。』

武雄と云ふ十三四歲になる子供は、先程から此の油繪を見ながら、梅吉と常吉の說明するのを默つて聞いて居りましたが、少しも梅吉と常吉

常吉『そう言はれると僕も恐入るな。』

梅吉『では僕も一つ考へて見やう、袖に書いてある命と云ふ字は「め」と讀むね、それから死と云ふ字は「し」だね、なある程腹のへらぬ樣に米飯を澤山入れて置くと云ふのだ、用心深い青年だね。』

常吉『いやー、君も中々漢學者ではないか。』

梅吉『僕は成人なると支那へ出掛けて、日本の爲に一働する考だから「めし」位の漢字は讀めるよ。』

常吉『君、懷に近と云ふ字と遠と云ふ字の書いてあるのは何と云ふか。』

梅吉『そふさなあ、何と云ふ事だらう。』

常吉『君の漢學者で讀めないかな。』

梅吉『あればかりは僕にはわからん。』

常吉『支那へ出かける程の望みある人に、あれ位の漢字が讀めなくては

送つてやるやら、實に中のよい友達でありました武雄は此の畫を見て何となく感じたのは、自分が平日心の中に思うて居る繪よりも優つて居ると思うたからであります、武雄はニコ〳〵と笑ひながら家に歸りますと母は武雄に向ひ。

母『こんどの展覽會には大變面白いためになる畫が出てると云ふ事だが、お前はどの畫が一番よいと思うたか。』

武『はい一人の青年が如何にも勇ましく立つて居る處を書いた、人物畫が一番よいと思ひました。』

母『なぜ其の畫がよかつたのかい。』

武『はいこの青年の額に「夏冬」と、兩方の袖に「命死」と、心に「近遠」と、書いてありました。』

母『お前其の意味が善くわかりましたか。』

の説明には感心致しません、それはかりでなく書工の主意は二人の話の様な者でないと云ふ事を悟りましたけれども、何だか自分にも明瞭とは言はれません、唯其の書を見れば見る程慕はしく、云ふに云はれぬ心持が致しました、心には悟つて居る様ですが、口に出して云ふ事は出來ませんでした。

この武雄と云ふ子供は非常な感心の子供であります、武雄の友人に政太郎と云ふのがありましたが、三歳四歳の頃から一緒に遊んだり學校へ行つたりしておりましたが、政太郎の親が臺灣に行かねばならぬ用事が出來たので、一二年前に政太郎を連れて臺灣に行きました、行くと間もなく親はマラリヤ熱と云ふ病氣の爲に死にましたから、政太郎は歸るにかへられず大いに困りました、武雄は東京に二人で居るときと同じくまちはり、度々手紙をやり又少しでもためた金を皆政太郎に

親い友人と思うて居つた人から廿七所も傷を受けて死んだと云ふ事がありますが、學問や金や位の爲めに友となるのは頼みになりません、お金を貰ひたい學問が敎られたいと云ふので友人となるのは實の友の交でありません互に可愛がりあうて命を棄てゝも其の人に盡すと云ふのが眞の友だちであります、昔ユダヤの國の王樣の子にヨナタンと云ふ人がありましたが羊を飼ふ者の子供のダビデを愛し自分の友人と致しました此二人の間は互に可愛々々と云ふ心がつながれて友となつたのであります、あの油繪は親友の眞意を現はしたのですよ。』

と申しました、武雄は母の此の說明を聞いて、なほ〳〵親友の如何な者かと云ふ事を悟り、臺灣に居る政太郎を愛し政太郎の爲には何事も厭はず、あふるゝ樣な可愛いと云ふ心を以て政太郎を助けました、政太郎

武『充分に口に出し說明する事は出來ませんが、何だか誰云ふとなく天から敎へられた樣に、あの書は「親友」と云ふ事を示す書と思ひました。』

母『そうとも〳〵あの書は有名な書で、親友と云ふ事を顯はした書であります、あの靑年は頭には何もかぶらず、帶を堅くしめて居る事は、如何にも活潑で何時用があつても直何でも友の爲にすると云ふ事を示して居ります、額に夏と冬と云ふ字の書いてあるのは、例へ暑い夏でありうが、又極寒冬であらうが、何時でも友人の爲なれば夏冬を厭はない事を示して居るのです、また袖の命と死は友の爲に死ぬのも生きるのも決して厭はぬと云ふのを顯はして居ります、又心に近遠とかいてあるのは其の友が近くに居るも遠くに居るも心に於てすこしも變る事がないと云ふ事です、世の中には僞の友人と眞の友人とありますが、昔羅馬と云ふ國で、シイザーと云ふ偉いお人が今まで

お近『お母さん、お母さん。』

と云うて寥しがつて泣きますから、お父さんは唯、

父『お母さんはよい處に行つたのだ。』

と云うて慰むる外に言葉もなく、これには閉口する許りでしたが、自分も亦其の悲しいお近の聲をきく度毎に、胸は裂くる許りに亡き妻の事を思ひ出して、唯涙をこぼすばかりでありました。

月日の經つのは早いもので、昨日亡くなつたかと思ひました母の一週忌も、もはや明日となりましたから、父は母の爲めに立派な石碑を立て、當日は三人の子供を連れ、青山の墓地に、墓參に行きました、其の石碑の表には倉田貞助の妻、忠雄、由太郎、ちかの母花子と書き、裏には明治三十三年十月十八日永眠と書いてありました、父は三人の子供を石碑に近く呼び寄せて、

も武雄に助けらるゝばかりでなく、時々手紙を怠らず出して武雄をなぐさめ、悲しいときも苦しいときも互に力になつて助けあひました後後は二人とも偉人になつて、死ぬまで中よく世の中の爲に働きました、まことに親友は神様のたまものです。

第四十九　母の石碑

芝田町一丁目に倉田貞助と名札の打つてある大きな門構の屋敷がありまます、この家では、此近傍で貞女といひ賢母と評判された細君が亡くなり、野邊の葬をしましたが、十五才になる忠雄と、十三才になる由太郎と、五つになるおちかの三人は、二人とない大切な母を失ひ、母さんの愛情は消えて、家庭は淋しくなりました、未だ年のゆかぬおちかは、可哀そうに夜になると、毎晩悲しい聲で、

られ、毎日々々學問はそつちのけにして、親を欺しては金を引き出し晝の内は、今日は、牛肉店、今日は汁粉屋、今日は銘酒屋、今日はビーヤホールと其處此處の區別もなく遊び歩き、夜もとびあるき、墮落も墮落、手も付けられぬ腐れものとなりました。東都中學よりは退校を命ぜられ、親切な品行のよい堅氣な朋友からは見離され、親には毎日の樣に意見をされますが、馬の耳に風、豆腐に鎖、何の諫も聞き流し、何の意見も心に留まりません、毎日家を飛び出し、惡事といふ惡事は爲盡し、倉田忠雄と云へば東京での荒れ者、巡査でも誰でも手を餘し、どうする事も出來ない惡靑年となりました。忠雄は母の在命中は感心な子供と云はれ、母は末頼もしく思ひ、非常に喜んで居たのにも係らず、まだ母が死んでから三年も經つか經たないのに、よくも變れば變るものであります、嗚呼惡の感化力は實に強いです、實に恐しいです。父は遂に止むなく忠雄を勘

父『お前達は此の石碑に書いてある文字を決して忘れてはなりませんこの石碑に、忠雄、由太郎、ちかの母花子と書いてある通り、お前達の心にも確りとこの文字を彫りつけておいで。若しお前達の内誰でも不品行ものになつて、お母さんの面に泥をぬるやうな事がある時は、必ず其の者の名には漆灰を埋めて、其の名を消してしまひますよ。いゝかい自分の名を消されるやうな者になつてはいけぬよ。お母さんは生きておいでなさる時は、貞女賢母と云はれた事をよく覺えて、母の名に對して、決してわるい事をしてはいけないよ。』

と誡めますと、三人の子供は涙を流しながら、父の言葉をよく心におさめて、母の墓所をあとに見て家に歸つて參りました。

明くれば明治卅五年、忠雄は東都中學の第三年生となり、生意氣盛りの青年時代となりましたから、いつの間にか惡青年の仲間につり入れ

歌は死んだ母がいつも自分を寢かす時に歌つてくれた歌でありました。鬼の樣な忠雄の心も、子供の時を思ひ出して、死んだ母の聲を聞くやうで、非常な感に打たれて、今夜始めて少しは自分の惡事を悟るやうになりました。然し寄宿所に歸つて見れば見る事も聞く事も惡事許りで、少しく悟り始めたのに、亦元の通りとなり、歌の事も母の事も忘れてしまひました。一度惡に染みた青年が、善い青年になるのはなかなか難事で、人間の力ではとてもどうする事も出來ません。十二月の寒い夜銀座通を通りかゝりますと、九つか十位の可愛い子が、太鼓をたゝき、大學傳道と書いてある灯燈をさげながら可愛らしい天の使のやうな聲で歌をうたつて歩いて居りましたから、立ち止まつて其の歌を聞いて見ますと、此の歌も亦二ヶ月前四ツ谷見附で聽いた歌と同じ歌でありましたから、又々昔の事を思ひ出し、死んだ母を思ふ心が一杯になり、

當し母の石碑より忠雄の名を取り消しました。

忠雄は住み馴れた懐しい住家より追ひ出され、哀にも身を宿すに處なく、親類に行つても、誰一人かまつてくれるものはなく、又相談する確實な朋友とては一人もなく、唯白袴隊の名義の下に東京の生くら書生が乗合つて豕のやうに汚い所に住んで居る寄宿所がありますから、止むを得ずそこに自分の身を宿すことに致し、ごろつきの様に、毎日毎日博奕を打つたり、少年に暴行をしたり、弱い者と見たら難題を吹きかけ、結局には金を搖つたり、壯士にたのまれて僅の金を貰つて亂暴をしたりして、悪い事を仕事に日を送つて居りました、忠雄は十月中旬頃、日の暮れ方、四谷見附を通ると、四五人の女の外國人と、三四人の美しい十八九のお嬢さん達が、堀の傍で優い聲を出して、オルガンに合はして歌をうたつて居るのを見て、突如立ち寄つて其の歌を聽て居りますと、其の

だんと深入して、結局は放蕩無頼やくざ者となり、悪の上にも悪を重ね、悪事といふ悪事を皆なし盡して、お母さんの顔に泥をぬつた不孝者の忠雄であります、私が小さな時に歌つて下さつた歌を聽いて、始めてお母さんの事を思ひ出し、善道に立ち歸る決心をいたしました。これからはどうしても善い者になりますからどうか、今までの罪を赦して下さい、お父さんから勘當は許され、誰が見ても善い者になつたと云はれる時は、必ず再び參つて忠雄の母となつていたいきます。」

と懺悔もし又お詫も致しました。

母は嘸かし墓處の下で自分の子供の悔改の涙をみて非常に喜んだでありませう。忠雄は今迄とは違ひ、品行を變へ、打つてかはつて善い青年となり、再び中學に入つて今までの汚名を取り消し、親の勘當も許

胸も張り裂ける許りとなり、始めて目から後悔の涙を流しました。二三日の後自分の仲間の者が死にましたから、青山の墓處まで見送つてやつた序に母の墓處に行つて見ますと、忠雄の母と石碑に彫りつけてあつた忠雄と云ふ文字は哀にも漆灰をつけて消してあるのを見て、忠雄も之に益々己の悪事を悟り、神の救を祈り、善人に立ち歸り、消された自分の名を元の通りになし、再び死んだ母の善き子供になるの決心を致しました。然し悪黨の仲間から離れて、今迄染み込んだ悪い心を洗ひ清めるのは、中々通常一様な事ではできませんから、忠雄も今日といふ今日は非常な大決心をした様子で、母の墓の前に跪き、涙を流しながら手を合はせて、

忠雄『お母さん、どうも濟みません、お母さんがお死にになつた間もなく、私は悪い友達に勸められて、一杯の酒を飲んだのが手始となり、だん

歌て聞かせます。然し仲々思ふ様には參りません。するとお鶴は例の青筋を立て、恐い顔をしてカナリヤを叱り付けます。終には側に聞き兼ねて優しく止める妹のお竹にまで惡口を聞きます。

いくらカナリヤが如何な歌でも歌へると云つても、人間でも二日や三日かゝらねば覺えられぬ「君が代」を一週間や二週間で覺えさせ様とするのは、少し無理です。お鶴は如何かしてカナリヤに「君が代」を教へ様と思つて、一日でもカナリヤの籠の前で「君が代」を歌ふ事を缺かした事はありませんでした。

或る日田舍から親類の人が參りまして此の有様を見、お鶴に申しますには、

『お鶴さん、カナリヤに何の歌でも教へ様と云ふのは、仲々な事です。僅か一ケ月や二ケ月で教へる事は出來ますまい。父さんや母さん

少しもカナリヤを見せません。此のお竹と云ふのは今年八歳になる娘でありますが、不幸にも生れて程なく足を痛め、跛をひき乍ら歩くと云ふ様な可憐想な娘でありました、此様な不具な妹でありますから姉のお鶴はそれこそ大事にして可愛がつてやらねばならぬのですが、我儘な性質は仕方がない者で、何一つとして情をかけていたはつてやる事はありません。

顔は心の窓だと申しますが、なる程此のお鶴の顔を見ますと、女らしい優しく崇高い處は薬にしたくも無く、何時も青筋をたて口を尖らし、眞實に額に角でも生えてたら鬼とでも見える位です。誰でもお鶴を一目見て、あの娘はいぢの悪い我儘な兒だと申します。

然しお鶴は感心な事には、如何かして此のカナリヤに「君が代」の歌を教へ様と、毎日毎日熱心にカナリヤの入つてる籠の前に坐り、「君が代」を

之を見てお鶴もあゝなる程教育と云ふ者はむづかしい者だ、親が悪い子供をよくするには如何に困るか知れないと、少しは自分の身を顧みて耻づる處がありました。

或日の事です、近所のお婆さんが參りまして、

『お鶴さん、私の家のカナリヤが、如何した者か二三日前から病氣でしたが、今朝から急にめくらになつてどこに、水が入つてるか、又所處に餌があるのか少しも解らないので困つて居ります。何卒私のカナリヤをあなたのカナリヤの側に置いてやつて呉れませんか。』

と申しました、いつもなら一言に嫌ですと云ふのですが、カナリヤの歌を教へてから幾分か自分の悪い性質を悟りましたから、嫌ながらも承知してお婆さんのカナリヤを自分のカナリヤの側に置く事に致しました。

が子供を教育すると同じであります。子供をよい子供にするには、親は可憐想だと思ひ乍らも叱つたり、又暗い押入の中に入れたりして、何でも苦を經て後によい子供になるのです、私は前に一羽の鶯に一つの歌を教へるのに一年もかかつた事があります。然し教へる時には、明るい處で教へないで眞闇にして教へるのです、だから何時でも籠の上に風呂敷か何かかけてするのです。」

お鶴は此の言葉を聞いて非常に喜び、それからはカナリヤを闇い押入の中に籠に入れたまゝ置き、自分は押入れの外に立つて「君が代」を歌つてやりました。

成る程カナリヤは今までよりは餘程早く覺える様になり、又聲も大層よくなりました。其の後六ヶ月も立つか立たない内には其れは、其れは優しいよい聲で「君が代」の節を歌ふ様になりました。

ロと流しながら、

『お竹ちやん。』

と云ふたきり何も云へなくなり、其處に泣き伏して終ひました。お竹は優しい聲で、

『姉さん、私は姉さんの今までの行爲を何とも思つて居りませんでした。姉さんに怒られた時も、いぢ惡くせられた時も、何卒姉さんが好い人になる樣にと神樣に祈つてたの、姉さん私はあなたを愛します。』

と小さな紅葉の樣な手で、泣き伏してるお鶴を抱き起こしました。でぢつとお鶴の顏を見ますと、今までの顏とは違ひ、天使の樣に光つて見えました。

『姉さん、お顏が變りました。』

と云はれてお鶴は部屋にかけてあつた姿見で自分の顏を見ますと、成

お鶴のカナリヤは大變親切な鳥でありましたから、盲目のカナリヤが來た日から、少しもいぢ悪くする事なく、自分の口から盲目のカナリヤの口へ餌を入れてやり、又は水を飲ましてやり、まるで自分の子供でも世話をする様で、誰が見てもお鶴のカナリヤの親切に感心しない者はありませんでした。

お鶴は自分のカナリヤの親切なのを見るにつけ、今まで妹に非常に不親切であつた事を悟り、始めてあゝ私は人間として生れ乍ら、同じ血を分けた、然かも生れつきの不具者の妹に、何に故あんな邪慳であつたらう、あゝ悪かつた。カナリヤですら盲目のカナリヤにはあの通り親切にするのに、今までの私の行爲を思へば思ふ程、胸がせまつて來る様だと、泣き乍ら直に兩親の部屋に行き、今まで自分の悪かつた事を白狀して神の前に其の罪を悔い、側に居た妹を抱きしめ眼から涙をポロポ

も増しました。其の五十人の孤兒は、重に福島縣宮城縣から來た孤兒でありました。其の内にお春と云ふ九つ位の女の孤兒は、實に可愛いらしい孤兒であります。お春の家は可成な百姓でありましたが、昨年の大饑饉で兩親は可愛いお春を助ける爲めに、自分達は食べる物も食べずに、反つて死んだのでありました。お春は何時も笑顏をして居て何となく崇高い娘でありました。仙臺地方の娘でありますから、言葉使は「ずゝ」と云つて少しも解りませんが、其の解らぬ言葉を聞くのが、又一しほの愛嬌でありました。

『お春さん何才』

と聞きますと、何だか口の中で「ずゝ」と申しますから、皆んなが其の云ふのを笑ひますけれ共、お春は少しも氣にはかけず自分も人と一緒に笑つて居ります。實にお春には一種云ふに云はれぬよい性質がありま

程今までの邪慳、貪慾、我儘な顔は變つて、柔和、同情、喜の優しい顔となつて居りました。

皆さん、如何です、お白粉をつけたり、キレー水を塗つたりしたつて顔は決して美しくはなりません。顔は心の窓です、心が奇麗にならなければ顔はお白粉や何かで美しくなる者ではありません。昔ステパノと云ふ人が神様の道の爲めに石でうち殺された時、その顔が天の使の様だつたと云ひます。誰でも天の使の様になりたいでせう。ですから心の清い美しい人におなりなさい。左様するとお鶴の様にあなた方が鏡に向ふ時、柔順しい、可愛らしい、笑つてる顔が鏡に映りますよ。

第七十二　感心な孤兒

東京小石川區にある東京養育院は、一ケ月の中に急に孤兒が五十人

作『次郎の奴は昨日僕の持つてる果物を取つて僕に明日菓子をやると云うたから、僕が取つたのだ。夫を僕をなぐるなどと云ふから僕も黙つて居ないのさ。』

と云つて二人とも大聲を出して今にもたゝき初めそうです、お春は又いつもの優しい聲で二人をなだめ、自分の袂にある菓子を出して作太郎に、果物を次郎にやりますと、今まで二人の手にあつた棒は自然に地に落ちて終ひ、急に二人ともニコ〳〵と笑つて次郎も作太郎も大きな口を開いて甘そうに食べ乍ら、お春に禮を云うて彼方に行つて終ひました。

或る日一人の教師が參觀に來られて、教場に百人計りの孤兒を集め色々よい御話をなされた後、孤兒に對ひ、

教師『皆さん父さんのある御方は手を擧げて御覽なさい』

した。お春が來てから東京養育院は實に春の樣に陽氣になつたと申します。泣いて居る小供があればお春は必ず其の傍に行き、「お泣きでないよ」と云つて懷から鼻紙を出して涙を拭いてやり、喧嘩をする小供があれば自分が必然間に入つて仲を好くしてやります。つい二三日前に次郎と云ふ十二三才の惡戲の小供が、大きなステッキを振りあげ、作太郎と云ふ腕白小僧をたゝかうとして、鬼の樣な顏をし乍ら逐つかけて行きますと、作太郎も負けぬ氣になり、大きな棒を振りあげ今にも大騷動になる處でありましたが、お春は夫を見急いで二人の中に入り、春『次郎さん、危ないからおよしなさい。』

次『作太郎の奴が僕の持つてた菓子を取つて返せと云つても返さないから、今是でなぐつてやるのだよ』

と云つて大きなステッキをふりかけますと、作太郎は

と云ひますと、お春は星の様な可愛らしい眼から涙をホロリ〳〵と、流し乍ら、

春『はい私の父さんもおつ母さんも私の爲に御亡なりになりましたが、其の外にモー一人父さんがあります』

と答へましたので孤兒院の者は尚驚きました。先生はお春に向ひ、

教師『お春さん、そのモー一人の父さんは誰でありますか。』

と問ひました。

春『天の神様は私の父さんであります、私の内の父さんは御死去になりましたが、天の父様が此の孤兒院で三度の御飯を食べさして下さいます、私は天の御父様がありますから嬉しくあります。』

と答へましたので、孤兒等は何故お春は何時でも嬉しくあるか、何故あんなに親切であるかを悟りました。

と云ひました。孤兒は互に顔を見合せ、此の先生は僕等が孤兒だと云ふ事を知らないのか知らん。孤兒でなくば孤兒院に來る筈はないのにと云はぬ計りの顔をして居りますと、其の百人の内からお春が可愛らしい手をさし上げました。皆なの孤兒は驚ろいてお春の顔を一緒に見ました。ある孤兒は、春ちやんは孤兒でないのに孤兒院に來たのだなと思つて居りました、敎師は

敎師『あゝ父さんのある子供が獨りありますな、モー外にはありませんか。』

と聞きますけれ共、一人としてあると云ふ者がありませんでした。先生は言葉を續け、

敎師『お春さん、あなたの父さんは饑饉の爲に死んだのではありませんか。』

ら、何卒一杯御膳をいたゝかせてやつて下さい。』

春『私の父さんも母さんも、饑饉の爲めに御飯が食べられなくて御なくなりなさつたのですから、お腹の空くと云ふ事は如何なに辛い事であるか知つて居ります、サアこちらへ。』

と云ふて穢ない盲人の手を引いてやりますと盲人は

盲人『私にも一人の娘がありましたが、今何處に居るのか解りません、今あなたの優い手に觸れて娘にさはる様な心持が致します。』

と云ひ涙をこぼし乍らお春の手に引かれて孤兒院の食堂に入りました、丁度其の時は午の十二時で皆御膳を食べ初め様としてる處でした。

お春は先生に向ひ申しますには。

春『今日は神様が御出でになつて神様の御席で御膳をお食りになる事が出來ませんから、今神様の代人にこの御方をお送りになりました。』

或る日一人の盲目の物貰ひが、穢ない着物を着て孤兒院に參りまして、一杯の御膳を呉れと申しました。孤兒達は孤兒院に物貰ひが來たのは此度が初めてですから、皆な穢ないと云つて嫌がりました。此の孤兒院の食堂にはいつも一つ空席がありました、孤兒たちは誰が茲で食べるのか少しも知りませんでした。年中誰も坐つた事はありません、それだのに御膳がちやんとあつて誰か來て食べる樣になつて居りました。先生達は孤兒たちにあの席は神樣の席だと云ひ聞かして居りましたが、子供達は神樣が如何して私共と一緒に御膳をお食りなさるのか、又何時神樣が來て御食りなさるのが疑つて居りました。お春は盲人の物貰ひを見ますと、直いつもの樣に親切に其の傍に行き、

春「叔父さん御膳が欲しいのですか。」

盲人「ハイ、私は此の二三日御膳と云ふ御膳を食べた事がありませんか

にも、よくお父様にお使へ申して、ほんとによい子供になつて下さい、これがお母様の最後の願です、お母様は前に天國に參りますから、どうぞよい人になつて後から天國に來て下さい。』

と申しますと、子供等は一層悲しくなつて、皆聲を出して泣き叫びました。すると不思議にも、庭の木の間に同じ様な聲で泣く者があります。母は大病ながらも其の聲を聞きつけて、

『あゝ何處かの赤子が庭前にないて居る様だ、マア可憐そうに……』

と仰つしやいましたので、年上の二人の娘は、跣足で飛び出して、庭中の木の間を探しましたが、赤子は愚か、人らしい者も居りません、二人は「はて奇妙だ」と尚方々を探ねて見ますと、又向ふの方から赤子の泣聲が聞えました。二人はその聲を辿つて行つて見ました所がこれは何様した事か、何千匹といふ蜂が赤子の様な聲を出して泣いて居るのであり

先生は是を聞いてニコ〳〵と笑ひ乍ら、

先生『其れでは神様の御席におつれ申して澤山御膳をあげて下さい。』

と申しました、お春は其の旨目の物貰ひを神様の席に坐らせましたので、孤兒たちは今日初めて神様の御席と云ふのは、困つた者を助ける處であると云ふ事を知りました。

第七十三　蜂の女王

明日の命も覺束なき大病の爲に悴れ果てゝ見る影もないお母様の寢床の傍に可愛らしい男の子二人と、温柔そうな三人の女の子とが、泣きながらじつと母の面を見つめて居ります、母は苦しそうに目を開いて、玉の様な涙を流しながら、

『お母様はもう到底助かる見込はないが、お前等は私のなくなつた後

死んだ時は何千匹の蜂があのやうに聲をそろへて泣き叫ぶのです。扨、蜂には三つの種類があります。第一のが女王蜂と云つてお母様の蜂です。次は貴族又は華族とか云ふ蜂で、其の次は平民の蜂であります。奇體な事には貴族の蜂は大の懶惰漢で、朝から晩まで女王の傍に侍つて、ぶら〳〵と遊んで居るばかり、何一つ働らいた事はありません。一寸人間の華族に似て居るではありませんか、平民蜂はそれと正反對で、終日休みなく働いて、花を探つて蜜を集めたり、巢を造つて女王を保護したりして、それは〳〵働き者です。何しろ此の平民蜂が居なかつたら、蜂の世界は一日も永生へる事が出來ないのですから、女王は非常に平民蜂を大事に思つて居ます。その內に靑葉の夏を過ぎさつて、霜が草や木を白く色どる時分になりますと、その勉强な平民蜂は何匹ともなく集つて來て、華族の蜂を皆殺してし

ました。これは俗に蜂の女王と申します母蜂が死にましたのを、子蜂が悲しんで泣いて居るのです。その有様を見て二人の娘は又急にこみ上げて來て、ウン〳〵と泣きながら、お母様の傍に返つて來て、

『お母様、あれは赤坊の泣聲ではありません、蜂がお母様を失くした爲にあゝして泣いて居るのです。』

と申しました。お母様は之を聞きまして、

『あゝ蟲ですら母を失なへばあんなに悲しがるんだから、私が死んだら子供等はどんなに泣くだらう、あゝ可憐そうに……』

と自分の身の苦しさも忘れて、唯子供の事を思ひめぐらし、熱き涙に暮れました。これが親の情です、暫くして母は首を上げて、此の世の名殘にもと、蜂のお話を致しました。

『蜂の様な蟲にも母子の厚い愛情があります。それ故、一匹の母蜂の

業をなす事が出來ませう、決して兄弟喧嘩なんかしてはいけません。

又蜂が人をさすと云ふのは、決して自ら好んでするのではありません。子供等が棒で突つついたり、威したりするものですから、止むを得ずさすのです。全く正當防禦の爲です。お前等も決して人を打つたり、傷つけたりしてはなりません。キリストは敵をすら愛せよと仰しやつたではありませんか。正義の爲なら防禦的に戰ふ事を、神樣はお許しになりますが、唯利己心の爲、人を傷つける爲に戰爭をする事は、決してお許しになりません。お前等はこの蜂の話を聽いて、此の三つの事を忘れてはいけません。即ち働と一致と正義との三箇條を覺えて居なければなりません。其の他蜂に就いては、まだ面白い事が澤山ありますが、お母樣はもう苦しくつてたまらないから、もう止めますが、何卒この三つの事を覺えて居て下さい。」

まひます。其の殘酷な事といつたら、目もあてられません。併しよく考へて見ると、蜂でも人間でも、役に立たない懶惰者が、酷殺されるのは當り前の事であります。お前等も平民蜂の樣によく働らいて決して華族蜂の樣な、懶惰者になつてはなりません。働かずに樂をする事は出來ません。働くのは人が神樣から授つた、最も大なる義務であります。御覽なさい內のお父樣が、人から豪いといはれるのは全く子供の時からよくお働きになつた結果ではありませんか。

蜂は尻に劍を持つて居ます。併し只一匹離れて居る時には、誠に弱い者で、何の力もありません、お前等は毛利元就が矢を以て子供等を敎へた話を、知つて居るでせう、物は何でも一所になつて居れば强いものであります。お前等も、兄弟五人が互に相助け、相救つて、苦しい時にも困難な時にも共に心を一にして働くならば、必度大なる事

世の中にこれ程哀な景色はありますまい。

五人の子供は母が最後の話を、片時も忘れる事は出來ませんでした。いやでいやで仕樣がない仕事も、お母樣の話を思ひ出しては、精出して致しました。兄弟の間に恨事や爭の起りました時には、又母の話を思ひ出してすぐ仲直りを致しました。友達の不禮を怒つて、思ふ存分なぐつてやらうと思つた時にも、不圖起る母の最後の誡によつて、振り上げた拳固を下しました。此の樣にして、五人の兄弟は、皆豪い人になつて、又一層仲のよい兄弟になりました。これは實にお母樣の最後のお話を覺えてよくそれを實行つたお蔭です。

と言つてさも苦しそうに口をつぼみました。五人の子供はこの有様を見てさも心配らしく、

『お母様！　お母様!!』

と聲を合せて呼びましたが、母は一寸首を動かしたきり、口をきゝそうにも致しません、子供等は愈々悲しくなつて、

『お母様！　お母様！　何卒氣を慥にして居て下さい。』

と申しますと、母は僅に目を開いて、嬉しそうに、而も安心した面持で子供等を見つめましたが、間もなく又目を閉ぢて安々と天國の旅路に向はれました。

子供等は母の骸に取縋つて、暫く涙に呉れました。噫、この時の子供等の心の中はどれ程悲しかつたでしやうか。

外には又母を失うた蜂の泣聲が、一入悲しげに聞えて居ます。嗚呼、

不許複製

大正三年六月二十日印刷
大正三年六月廿三日發行

——定價一圓——

編纂者　エチ・ヴキ・エス・ピーク

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷合資會社東京支店

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社書店
振替東京五五三(電話新橋一五八七

Uchimura Sensei Kōen Shū, by Mr. Kanzō Uchimura. Price .50. One of the most popular of Japan's Christian writers is seen at his best in this volume of thirteen lectures, delivered to the students of The Tōhoku University. The mission of Christianity and the fundamental doctrines of the gospel, are presented with great power.

Kirisutokyō Tetsugaku Ippan. (Philosophy of Christianity), by Rev. K. Takemoto. Price .50. A book on natural theology, of great value for educated men who wish to know what Christianity teaches.

Kirisutokyō Kōwa. (Popular Christian Lectures), by Colonel Gumpei Yamamuro, of the Salvation Army. A new volume of sermons and addresses by the author of "The Common People's Gospel," (Heimin no Fukuin) a book which has reached a circulation of over eighty thousand copies. Price 1.30.

Kirisutokyō Tai-i. (Outline of Christian Truth), by Rev. N. Tamura. Price .50. Mr. Tamura is best known as a leader in Sunday School work and as the author of stories for children. In this book he presents the most important doctrines of the Bible in a form suitable to the comprehension of young people under eighteen years of age. The book is divided into fifty two chapters, one for each Sunday in the year.

Tendō Rekitei. (Pilgrim's Progress), by Mr. U. Matsumoto. Price 1.50. A new and complete translation of this great Christian classic. The illustrations are good and the popularity of the book is attested by the fact that the first edition was sold within three months of its issue.

Yōnen Kyōiku Hyakuwa, by Rev. N. Tamura. Price 1.25. This collection of one hundred stories for children is not only invaluable for the home and for the Sunday School, but also for missionaries during their early struggles with the Japanese language.

E. N. WALNE,

Field Secretary.

CHRISTIAN LITERATURE SOCIETY OF JAPAN.

DEPARTMENT OF DISTRIBUTION.

Some Keiseisha Publications of Special Interest to Missionaries.

Gojin ga Honryō no Shōri. (The Victory of Our Special Character), by Rev. D. Ebina. Price .01. In this brief tract the author insists that Japan is not to transform Christianity but that Christianity is to transform Japan. It is a tract which cannot be scattered too widely among those who are at all prepared to consider religious questions. The widespread reading of this tract by school teachers and normal school students might well produce far-reaching results.

Yo wa Ika-ni Shite Kakushin wo Eshi ya. (How I attained a Firm Faith), by Rev. K. Takemoto. Price .50. An intensely interesting account of the author's Christian experience. No better book could be put into the hands of young men who are struggling with doubt, or young Christians who are having to face persecution. The book is of special interest to missionaries because of the graphic description which it gives of the conditions under which evangelistic work was carried on in the Japan of twenty-five years ago.

and has a foreign flavor. Some may question its usefulness on that account, but the simple fact is that the whole Japanese language has to-day a foreign flavor, and there is no reason to consider the language of this book any more foreign than any book must be that sets forth the story of the gospel. It is exactly the language that a Japanese speaker with a simple style would use in telling this story, and in the main the language the foreign missionary should eventually use. It is not easy to find books dealing with this kind of subject that use such long, colloquial forms, and on this account it is especially useful for first study.

The *Tsūzoku Fukuin Monogatari* deals with a similar subject in a somewhat more bookish style. One would hardly preach or teach using such short forms, but it is a useful book, and is valuable for purposes of comparison.

The *Kodomo no Kenri* and *Nijisseiki Nichiyō Gakkō* are from the pen of the Rev. N. Tamura. His style is always plain and correct, and his matter interesting. The vocabulary of these two books contains probably not a single word or expression that the student must not eventually know, and he could not do better at a later day than to make the latter book the object of most thorough study, until master of every word, expression and Chinese character contained in it.

The *Yōnen Kyōiku Hyaku-wa*, also by Mr. Tamura, is more difficult on account of its very colloquial form, but the stories are interesting, and will give those who look forward to Sunday school work an idea of the matter and form that is considered adapted to children.

Considerable pains have been taken with the re-printing, and it is hoped that most of the typographical errors that disfigure some of the originals have been eliminated.

One of the greatest fields for the usefulness of a missionary lies in the presentation of good religious reading to his friends and acquaintances,—but he should know at first hand the character of the books he offers. The selections offered in this book are samples of the literature now being put forth in increasing quantity and improved quality. The writer hopes that the study of these selections will be a first step, the first of many later ones, to a wide acquaintance with such literature on the part of many.

These selections are suitable for the first year of study. It is proposed to follow this with a Second Reader, made up of selections of greater difficulty, drawn from a wider range, but still with the purpose of assisting the younger missionary students scattered throughout the interior of the country.

H. V. S. PEEKE.

Saga, August, 1914.

PREFACE.

Impressed by the fact that there will always be missionaries engaged in the study of the Japanese language in their own homes, the compiler of this First Reader recently published a brochure entitled Suggestions for the Home Study of the Japanese Language. At its close was a suggested Course of Study, and this book gathers between two covers selections from the works recommended.

The book does not pretend to be made up of widely selected examples of the best Japanese literature. It is simply a collection of five samples of simple Japanese prose, which will, if carefully and thoroughly studied, open the way to an easy use of the colloquial language, and a more extensive examination of the literature of the country.

The books from which the extracts are taken are not difficult to obtain. Indeed most of them come from the press of the Keiseisha, and all can be procured from them. It is only for the sake of convenience that these extracts have been made, printed and bound together. It is to be hoped that the student will take these as samples, and procure the complete copies of any that appeal to him. After reading the excerpts, the reading of the entire books should be a comparatively easy task.

The first selection is from the *Fukuin no Hanashi*, published by the Tract Society. It is based on an English original

LIBRARY OF
Bangor Theological Seminary
22,290

CONTENTS.

Page

Preface i

Fukuin no Hanashi... 1

CHAPTERS I—IV.

Tsūzoku Fukuin Monogatari 75

CHAPTER IX.

Kodomo no Kenri 133

CHAPTERS I—VII, XI—XIII.

Nijisseiki no Nichiyō Gakkō 159

CHAPTERS I—VII.

Yōnen Kyōiku Hyaku-wa 217

Numbers 6, 7, 11, 26, 49, 55, 72, 73.

BANGOR THEOLOGICAL SEMINARY LIBRARY

DATE DUE